
歌の力～混沌に咲く絆（はな）～

洒落頭社

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歌の力ゝ混沌に咲く絆はな

【Nコード】

N9099W

【作者名】

洒落頭社

【あらすじ】

——全ては、少女が歌で東京タワーを崩落させたことから始まった。

何食わぬ顔で、日常の学校生活を謳歌する夏華（主人公）。だがその実態は、東京タワー崩落事件の真犯人だった。

内に秘めた思いから家族には打ち明けられずに、そのことを隠し続ける夏華。

そんな彼女をどんな時も見守ってきた兄。

そんな彼をずっと見続けながらに、叶わぬ純愛を嘆く義姉。

そんな悲劇を何とかしようと、もうずっと前からもがいていた義弟。

これは潔癖症な妹（主人公）と豪快な兄、切れ者の義姉に中二な義弟が織りなす異色のファンタジー。

関東最大の暴力団組織、その会長を親にもつ夏華とその兄。

関東最大の暴力団組織、その若頭（ナンバー2）を親にもつ義姉と義弟。

ヤクザ特有のダークで、どす黒い世界にあって果たして四人は本当の幸せをつかめるのだろうか！？

これは歌を巡る家族の、笑いあり涙ありの感動エンターテイメント。葛藤や衝突、そして絆を綴ったオリジナルストーリー。

主として、妹（美少女）と兄（美形）の家族愛がテーマに掲げられています（その他…ほのぼのとしたかけ合いや、合間で飛び交うギヤグー―切ないラブロマンスもあり！）。

※この作品は歌詞を物語に絡めています。

登場人物紹介

登場人物紹介

※本編未読の方は、ネタバレが含むことを理解した上でお読みください。

加藤夏華^{かとうなつか}..

本作の主人公であり美少女^{ヒロイン}。愛称は、「夏」。潔癖症でやることなすこと、完璧にこなさなくちゃ我慢ならない性格。なのでバラバラになった今の家族に、多大な不満を抱いている。家族には秘密にしているが、禁じられた異能の力（歌うことで、そこに込められた詞^{ことば}を現実^{現実}に反映させられる力）を使い、東京タワーを崩落させた張本人でもある。

加藤冬治^{かとうとうや}..

夏華の兄。妹とは違い豪快な性格で、一家の長として家族を支えている。

また、家族のことを一番に考えすぎるせいで、自分のことを等閑^{なおり}にしやすい。それ故、美男^{イケメン}でありながらに、女性にフられることが多い。

過去に、歌に関わる仕事をやっていた形跡あり。

加籐千己かとうちぢ..

夏華の弟であり、冬治の弟でもある。つまりは末っ子故、甘やかされて育てられてきた。

その反動なのか結果なのか、どうすれば怒られないかをよく知っている。

また、ゲームや漫画といった、二次元のものを愛でる厨二病な少年。それが災いして、身内によく迷惑をかけている。

ただそれが高じて、機械関係にはめっぽう強い。

戸籍上、夏華や冬治とは血縁関係があることになってるが、実際には血の繋がりはない。

加籐千世羅かとうちせら..

夏華の姉にして、暴力団組織——白道会はくどうかいの会長。

非常に頭の回る性格で、人を出し抜くことに長けている。

少々自己愛がすぎるくらいはあるが、家族を一番に思っている。

戸籍上、夏華や冬治とは血縁関係があることになってるが、実際には血の繋がりはない。

ただ千己とは血が繋がっており、実姉である。

昔、冬治とは恋仲にあった。

華道花かどうはな..

夏華と冬冶の実母にして、関東最大の暴力団組織——華道会かどうかいの会長。

近藤こんどう..

千己と千世羅の実父にして、関東最大の暴力団組織——華道会かどうかいの若頭。つまり、組織におけるナンバー2の実力者にあたる。

用語集

用語集

※本編未読の方は、ネタバレを含むことを理解した上でお読みください。

華道会^{かどうかい}..

関東最大の暴力団組織。

白道会^{はくどうかい}..

東京都心に拠点を置く、一暴力団組織。

華道会から分派した組織であるにもかかわらず、華道会との対決姿勢を鮮明に出してる。

先の東京タワー崩落事件で犠牲になったのがその元組員だったこともあり、現在は騒然としている。

歌族^{かぞく}..

古くから華道家に脈々と受け継がれる、特殊な血統を持つ家系のこ

と。それは歌うことで、そこに込められた詞を現実に反映させられるという、異能が揮える家族だった。

現状この力を使えるのは華道会の会長——華道^{かどう}花^{はな}と、その息子の冬^{ふゆ}冶^{うや}、他^{ほか}には夏華^{なつか}の三人だけである。

ただ、二〇歳^{はたち}までは歌うことは厳禁とする掟がある為、夏華はしてはいけないことになっていた。

序章 勸善懲惡【東京タワー】（前書き）

この作品は、ストーリーに歌詞を絡めています。

また、シリアスありきの笑いと感動を主眼に置いています。

9月の後半に初投稿し、現在、第二章に突入中です。

ペースとしては今のところ、毎日の更新ができています。

PS..

どんな感想でも大歓迎です。ぜひぜひ作者に構ってあげてくださいな！

序章 勸善懲惡【東京タワー】

序章 勸善懲惡

某日 深夜 東京タワー外縁

その日、携帯——タッチパネル式の液晶画面が、持ち主を死に追いやっていた。

その男は、真冬だというのに玉の汗をかいている。かけ上がる度、その雫が階下に落ちていった。力む両足は震え、足元が覚束ない。それでも、逃げるのをやめはしない。

思わずのけ反るほど、吹きつける強風が男の進行を妨げた。踏ん張りを利かせようするが、よろめいてしまう。何度、落ちる！？と思ったことだろう。もし手すりが無かったらと、考える度ゾツとする。

この階段は折返し階段だった。巨大な電波塔の一角で、踏まれるその一段は赤い。総段数はおよそ六〇〇で、普通は登りきるまでに一〇分と経たないものだった。が、今の今まで必死だった男にとって、それは苦痛以外の何物でもない。

つまり、足で登るには不可能な距離だった。なのに男は駆け上がる。なのに男は登っていく。その無謀とも言える高度を。

理由は決まっていた。こうすれば苦しめるからだ。現に男は、痛みで我を忘れる高さまで向かい、そこでお終りにしようと思っていた。

なのにできない。できなかった。恐くて……たまらなかった。何度も覚悟はした。諦めもした。けれどもそれ以上に、生きたかった。それだけのこと。それだけのことで、ほんのわずかな奇跡に

継る。

気づけば長時間かけ、到達する。てっぺん——大展望台前へと。同時に男はうつ伏せで崩れ落ち、倒れこんだ。その拍子に顔を打ち、目眩を起こす。肩で息をしていた。吐く息は白い靄となって左右に四散し、儚げに消えていく。突つ伏した背中からは、湯気がゆらゆら立ち上っていた。ふくらはぎはパンパンに膨れ上がり、足裏には激痛が走っている。一休みしたことで気づかされる、疲労困ぱい。もう一歩も動けそうにない。痛い。痛くてたまらない。

もう後はここでじっとしていれば、何とかなるんじゃないだろうか？

それ以前に、持ってる携帯を投げ捨てれば、この状況から救われるのでは？

(どうして……どうして!!)

男には分かっていた。その何れの問いかけも、こちらの願望ではないことを。

(何で俺が……俺が一体何したっていうんだ!!)

ふらついた足取りで何とか手を付き、立ち上がる。再度、痛みが走った。堪えきれず倒れそうになった所を、何かに支えられる。

壁だ。

そこには、文字が書かれていた。が、涙のせいでうまく読み取れない。映る字体はぼやけ、ぐにゃぐにゃに踊っていた。それでも、何が書かれてるかは知っている。なぜなら、過去に何度も足を運んだことがあるのだから。

壁の上部には『大展望台2F』と、そう明記がなされていた。

男は着こなした警備服、その胸ポケットに手を入れハンカチを取り出す。胸元には、かけられた名札があるが、そこに男の本名は無い。つまりは偽名。

男は大展望台、その内部へと足を踏み入れたのだった。

中の光景は真っ暗の一言で、窓から差し込む都会のネオンだけが淡い光を放っている。加えて、営業時間外ならではの静けさ。さっきまでが強風の音やら、甲高い足音やらで騒がしかった分、より際立って感じられた。

暗闇と沈黙の中、男は徐々に落ちつきを取り戻していく。手に持ったハンカチで余計な汗を拭い、被っていた帽子を取った。

顕わになった顔面は、とても警備員向きではなかった。強面で厳しい中年男性。明らかに極道そのみちを踏んだ過去のある顔つきである。

男は恐る恐るといった感じで、今度はズボンのポケットに手を入れた。感じたのは、過度の熱さ。その熱源を震えながらも驚掴わしづかむと、外に取り出す。

それは最新の、タッチパネル式の携帯電話だった。

そして、薄目ながら見た液晶画面は、真っ黒だった。

「は……ははは」

電源が勝手に落ちていた。つまりはバッテリー切れ。だから、もうお終い。助かったのだ。

チャリラリラ〜ン♪

「――！」

その時、儚い願望を打ち砕く、絶望の旋律イントロが奏でられる。場違いに陽気な、だからこそその不気味なサウンド。音源は電源を切ったはずの、この建物内のスピーカーから。最大限まで音量ボリュームが引き上げられている。

「ひぎいっ!？」

まだ何もされてないというのに、された後のような奇声を上げる男。経験からくる条件反射のようなものだった。

散々に打ちのめされてきたのだ。この詞うたに。

それは音痴な歌声――あんまりな女声だった。

? 始まりの歌 五線譜じゃ伝わらない 十八番ナンバー

でかけましょう 世界を君色に塗り変えてこう？

Aメロが、男を発狂させる。

？でかけましょう？で何故か自身の体が浮き上がり、横へなぎ飛ばされる。窓をがち割り、夜空へと。

粉々のガラス片と共に、闇に投げ出された男は血まみれだった。肌に刻まれた切り傷、そこから零れる生血より早くこの身は落ちてゆく。

凄まじい速度に、荒れ狂う風。体は否応なく振り回される。まるで糸の切れた人形のごとく、為すすべなく踊らされた。

冬空に、揺らめく人体が映えていく。

が、これで終わりではなかった。

再び、男は建物に引き寄せられる。重力を無視した、圧倒的な引力。

同じように窓ごとがち割り、中へと転がされた。

飛び散るガラス片が、その勢いの凄惨を物語っている。転がって落ちた男は、その先で深い血溜まりを作っていた。

ここはさっきまでいた大展望台二階でなく、その下部にあたる大展望台一階。その無音の空間では、荒々しい息遣いだけが反響していた。

「うあ……くっ……」

呻き声は意味をなさない。伝わるのは、どうしようもない悲哀。苦渋の語感に包まれていた。

（どうして……どうして!!）

叫びたい。喚きたい。けれども口が、動かなかった。ただ熱い。唇だけじゃない。顔も首も胸も腰も足も。熱い。熱くてたまらない。微動だにしない、うつ伏せの五体。その壊れた瞳は、ある文明の利器を見つめていた。

携帯電話。その持ち主と同じく、傷だらけの。

もう動かないと見られる、そんな傷物の画面を見るにつけ男は目を疑った。

(光って、る?)

電源が入れられたのだ。バッテリー切れの携帯に。

ありえない現実に、ありえないこの仕打ち。

気づけば、Bメロが終わるところだった。

「は……ははは」

喉の奥からくつくつと、苦しそうな引き笑いをする。それは、さきほどの安堵からくる笑いとは全くの別物。死を悟った人間が最後に見せる、あの世への笑みに近いものがあつた。異なる点があるとすればそれは、男が泣き笑いしているということ。足掻くことを諦め、それでも生きたいと思ってしまうている。願ってしまうのだ。そんな、板ばさみの自嘲。どうしようもなく切ない、生死の葛藤がそこにはある。

(これも——詞があれやったんだ)

間違いない。この携帯の非現実さは、Bメロが起こしている。そして、その画面には身の毛もよだつ四文字が並べ立てられていた。

『勸善懲惡』

そして、着メロが流れる。携帯特有のサビから始まる楽曲。それは場内のスピーカーとハモリ合い、混じり合って調和を利かせる。

(助けてくれ頼む助けてくれよちくしょおおおおおおおおお
おおお!!)

サビが歌い終わると同時、横一線の何かが、男の目線を横切った。響くのはキーンという耳鳴り。

そして、日本一有名な電波塔は真つ二つに裂けた。

出来上がったのは台形と、地に突き刺さる逆三角形。非現実的な光景がまた一つ、都会の夜景に映えていったのだった。

序章 勸善懲惡【テレビ中継】（前書き）

視点が、警備員からある人物へ変わっています。

序章 勸善懲惡【テレビ中継】

『たった今緊急速報が入りました！ 東京都港区にある日本を象徴する電波塔、東京タワーが真つ二つに切り離され、その上部にあたる先端が、公道の路面に突き刺さっているとのこと！ 繰り返します。たった今――』

部屋にあるテレビ、その画面内では「緊急速報」とのテロップと共に忙しなく番組が変更されていく。

電波塔が崩落したというのに、テレビ映りに何ら問題はなかった。それもこれも新しくできた東京スカイツリーのおかげと見ていいだろう。

女は手に取ったりリモコンをその騒がしさに合わせ、チャンネルを変えた。が、ある局では生中継を、また他局ではその道の専門家を招いての実況見分をと、やっтерことは変わらない。

どこもかしこもうるさい。女はその元凶にチャンネルを合わすと、終に電源を落としたのだった。その後、ため息をつく。

吐息で震えた唇には、艶やかな紅のルージュが塗られていた。靡く黒髪に、ファンデーションやらマスカラやらで整えられた顔つき。齢の割には背伸びした、そんな色香を漂わせていた。

チャリラリラーン♪

馴染みの着メロ（イントロ）が聞こえる。それは、大好きな人の歌。

女は携帯を手にとると、通話ボタンをプッシュする。その後、それを耳に当て声を発する。「もしもし」でない第一声を。

「説明はいらない。もう、ニュースで知った」

と結論だけを告げる。相手からの音声はない。沈黙が場を支配した。

ややもして、プツツという音が聞こえる。電話が切れたのだろう。「――これで……やっと始められる」

女は徐に立ち上がると扉を開け、風呂場へと向った。その後、脱衣所にて洋服を脱ぎ、装飾品を外して生まれたままの姿になる。

その裸は玉肌だった。まるで女神ビーナスの彫刻を思わせるかのような、均整の取れた美。女性の象徴でもある二つのふくらみは、申し分ないたおやかさだった。

女は風呂場の電気をつけ、その中へと入る。次にカランを回しシャワーを浴びた。その際、思わず口ずさまれた鼻歌。

その声色は、あの東京タワーたてもの内で響いた音痴な――あんまりな女声そのものだった。

ややもして、女は風呂から上がると寝支度に入る。持ってきたタオルケットを手に取り、まずは体を拭いていった。すぐそばには洗面所。

女は桃色の可愛らしいネグリジェに着替えると、今度はそこで濡れた長髪を乾かす。芳香性の強いシャンプーを使ってるせいか、ドライヤーの風と共に、椿の香りが鼻腔をくすぐった。鏡に映る風呂上がりの、くったりした顔。そこには妙な艶っぽさが醸しだされていた。

そうして髪を乾かしきったら、後にやるのは決まりごと。歯を磨き口を濯ぐゆす。ただそれだけ。

口内をすっきりさせると、女は床につくべく自分の部屋に戻った。薄暗く冷えた廊下を歩きながらも、手持ちの保湿用クリームを肌にこすりつける。感じるのはヌルツとした感触と、ヒヤツとした冷たさ。辺りがぼんやりしているので分からないが、きっと光沢ある、てかてかの肌になってることであろう。

そんな何でもないことを思ってる最中、異変それは起こった。どこからか声が漏れ聞こえてきたのだ。

それは、女性の色っぽい嬌声。音源は自分の部屋のすぐ隣。もっと正確を期せば、そこにあるもう一つの部屋、その扉を隔てて向こう側から。

いつものことだった。

なので女は気にせず、自分の部屋への扉を開ける。重い足取りそのままにベッドに腰をかけると、枕元に置かれた携帯――タッチパネル式の液晶画面を操作した。そこでやるのは決まりごと。朝の目覚まし、アラームの設定だった。

一通りすべきことを終わらせると、つけっ放しだった電気を消すと同時に、暗闇が部屋中を満たした。女は慣れた足取りで布団へと入る。

布団に包まれた、温いベッドの中。

なのに女は寒かった。真冬だからではない。無論、季節ならではの寒さに両手両足を冷えきっている。すぐには寝つけそうにない。両耳が冷たく、思わず顔まで掛け布団を引き上げてしまう。が、そうではない。問題は、その寒さではないのだ。

悪寒。

実の所、女が苛まれてるのは、この類の寒さだった。

(――とうとう、やったんだ)

静寂の中、とうとう今日のことが反省されてしまう。見て見ぬふりなど、できようがなかったのだ。

遂に罪を犯した。取り返しのない大罪。

背負ったものの重たさに、心が押しつぶされそうになる。知らず震える手で、震える自身を抱きこむ。

それでもやめない。やめてはいけない。

必要だからだ。必要悪。

それでも、けれども、

(……………苦しい)

女は胸に手を当て、目一杯握り締める。掴まれた、何でもない痛みに泣きそうだった。堪らずベッドの端、そこにぴたりとくっつ

けられた壁へと体をすり寄せる。その壁を隔てた向こう側には、さつき聞いた嬌声が今もなお鳴り響いていた。

「……………」

目をつぶり、耳を済ませることで聞こえる、もう一つの声色。

それは、大好きな兄^{ひと}の声。

その声が聞けただけで、女には十分だった。彼がいる。それはもう、どうしようもない安心感だった。悪寒も、痛みも、罪も、その重みも——その全てから守られる。守ってくれるという絶対的な関係。それが、この家族のあり方。

とはいえ、この冷え冷えの体感である。すぐには寝つけない。まどろみに落ちゆくまでの数十分。もどかしくはあった。寒気もした。それでも、

「……………」

やっぱり怖いことなど、何一つとしてなかったのであった。

第一章 不確かな真実（うた）【始まりの朝】

第一章 不確かな真実^{うた}

女の朝は、今日も変わらずだった。

目覚ましのアラーム——その着メロが、頭に響いてくる。

すかさずピツと、それを一音で止めた。動きに無駄がない、一瞬の出来事。必要最低限の情報で事なきを終えるあたり、その潔癖さが垣間見える。

というより、女はそもそもが潔癖症だった。それも極度の。本人はそれほどでないと思ってるが、周りから言わせるとそうだった。

「うーん」

気だるそうに上体を上げると、眠気眼をいくらこする。愛らしいその仕草は、男性陣が色めき立ちそうな可憐さが窺える。女はこすっていた手を持ち上げると、ゆっくり背伸びをした。気持ちよさに変なヘタレ声を上げてしまう。

「ふわあああ」

自然とでる大きなあくび。その開かれた大口を、女は咄嗟^{ひゅと}に手で隠す。恥じらいはどんな時でも忘れない。

起き上がるとベッドを這い出し、窓側に向かった。

後、カーテンを掴むと横に押し広げる。当然の如く、部屋に差し込む陽光。覚悟してたものの、眩しさに目はしばたたかれる。

けれども、おかげで室内が明るくなった。カーペットでは所々に陽だまりが、揺れてはたゆたっている。

「……………よし！」

女は気合を入れた。それは別に、これから今日も頑張るぞ、というような呑気なものではなく自己暗示のようなもの。自分に言い聞かせてるのだ。なぜなら、ここからは別人になるのだから。罪を犯

した女ではなく、一家族の妹——加藤夏華^{かとうなつか}として。

夏華はこれから会おうとする人に、話せないでいたのだった。自分が罪人であることを。

だから演じなければいけない。こなさなければいけない。いつも通りを。これまでもそれで通してきた。だから大丈夫。

夏華は一度、両頬をばんっと叩くと扉に向かった。ためらいなくその取っ手を掴み、捻ると押し開ける。勢いで廊下を半円に回ると、すぐ隣の扉を先と同じく押し開ける。

そして機械的に開けた先——ベッドには、裸の二人が寝そべっていたのだった。

加えて、カーテンの隙間からの木漏れ日が、ぐったりした二人を照らしている。つんと鼻をつくのは、雄雌の動物的な匂い。劣情の余韻からくるそれは、まぐわいあってこそ、そんな情景で満たされていた。

いつものこと。

毎度のことなので驚きもしない。初見ではさすがに、とんでもない反応をしてしまったがもう慣れてしまった。

初めにこれを目にしたのはそう、中学一年生の夏、八月一四日の二三時二〇分、一階のリビングであった。喉が渴いたと思って起きてしまったのが、運の尽き。当時、思春期真っ盛りの夏華にとつて、その情景は衝撃的だったしかいようがない。顔を赤らめ「ご、ごごめんなひゃいっ！」なんて言ってた初心^{うぶ}な自分がそこにはあった。

とはいえ、今ではもう高校生のご身分。あの時のことは人生の恥ずかしい汚点として、懐かしむ程度のものになっていた。

相手の女性は、初めて見る顔だった。齢は二〇代後半くらい。セ

ミロングの髪を少しカールさせることで、愛らしさを演出している。それは強気で、どちらかというと男勝りな顔つきとはギャップがあり、だからこそ魅力的だった。細身の体にはシミ一つなく、すらっとした脚には自然と目がいってしまいう美しさがある。

可愛いというよりは格好いい。

可愛いというよりは綺麗。

女っぽいというよりは男っぽい。

実の所、兄が付き合う女性は皆、この三条件に当てはまる人ばかりであった。

（これで何十人目、いや、もう一〇〇人は超えてるのかな？）

もうこの女性で何人目になるか分からない。そのくらいに遊び人な彼。

夏華は、その家族に第一声を発する。朝の挨拶を。

「おはようございます、兄さん………冬治兄さん！」

その一声に兄——加藤冬治は、案の定起きやしない。三〇代そのままに、豪快ないびきをしていた。暑苦しくない程度の短髪に、精悍な顔立ち。腹筋は割れ、とはいえマッチョとは違う、いわゆる女性好みの筋肉美を備えた体つきだった。イケメンという言葉がぴつたりな、そんなビジュアル。兄妹揃ってのこの端整さは遺伝故の、そんな生来のものがあつた。

「起きてください。朝ですよ。起きてください」

ニワトリのようにベッドの周りを行ったり来たりし、同じ言葉を繰り返す。正直、肩を揺すれば起きるだろうが如何せん、今の兄は不潔だ。潔癖症の妹としては、触れることに比類なき抵抗を覚える。どうすべきかと悶々してる内、ふと視界の片隅に馴染みの物体をとらえた。

アコースティックギター。

弾き方など一切知らないが、これが楽器だということぐらいは分かる。つまり、音が鳴るもの。

夏華は、壁に立てかけられたその楽器のヘッドを掴むと、一気に

一弦から六弦までかき鳴らした。

途端、ベッド上に二つの裸体が跳ね上がる。

どうやら起きたようだ。夏華は改めて言い直す。

「おはようございます、兄さん」

第一章 不確かな真実（うた）【兄妹で和氣藹々1】

「何だ何だ何だ何だ!？」

と騒ぐ兄。さすが音楽これに関しては反応の早いこと。一方、相手方の女性は、布団を引き寄せては体を隠していた。

どちらもちちに気づいてる様子はない。なので身を乗り出し、顔を見せてみた。満面の笑みを。

「朝ですよ。起きてください」

「あれ、夏なつ? お前どうして」

夏華を「夏」の愛称で呼ぶ、冬治。疑問に思うのも無理はない。なぜなら彼の中での妹は今、友達の家でお泊りなのだから。

「さつき帰ってきたばかりなんです」

夏華は口ごもらず平然と言つてのける。真っ赤な嘘だった。

「そっかあ……朝ごはんは?」

と喋る冬治は気だるそうだった。寝癖がついたままの頭を掻かいている。

「食べてません」

「ん。分かった。ちと下で待ってろ。すぐ用意する」

必要最低限の情報を交わすと、夏華は向きを翻した。廊下へと。一瞬、相手方の女性と目が合った。合わせるつもりはなかったのだが、あまりにもこっちを見るものだから罪悪感に駆られてしまった。きっと彼女からすれば、「この子、妹さん?」からの「どうも初めまして」を言いたいのだろう。これまで幾度となく繰り返されてきたのだ。それくらいは分かる。

とはいえ、夏華は会釈も挨拶もしなかった。それは別に、兄妹愛ブラコンとか家族愛とかそういうった感情からではない。単純に憐れみから。どうせこの後、一分も持たず別れるのだ。変に情けをかけて縋すがれでもしたら、たまったもんじゃない。

そんな予感に耽る背中——その背後にて、致命的な一言が発せら

れた。

「とりあえずお前、もう帰れ」

それは冬治から恋人に向けた、明確な突き放し。彼の声色は粗雑で、何より冷ややかなものだった。

（はい修羅場確定）

夏華の逃げる足は自然と早足になる。そのまま廊下に出ると一目散に階下を目指した。途中、

「そんな言い方ってないじゃない!!」

怒声がこえました。パンツと乾いた音も聞こえる。引っ叩かれたのだろう。思った通りだった。が、となるとこのままではまずい。

夏華は階段を二段飛ばしで駆け下りると、リビングに滑り込んだ。すると、少しして後バタバタと、荒々しく階段を下りる音が鼓膜を揺らす。

少しして扉が開き、閉まる音がした。さっきの女性が帰ったのだ。あの早さからいって着の身着のまま。

「……ふう」

思わずホッとする夏華。毎度のことだが、この一時はいつになっても慣れるものじゃない。痴情のもつれがどんな齡でも起こるのと同じく、男女関係というのはかくもハラハラさせられるものだった。何分か経って後、派手なトランクス一丁の冬治が、体を引きずらせながらも二階から下りてくる。左頬には立派な紅葉が赤く色づいていた。

「これまた思いきり引っ叩かれましたねえ。差し詰めBパターン?」
「Bパターン? なんだそりゃ」

朝っぱらからビンタを受けた男らしく、冬治は不機嫌そうにリビングに入ってくる。そのままの足取りで夏華を横切り、奥の台所へと進んだ。その際、なんてことない仕草で妹の頭を撫でる兄。

「これまで兄さんがつられてきた過程を五つに分類してみたいです。

Bパターンは暴力沙汰。ちなみにAパターンは自然消滅でCパターンは」

「はいはい分かった分かった。それより顔洗ってうがいしてきな」
こちらの長けた分析力を無碍にする、冬冶。彼は台所で、料理の下ごしらえをしている。

一方、夏華も台所までついてきていた。そして兄を手でしつと、どけの合図を送って脇に寄せさせる。水場に独占市場を築いた夏華は、悠々とカランを捻って水を出した。

「分かってます。だからついてきたんじゃないですか」

「はあ？ だったら早く洗面所に――」

そう喋る冬冶の言葉が途切れる。彼の視線は、妹に釘付けだった。かくいう夏華はというと身を乗り出し、その迸る水に横から口を差し込む。

うがいしていた。

すかさず兄がそのカランを全開にする。

「あばばばばっ!？」

口内に尋常でない水量が注ぎ込まれ、夏華は悶絶する。軽く溺れていた。鼻の奥にまで水が這い上がってきて、顔を泣きっ面にさせた。

「何てことするんですか兄さん!!」

「バカか、お前は。コップも使わず直になんて」

「バカなのはそっちの方です！ 知ってます？ コップ一つとってみても塵や埃、果てにはばい菌なんてものがウジャウジャと」

「んなの、一回洗えば済む話じゃねえか」

「んなの、いちいちやってたら面倒くさいじゃないですか」

「お前……」

冬冶は、痛い子を見るような目でこちらを咎める。が、夏華は意にも介さなかった。こういう性分である以上、むしろ彼の方が間違っているとすら思っている。

「とりあえずお前、やるなら洗面所にしろ。少なくとも俺の見えな

い所で」

「何言ってるんですか？ 兄さん」

「ん？」

「あっちだと蛇口と洗面器の間が狭すぎて、顔が入れにくいんです。その点、ここだと広いじゃないですか。というか、でなきゃここまでするなんて非効率的なことはしません。悪しからず」

言ってカランをさっきとは逆に回す。水の出を抑えると、髪をかき上げ身を乗り出し、迸る水に横から口を差し込む。

改めてうがいをした。

改めて兄がそのカランを全開にする。

「あばばばばっ!？」

夏華は狭い立ち位置で、漫画ばりに足をばたつかせる。さっきより水の勢いが強かった。

「バカか、お前は」

「何がですか!!」

「だから洗面所行けて」

狭い空間で、兄妹がささいな口喧嘩を繰り返す。

これまたいつものこと。

なので決着がつくまでには時間がかかるであろうことを、夏華は覚悟せざるをえなかったのだった。

第一章 不確かな真実（うた）【兄妹で和氣藹々2】

うがいと洗顔とを済ませた夏華は、身支度も終わらせていた。うつすらと分らない程度の薄化粧に、きちんとスカートの丈を守った制服を着こなしている。見本の女子高生といった所だ。ついでに黒フレームの眼鏡もかけてるものだから、その雰囲気はまさに優等生。

「早くしてください。今日は登校日なんですから」

「わーってる。ちと待ってくれ」

台所の騒がしい油の音と共に、冬冶の声が聞こえてくる。只今、料理中だ。とはいえ、作ってるのは朝食ではない。朝食はすでにテーブルに並べられてる。今日のご飯はチャーハン。お味噌汁の代わりには酸辣湯。サンラータン おかずには餃子と……

（悪意だ。悪意が見える）

冬冶にそんなつもりはない——そう知った上でも、夏華は疑ってしまう。

この中華地獄は、妹に対する当てつけではないのか？

実は胃がもたれる女性に興奮を覚える、そんな家族に言えない悩みを抱えてるのではないのか？

兄は中国人で……となると自分も中国人で、中華を食べさせることには、まだ日本人と自覚してる妹に対する、ある意味でのシヨック療法なのか？

男という生き物は、そもそも中華しか作れないようにできてるのではないのか？

頭を巡る雑多な問いかけは、後になる度おかしいことになっていく。とにかくにも、言えることがあるとすれば一つ。それはつまり、救いようのない悲劇だということ。

過去に一度だけ、夏華は「中華なんてもう懲りごりです！」をこり押ししたことがある。案の定、兄とは大喧嘩になったが、こちら

としても色んな意味で引けなかった時期だったのだ。

そうして次の日、学校の楽しいお昼時間にて開かれた弁当箱。中身は純和風だった。おにぎりが三つ。ただそれだけ。たくわんすら添えられてない。それで十分だった。

この一時、夏華は人目も憚らず涙した。あの感動は、あの感激は、時が経っても忘れられるものではない。その気持ちは收拾がつかず、今でもコンビニのおにぎりを見る度、胸を詰まらせている。それくらいに衝撃的な一幕。だから、この時は思いもしなかったのだ。終わりが、もうすぐそこまで来ていることを。

それは食べた時にやってきた。おにぎりのタネ——具材は、酢豚だったのだ。

当時、料理のレパートリーが少なかった冬治は三つしか作れなかった。酢豚、チャーハン、そしてラーメン。不幸なのは、夏華がそれを知ってしまったという点。加えて弁当箱には、おにぎりが三つ。

夏華の目が眩んだ瞳が、急激に冷静さを取り戻していく。すると、どうだろう。三つの三角の内一つだけ、明らかに萎びた、むしろビチャビチャなソレがあった。所々原型が崩れ、米粒の隙間からはニユルニユルの——

「ひいっ!？」

「どした? 何か悲鳴みたいのが聞こえたけど……それより、ほら」
こちらが心の傷を回想トラウマしてる内に、どうやら冬治は料理を作り終えようだ。テーブルに置かれる、三つの箱物。一つは白色、一つは紺色、最後の一つは赤色の風呂敷に包まれている。お弁当だ。ちなみに白の弁当箱は、夏華のお昼用だ。

「今回もよろしく頼む」

「かしこまりました」

言って夏華はわざとらしくかしこまる。ようやく、二人が食卓についた。

「では……いただきます」

「いただきます」

お決まりの声をかけ合い、食事に入る。夏華は、事前に台所から持ち出したキッチンペーパーで、まずは油の吸い出しに終始したのだった。

第一章 不確かな真実（うた）【兄妹で和氣藹々3】

「お前なあ……」

その一言を皮切りに、冬冶の説教が再び始められる。片や夏華は「はいはい」で受け流すと、雰囲気のを和らげるべく、テーブルに置かれたリモコンを手を取った。

テレビをつける。

「夏。食事中にテレビを見るんじゃない」

「はいはい」

空返事しながらに取り合わない。夏華は、ぱさぱさにしたチャーハンをレンジで掬うと、かっこむ。ふわっと、芳ばしい香りと共に馴染みの薄味が口いっぱいに広がった。

丁度そこに、映像と音声が入ってくる。それは現場付近、その上空からのレポート。ヘリを利用しての実況中継だった。

『——ということで今の所、公道が封鎖されるに留まっています！

幸い深夜の出来事ということもあってか、特に目立った混乱、被害等は見受けられません！ ですが、ここから見ていただければ分かるでしょうか？ 分断された逆さまの先端に、上を失った東京タワー……そびえる光景はまさに異様といった所です！ そして、それ以上に奇妙なのがこの断面！ 綺麗に真っ二つとなっています！

さきほど、東京タワー建設に携わった方からお話を聞くことができましたが、このような形での崩落は構造上ありえないとのこと！

ならば、なぜ犯人はこのようなことができたのでしょうか？ 謎が

深まるばかりです！ どうやったらこんなことができるのか、また誰が、何の為にこのようなことをしたのか……今後警察の実況見分を待って、明らかになると思われます！ こちらからは以上です！』

プロペラ音がけたたましいせいか、ナレーターの方は大声で、眼下に広がる景色を中継している。必死さと緊迫感がよく伝わってくる。スタジオへの返し方も上手で、ベテランの域を感じさせた。

一方、冬冶はというと、画面を見ずに黙々と酸辣湯をすすっている。夏華と向かい合わせに座ってる為、そもそものがテレビから背を向けてる格好なのだが、どちらにせよ彼が食事中、別のことをするということはない。それは、たとえば緊急速報をやっている、その音声が入ってきたとしても同じこと。

普段、これでもかというくらい荒さが目立つ兄でも、それが家庭のことになると一変するのだ。古風な考え方を貫き、そうするよう家族に言い聞かせる。一家の長というのはどこもかしこも、こんなものなのかもしれない。

そんな余計なことを夏華が考えてる内に、いつのまにか画面はスタジオを映していた。そこでは襟元を正したアナウンサーの女性が、つらつらと手元に置かれた原稿を読み上げている。

『――のようです。唯一犠牲になった同電波塔の警備員、室井健人むろいけんとさんについてですが、警察の調べによると実は暴力団組織、白道会はくどうかいの元組員だったとの情報が入ってきており、それが今回の東京タワ―崩落事件と何らかの関係性があると見て現在――』

大事な締め言葉、その直前でピツという効果音と共に画面が真っ黒になる。夏華はリモコンを置いたはずの位置に目を向ける。
ない。

次に冬冶の方に目を向ける。

あった。

誰が肝心の所でテレビを消したかは、言うまでもなかった。

「兄さん。それは宣戦布告ですね？」

「はあ？」

「まさかこんなことになるなんて……正直失望しました。リモコンを奪い合うが兄妹の常といえども、妹思いの兄さんならきつとしな
い、そう信じていましたのに」

「十分思ってるじゃないか」

「どこがですか？」

その問いに冬冶は、信じられない一言を発した。

「だってテレビ見ながらじゃ味、分からんだろ？」

普通の答え。真っ当な回答。それでも、夏華は耳を疑った。

（――中華^{ユレ}を、味わって食べると？）

日々、料理を作ってくれる冬治には感謝している。が、ここ一〇年以上、夏華の朝食といったら中華なのだ。ならばと、夕食といけば中華なのだ。

ずっと中華中心の食生活を送ってきた。最近では通りで「ラーメン」というのぼりを見かけては、知らず地団太を踏んだもの。それでいてこの中華を味わえなど、夏華にとっては挑発行為以外の何ものでもない。

つまり、やることは一つだった。

「兄さん………あなたという人はあつ！」

そして、兄妹喧嘩は始められた。

何時間と待たず始められる二人のささいな喧嘩。

当の二人は暴力行為はないものの、熾烈な舌戦をくり広げている。それは家族ならではの、厳しい言葉の連続。「中華ばかり食べさせるなんてありえない……健康管理がなってないですよ！ そんなんで保護者面^{つら}ですか！」から「そんなんだから女性にフられるんです！」という意味不明のものまで、様々。

無論、冬治も「食事でのマナーはな、普段やつとかないといざって時にできやしないんだ。困るのはお前なんだぞ！」から「そもそも潔癖症なのが悪い！」という訳分からないものまで言いだし、引けはとらなかった。

相変わらずな二人に、毎度の口喧嘩。

それは無駄に見えて実の所、夏華にとって大切な家族の時間でもあった。

第一章 不確かな真実（うた）【歌聴きながらの登校】

「ほらもうこんな時間になっちゃたじゃないですか兄さんのクソバカ！」

食卓での家族喧嘩という、ありきたりなことをしてしまった結果、気付けばもうこんな時間。夏華は玄関で靴を履きながら、踵かかとをトントンしていた。はめた腕時計で時間を確認しながら、出入り口の扉に手をかける。と同時、

「夏」

声がかけられる。

「何ですか！」

焦ってるせいか、同じテンションで返してしまう。

「――行ってるじゃない。気をつけて」

それは当たり前、何てことない決まりごと。夏華はまともに取り合わない。

「はいはい。行ってきます」

そのままの勢いで玄関を出た。すると眩しい照り返しに晒され、少しふらついてしまう。カラッとした冬空。雲一つない青空に、今にも吸い込まれそうだった。見上げると丁度ツグミが三羽、蒼穹に羽ばたいていく。

「寒っ」

室内との温度差に、体を身震いしてしまう。

夏華はすぐ側に止められた自転車のスタンド、そのロックを外すと蹴り上げた。後、跨る。

サドルにお尻を乗せると冷気のせいか、腰を上げるほどに冷たかった。

これで出かける準備は整った。夏華は制服のポケットをまさぐると、その中にある紐状の物を掴み取り出す。イヤホンだった。その先端は、MDプレーヤーに取り付けられている。

ペダルを漕くと共に、押された再生ボタン。

初めに流れるのは、大好きな兄ひとの歌だった。

今では表舞台で歌われることのなくなった、そんな昔の思い出メロデー。

「……………よし！」

そして、夏華の一日が始まった。何が起こるか分からない、だからこそ憂鬱で、だからこそ希望ある、そんな一日が。

チャリラリラ〜ン♪

それは陽気な旋律イントロ——あの東京タワーで流した曲と、全くの同曲だった。違うのは歌い手が夏華でなく、冬治プロアマチュアだということ。

夏華はハンドルを掴む指で、小刻みにリズムを取った。そうしたくなるくらいに、キャッチーな音律。

流れる景色は、ついさっきまでとは明らかに違ったのだった。

？ 始まりの歌 五線譜じゃ伝わらない 十八番ナンバー

でかけましょう 世界を君色に塗り変えてこう？

Aメロに、夏華は穏やかな気持ちになった。澄んだ、人を奮わせるだけの声質。飾らないそれは、磨かれた宝石に似た円熟度を放っていた。

元氣が出るテンポの良い入り。

暖かな曲想は、冬というよりは春のうららかを思わせる。そういう意味では、これからの季節にぴったりだった。

一方、自転車に乗った夏華は歩行者らを追い抜き、坂道を下っていく。住宅に面したそこは、地元の人がよく使う道だった。一つまた一つと、家々が流れていく。

いつもの光景。

けれども歌を聴く夏華にとって、映る光景は一味も二味も違った。道行く人が明るく見え、どんな暗い顔をしたサラリーマンでも、

その瞳の奥に宿る強さを見ていた。

並び立つ何てことないガードレールや、冷たいアスファルトの路面。そんな気にも留めないものが、一瞬にして煌びやかな花道へと移り変わる。

今日もここから、一日が始まる。

ここからが、一日の始まり。

当たり前すぎて忘れがちな、そういう一步の重みを歌は気づかせてくれる。

勿論、大袈裟といえば大袈裟。

けれど楽しかった。ただ純粹に、歌の世界に浸かっていたい。変な見栄も、意地も恥も脇に置きさえすれば——いくらでも世界は自分色に塗りがえることができる。

？青空 太陽 どしゃ降りの心

うらはらの心 精一杯のSOS

響く マイミュージック あなたの痛みに

贈ります 目一杯の——ラブソングを！？

Bメロは、Aメロのテンポに合わせながらも、よりリズムミカルなものだった。段々と盛り上がっていく定石のメロディーライン。

ただ、夏華は歌を聴いてる最中、急に顔をしかめる。今頃になってあの、東京タワー崩落事件のことが頭をよぎったのだ。

取り返しのつかないことをした。そのことへの罪悪感^{うた}は拭えない。が、それとは関係なく歌われる詞が夏華の心を揺さぶっていく。そこに込められた真心は、より人を高揚させ、浮き足立たすだけの魅力で溢れていた。

サビ前の伴奏で、ドラムの打音が強くなっていく。それに合わせ、ギターやベースを含めた音の総和が一気に耳へ押し寄せてきた。否応なく、聞き手のボルテージは高められる。

いつしか夏華は罪の意識など、どこか隅の方に追いやってしまっていた。

勿論、仮初めといえは仮初め。

歌が終わればまた現実に戻り、罪悪感に苛まれることになるのは分かっている。それでも忘れられた。赦されていた。

この一時ばかりは確かに、夏華は救われていたのだった。

？真っ逆さまに落ちた　あなたを救うための　フレーズ
響かせるよ

どんな遠くからでも　届かない声にも　フレーズ
届いてるかな

あなたが幸せでも　不幸せでも　どんな君でも僕は待ってるから
嬉しくなったら　苦しくなったら　いつでもおいで

聴きにおいでよ　あなたが選ぶ十八番^{ボク}を？

Cメロ（サビ）は、流れるようにしたためられた調子だった。勢
いが感じられるそれは、これからを祝福する、そんな後押しが込め
られている。

ともすれば、今の心境にぴったりの詞。

慰めになればと選んだ曲。

それが自分の心にどう響いたかは、上手く説明できない。

変わったことといったら、漕ぐペダルの回りが知らず速められた
ことくらい。

気づけば、坂道は平坦な道へと切り替わっていた。後はうねるよ
うに舗道を蛇行し、いつもの上り坂を越えれば、そこではもう学校
が見えてくる。

とはいえ、それまでに待ち受けているのは真冬の厳しさ。歌を聴
き入ってたら寒さを忘れました、なんて都合の良いことは起こらな
い。現に手袋を付け忘れた夏華の手は、寒風で痛いくらいに凍えて
いた。耳回りもこの寒さで真っ赤になり、堪えきれず手で擦ったほ
ど。

けれど。

けれども歌を聴いてると何故か、逃げたくなるような世界はその

寒ささえ、その痛みさえも嫌いになれない世界へと印象を変えていったのだった。

第一章 不確かな真実（うた）【学校に到着】

「おはようーう」

「おはようーう」

学校に着いた夏華は、自転車を所定の駐輪場に置くと、そこで鉢合わせた顔見知りと声をかけ合っていた。

女学生同士ならではの、齒の浮いた声色。

正直、あまり慣れたものではなかった。ただ、学校生活を快適に過ごすためにはなくてはならないものでもあるので、満面の笑みでこなしていく。

駐輪場のある校舎裏からぐるりと回って表に出ると、そこでは登校する学生でごった返していた。

（間に合ったあ……）

たくさんの人がいるおかげで、夏華はホッとしていた。そのまま、その大勢の流れに混じって校内へと入る。下駄箱に辿り着くと靴がらなのか、そこ特有の何とも言えない匂いが鼻についた。

下駄箱は左から一年生、二年生、三年生の順に区分けされている。夏華は高校二年生なので、真ん中を突き進んだ。周りを見ると心なしか、急いでる人がちらほら見受けられる。まだ時間はあるが安全を期したい、そんな微妙な頃合なのだろう。

人に流されやすい性格なのか、何だか夏華も焦ってきた。自分の下駄箱から上履きを取りだすといい加減に履き、まずは三階を目指す。ちなみにここは三階建てで、三階から一年生、二年生、三年生の順に階を下がっていく形をとっていた。と、いうことは夏華が本来向かうべきは二階で、三階は一年生の領域である。テリトリー

けれども、そこに行く理由はちゃんと存在していた。渡さなければいけないのだ。妙に重く、パンパンになってる学生靴の中にあるものを。あの弟に。

従って夏華は、急いで階段を駆け上がっていったのだった。

「————いない、ですってえ……?」

三階という、いつもより多い段差を駆け上がってきた夏華。すました顔して息切れしている。が、時間は待ってくれないので、彼がいるであろう教室で恥ずかしながらそのクラスメイトを呼んだのだ。そして、呼び出してくれるよう頼んだのだが、当の本人はまだ来ていないとのこと。

そもそも下級生ばかりの所にぽつんという上級生というだけで、辱めを受けてるも同然だった。登校中のドタバタがあつてか、実際はさほど注目されてないが、夏華自身は顔を真っ赤にさせている。

(あんのおバカ)

怒りの矛先は、まっすぐ弟に向いていた。

夏華は今度、階段を駆け下りていく。長年の付き合いからか大体の居場所は分かっていた。とはいえ、ゆっくりなどしてられない。何せ階が上がってくる学生らの雰囲気、危機迫るものなのだ。「どけどけどけえ!」とでも言ってるかのような瞳で、突っ込んでくる男子学生すらいる。

もう、時間がない。

夏華は、最悪の事態を想像しながらも足を走らした。一階——そのパソコン室へと。

後にしよう。そう何度も思うが、どうにも踏み切れない。

実際、遅刻などしたことのない自ら。ではそのこだわりを捨てても渡さなければならぬ物なのか、と問われればそうでもない。それでもないのだが結局の所、一階まで来てしまっている夏華なのであった。

校内に、無情の鐘が鳴り響く。

夏華はとりあえず弟を引っ叩こう、そう心に誓っていた。

パソコン室前まで歩くと、その扉を開き中へと入る。

(……いた)

案の定、彼——加藤千己ちしはそこにいた。ずらっと並ぶ数十のパソコン、その内の一つに座っている。入ってきたこちらを気にもせず、勝手に電源を入れたであろうパソコンの画面を見ていた。打たれるキーボードのかちゃかちゃした音が、静まり返った空間にはよく響く。

夏華は一目散に千己の元へと向かった。彼は一年生だが、とてもそうは見えない小柄な体型をしている。そのことは彼もコンプレックスに思ってるようで、弄るとこれでもかというくらい怒る。ただ、その形姿に合った可愛らしい顔つきをしているので、夏華はむしろ背がちっちゃくて良かったなと思っていた。よく反射的に抱き締めたくなるのだ。そんな時、手が届く高さにあるというのはとても素晴らしいこと。

とはいえ、今の千己は何か違った。

まるで時代劇に出てくる悪代官のような下卑た笑みで、口角を釣り上げさせてはニヤニヤしている。彼はいつもかけてる黒縁眼鏡を手で少し持ち上げて、下した。その仕草もキザっぽい。

とにかく気持ち悪いので夏華は千己の近くまで行くと、とりあえず引っ叩いた。

「どへええ!？」

普通、叩かれた人がおよそ言わないであろう反応をする彼。姉は弟の将来が心配だった。

「アンタねえ……そういう中二的な所、どうにかなさい。それより何やってんのよ、チコチコ」

「チコチコ言うな! ウインカーか俺は。って何だ、夏か」
もう一発引っ叩いた。

「ぎゃぴい!？」

「言うか!」

思わずツツコんでしまう夏華。

「何がだ！　ていうか何しやがる！」

「姉さんと呼びなさい。後、目上の人に対しては敬語。親しき仲にも礼儀あり、でしょう？」

「出たよ潔癖症^{けつび}」

まるでアメリカ人ばりに両手を肩の所に上げ、横に動かしヤッテラレナイヨを表現する。その、ひらひらさせた掌を夏華は掴むと、軽く関節技を決めたのだった。

途端、千己が泣きべそをかく。

「……たく」

どうにも姉の前では、甘えがちな性格が出てしまうようだった。夏華は痛めた千己の手を撫でると、抱き締める。

「——ちよろいな」

一瞬、彼の口から聞き捨てならない腹黒さを耳にした気がした。が、母性本能をくすぐられた夏華は姉っぽいことをしたくてならない。なので今のは特にお咎めなしに――

「臭い」

というか、そんなことより千己の体臭の方が気になっていた。少しきつめのそれは、友達には分からないが身内には分かる、そんな微かな臭い^{にお}。

夏華は注意せずにはいられなかった。

「アンタ、昨日お風呂に入らなかったでしょう？　体を不潔にしていると女の子にモテないわよ。それに学生服^{ふく}も皺^{しわ}くちやだし、髪もボサボサ」

「三次元らしいもの言いだな。結構。俺の生きる二次元じゃあ、そんなん『くんくん。弟君の匂いがする。えへへ』で済まされちゃうんだなこれが！」

「今日はきちんと、家に帰ってきなさいよ。昨日のは私から兄さんにちゃんと理由付けといたけど、今日も帰ってこなかったらアンタ

……無断外泊ってことになるからね」

夏華は、千己の相手はせずに用件だけ伝える。そして、鞆を開け取り出した。紺色のお弁当を。

「出たな中華弁当！」
デス・チャイニーズ

「いちいちうるさい。もう」

夏華は彼の妙なテンションに辟易しながらも、どうしてか同情していた。中華づくしに苦しめられてきたのは、何も夏華だけではないのだ。

「ここまできたら色々諦められるでしょ？ はい。後これ」

もう一つ、小さめで円錐状のタッパをその弁当の上に置く。その際、何かタプンといった水音がした。小脇にはレンジ。

「おい今タプンって言ったぞ！ タプンて！」

「だから……デザートよ」

「な訳あるか！ ていうかアレでしょ！ アレなんでしょ！ 弁当にあるまじきアレやっちゃったってことだね！ あのビチャビチャでニユルニユルの——」

「「ひいっ!？」」

二人して身震いしてしまった。条件反射の賜物。だが、夏華は仮にも姉である。なので、できるだけ千己を落ちつかせられるよう、努めて優しく語りかけた。

「安心なさい。麺は伸びるでしょうけど、味は保証できる。お昼休みになってからだって傷んだりはしないでしょうし……周りなんて気にしないで啜れば」
すすす
フレイブ

「俺にそんな勇氣はねえ!!」

夏華にもそんな勇氣はなかった。お昼休みにラーメン弁当なんていじめてください、そうクラスメイトに言ってるようなものだ。

「私だって辛いよ。こんなん、朝からなのよ」

込み上げるものを抑えきれず、胸を詰まらした。すると、千己がその頭を撫でる。お互いこの一点については、どうやら気持ちが通じ合っているようだった。

「俺ら、苦勞が尽きねえな」

「ええ……ところでアンタ、パソコンで何やってたの？」

言いながら夏華は、パソコンの画面を見やる。そこには、有名な2チャンネルと呼ばれるサイトの画面が映っていた。要は何か提示された話題について、色んな人が色んなことを語り合う、そんな感じのものだ。

彼が開いてたブラウザの画面、その左上に表示されていたのは「東京タワー崩落事件」という文字の羅列。

夏華は中をちよつと覗いてみた。

第一章 不確かな真実（うた）【2チャンネル】

「ぶっちゃけ誰の仕業だと思うよ？ 何かニュースじゃ暴力団だの組織ぐるみだの言ってるけど実際どうなん？」

「うーん。何か白道会が絡んでるみたいなこと言ってるけど、どうだろうな。だってあそこ、規模小さくね？ 華道会かどうかいくらいでっかな組織なら、あのくらいできても不思議じゃないけど」

「知ってるか？ 白道会って実は、華道会からの分派なんだぜ」

「マジか！？ じゃあ白道会の裏には華道会が糸を引いてて、それで日本を狂気の沙汰に……ブルブル」

「ただの暴力団抗争の一種じゃね？」

「へてか、さっきの華道会と白道会の件は釣りだぞ！ みんな騙されるな！」

「釣りじゃねえし……てかそんなことして何になるん」

「実はやったの、俺だ。生まれつき世界を変えられるんだ。言いたいことは？」

「給料上げてくれ」

「あのさ、自分だけかもしれんだけどこれってさ、9・11を思い出さね。あの貿易センタービルに突っ込んだヤツ」

「あー、てことはテロ！？ イラクから！？ いやいや北朝鮮からか！？」

「いやいや。無知すぎるだろおまいら。そもそも9・11の貿易センタービル崩落には、綿密に計算された計画だったんだよ。人種のあるつぼとも言うべき多民族国家のアメリカは元々、多くの民族対立や遺恨を抱えている。で、あの広大な領土。何か大きなきっかけでもあれば、そういった問題が一気に噴出して、アメリカって国がバラバラになる恐れすらあったんだ。そこでテロリスト達が考え出したのが、あの9・11。アメリカの象徴とも言える建物をぶっ壊すことで、国家分裂を図った。発生直後、街のあちこちに母国の星条

旗が掲げられるのが目立ったりしたのは、その反動——アメリカの危機感の表れて訳。で、分裂しそうになった国家を再び一つにする為に、同じ方向を向かせる為にイラク戦争を吹っつけたと。それに比べて日本はどうだ？ 多民族じゃないわ、東京タワーはただの観光名所だわ、全然違うじゃねえか。電波塔の役割を担ってる東京スカイツリーなら、まだ話は分かるけど」

「東京タワーって………日本の象徴的存在じゃね？」

「はいはい。ま、要はテロと」

「そそ。テロテロ」

「待て待て。ヤクザの件はどうなった？」

「いやもう何かどれも違うね。そもそもあんなん、人ができる業じゃねえって。何かもつとぶっ飛んだ何かが作用してさあ」

「神だ」

「ななな何てことしやがる!!」

途端、千己の抗議の声が飛ぶ。気づいたら夏華は、パソコンの電源ボタンを指圧していた。

結果、真っ黒になったパソコン画面。とはいえ、強制終了させた夏華に負い目など皆無だった。

大体どのスレが弟のものか分かってしまう。それだけに、やっぱり姉は弟の将来が心配でならなかった。

「こんなくだらない仮想世界とは早くおさらばなさい。いいわね？ 後、サボるなら最低限の出席日数は守ること。でないと——」

「でないと？」

「——兄さんに知られる」

「……!？」

脅しとしては十分すぎる言葉だった。千己は肛門が縮こまったと聞いた所だろうか、体を強張らせている。

「ま、私がチクるなんてことはないから、そこは安心なさい。ということで私は授業に出るんで、また後でね」

そう言って用事を済ませると、夏華はやっと自分のことをすべく、

二階への一步を踏み出したのだった。

校内に、無情の鐘が鳴り響く。

二回目の鐘の音、ということとは朝礼が終わり、一時間目の授業が始まったということ。より教室に入るのが気まぎれになったのを思い知らされながらも、かといって向かわずにはいられない性分の夏華であった。

第一章 不確かな真実（うた）【華道会と白道会1】

夏華は、学校の授業を一時間目の中頃から参加し、残りの授業も無難にこなしていった。途中、お昼休みに「私今日、食堂で食べることにしたの」という嘘をつき、食したあの味は今でも思い出したくない。わざわざ屋上という寒空に出たせいで、リップクリームを塗った唇は紫がかってしまったもの。たまたまそこに居合わせた千己の、箸を持つ手は震えていた。冬空の下、思わずそんな彼を抱き咽び泣いたことはこの一家にとって珍しいことではなかった。

こうして何だかんだで、気づけば放課後。

夏華は再び下駄箱の所まで来ていた。とはいえ、このまま家路に着くわけでもない。やることがあるのだ。渡さなければいけない。少し軽くなった学生靴の中にあるものを。あの姉ひとに。

夏華はすべきことの為に靴を履いて、校舎を出る。見える風景は登校時の、学生がわんさかいた時とはガラリと変わっていたのだった。

黒塗りのベンツが止まっている。校庭――グラウンドを横切った先、つまりは夏華の目前に。

煌びやかな艶に美しい曲線のフォルム。

全長にして五メートルはあろうか。

ドドン！ といった効果音が聞こえてきそうなくらい、その車は校庭に映えている。

ただ、それ以上に夏華が気になってるのはタイヤ痕の方。

まるでその車体でグラウンドをドリフト走行してきたかのように、そこかしこにそれが散見される。土に残るそれらは、ここでこれから部活をしようという人達にとっては、この上ない迷惑行為だった。よく漫画などにある、不良が主人公の学校に乗り込んでくるよりた

ちが悪いように思える。ただ、下校する学生らにとっても先生らにとっても、これは見慣れた光景なので何も言わない。というか、見て見ぬふりをしていた。が、問題の渦中にいる夏華はそれがしたくてもできない。

(また……)

夏華は心中穏やかでなかった。それでも驚かないのは、前例があるから。こういうのが実の所、自身に友達ができづらい理由でもあった。

こちらが待ってみせても、どうやら何も起こりそうにない。なのでまずはいかにも高そうなベンツ、そのバンパーを蹴り上げてみた。途端、車のドアが開き、が体の大きいスーツ姿の男が飛び出してくる。強張った顔つきで頬には、刃物によるものか痛々しい裂傷の痕が刻まれていた。厳しいその風貌は四〇代の齢に合った、そんな雰囲気醸しだしている。

その中年男が放つ渋い一声。

それは、

「お嬢！^{じょう} 何するんですか！」

およそ現実世界では耳にしない呼びかけだった。おそらくは弟によるものである。

夏華は頭痛でもないのに、頭を抱えた。

「近藤^{こんどう}。何ですか、その呼び方は」

「い、いえ。千己坊^{ちぢぼう}が、お嬢は本当はそう呼ばれたんだって、そう教えていただきました」

「私はこれまでも、そしてこれからも、そんな呼び名に喜びは覚えることはないでしょう。だからいつも通りの呼び方に戻してください」

「分かりました！ お嬢！」

分かってないようだった。

夏華は困ったように人差し指をおでこに当てると、考え込む。

(あんのおバカ。この堅物に何言った?)

基本的に近藤という人間は仁義に熱く、義理堅い。なので、言われたことはバカの一つ覚えみたいに遵守するのだ。が、さっきの言葉には耳を傾けなかった。こんなこと普通は考えられない。

するとパシヤッと、何かのシャッター音を耳にした。見ると、近藤がこちらに向け写メを撮っている。あまり見ない、というより初めての光景だった。

「近藤」

名前を呼びながら睨みつける。

「あ、すみません。けど仕方ないんです。ミッションが……」
「ミッション？」

さっきの「お嬢」といい「ミッション」といい、何やら二次元の匂いがプンプンする。

夏華はその写メールを撮った携帯をやおら彼からもぎ取ると、画面を覗く。

映っていたのは、困り顔をする夏華だった。

とりあえずはその画面を閉じ、次にメールの受信ボックスを開いてみる。すると、新着で未開封なのがあった。一件。送り主の欄には「当局」。

読んでみる。打たれていた文面は非常に簡素なものだった。

『それが萌え』

夏華は思う。なるほど、そういうことかと。

次に、開封済みのも読んでみる。すると、

『今回、君に与えられた指令は夏華こと、加藤夏華の送迎。ただ、いつもとは勝手が違う。どこからか敵に、その情報が漏れてしまったのだ。よって奴らは君が停車させる所定の位置に合わせ、狙撃手を忍ばせている恐れがある。なので今回、相手の裏をかき校内に乗り込むとしよう。無論、車でだ。が、そこも安心できる環境とは言いがたい。おそらく最大の難関はグラウンド。最も見晴らしがよく、故に仕掛けられやすい。更に事前探査してもらった所、その地中にはBAUER24という最新鋭の地雷が至る所に埋められている

とのこと。それは人が安堵すると爆発するという、とにかく一癖も二癖もある厄介物だ。つまり君は校庭に入ったら、敵の照準が車体に合わぬよう攪乱させ、且つ下に潜む爆破物を回避しながら進まなければならぬ。とても困難な道のりだ。が、君ならやってくれると信じている。こちらからは以上だ』

『夏華の言動には注意せよ。奴は仮にも女子高生キャラ。必然的にツンデレがついて回る。今更、このことに説明はいるまい？ 嫌と言ったら好き。やめろと言ったらやってくれ。つまりは嫌よ嫌よも好きの内という設定で、二次元では空気と同じ扱いを受けている。故に廃れたテンプレだが、そこには鉄板ならではの熱き萌えが――』

メールの文面にはまだ続きがあったが、もう十分だった。何で校庭がアクション映画ばりの惨状になっているのか、何でこちらが呼び名の訂正を求めても流されたのか、色んなことがよく分かる。

（こういったてんやわんやを楽しめる場所といったら……あそこしかないか）

そう思いながら、夏華は学校の屋上を見上げる。と同時に、小さな人影が引っ込んだ。

（もうバレてるって）

高みの見物と洒落込んだつもりであろうが、姉は何もかもお見通しである。

「近藤。携帯、没収しますね」

「え、ですがこれからその画像を若い衆に高値で売りつけるっていう、実はお嬢が人気者だっていう設定を」

「近藤……あなた、んなダンディな声で何言ってやがりますか。何でもかんでも人の言うこと、丸呑みにしすぎなんです。いいですか。千己の言うことは全部でたらめです。私の言うことだけを信じない。いいですね？」

「え、ですが」

「いいですね？」

「は、はい」

これだけ念押ししたことで、ようやく近藤は夏華の言うことを聞くようになる。

「では、まず呼び名から改めましょう。さあ、いつも通りに呼んでください——夏ちゃんなつちゃんと」

「え？ 私、いつもは夏華様と」

「夏ちゃんと」

「夏華様」

「夏ちゃんと！」

有無言わさぬ視線で、夏華は近藤の答えを待つ。

言わせたい。何か言わせたいのだ。

対して彼は一瞬、引きつった顔を見せる。が、すぐに気持ちを改めるように佇まいを正した。

（……言う気だ）

自分で振ったくせして正直、おっかなびっくりな面持ちの夏華であつた。

そして近藤は、遂にあの言葉を口にする。

あの渋い重低音で。

あのファンシーな名を。

「お母様が待っておられます。行きましょう………夏ちゃん」

「——かあっ！」

たまらず夏華は腹を抱えて、車のボンネットを叩く。

「おやめください！ 夏ちゃん！」

加えて、近藤のダンディズムが追い込みをかける。夏華はたまらなかつた。

「夏ちゃん！ 夏ちゃん！」

爆笑に拍車がかかるばかり。むしろ近藤という人間はわざと言ってるんじゃないかと、そんな悪戯すら邪推してしまう。

結局の所、姉弟共にやることは似たり寄ったりなのであつた。

第一章 不確かな真実（うた）【華道会と白道会2】

「——ちゃんと校庭を元通りにするとか、後片付けはしてくださいよ。堅気かたぎの人には迷惑をかけない。そうですよね？」

車内に乗り込むと同時に、夏華は運転席に座る近藤を正す。

「重々承知しております。その点は抜かりなく」

という彼の言葉に、夏華は窓からグラウンドを覗いてみる。すると、せわしなくトンボをかける厳つい極道の人らが窺えた。いつもは銃チヤクやら薬ヤクやらが専売特許な人達。それだけに、やっтерることが子供のおままごとみたいで滑稽だった。毎度、どこから降って沸いたんだと思うのだが、この組織の規模から言えば何があっても不思議ではない。

もう車は走り出していた。見える校庭の景色は流れていき、後に見えなくなっていく。

「言っても無駄だということは分かっていますが、近藤。学校にまで押しかけてくるなんてこと、しないで頂きたい。おかげで私、今日も学校で気まずい思いをしました」

「それは誠に心苦しい限りです。ですが、そうであるなら定期的にお母様にお会いになってください。でないと、またこんなことの繰り返しになってしまいます」

「だったら母さんの方が家うちに来ればいいでしょう？」

「それ……本気で仰ってるんですか？」

勿論、憎まれ口にすぎなかった。その理由は単純明快。

もし万が一にも母が家に来て、兄と出くわそうものなら血の雨が降るからだ。それは冗談でも誇張した表現でもない。事実、そういう過去があるのだ。

とどのつまり、母と兄は犬猿の仲だということ。

というか、夏華が母と会うということ自体すら、ともすれば危ない橋を渡ってるということになる。当然、兄はそんなこと知らない。知ろうものなら、家族喧嘩では済まない抗争が起こる。本当にそんなことが起きてしまうのだから、心は休まらない。

夏華の家系、その相関関係はとても複雑なのだ。

そして、そのことは夏華や近藤に限らず、この組織を生きる人間にとってとは周知の事柄。つまりは悩みの種ということだった。

「にしたってこのままじゃいずれ、学校から家に連絡が来ますよ。そしたら必然的に保護者である兄さんに話が伝わる訳で……どっちにしろ取り返しのつかないことに」

「安心してください。そこはきちんと圧力はかけ——ぬおっ!？」

近藤が素っ頓狂な声を上げる。それもそのはず。夏華が後部座席から、前の運転席を蹴っ飛ばしたのだ。

「何がどうしてそんな脅迫めいたことをしたってんですかえっ!」

「おやめください夏ちゃん! 悪ふざけにも程がありますぞ」

呼び名のせいなのか、どちらかというと近藤の方がふざけてる気がする。無論、こちらとて高校二年生にもなって座席を蹴ることに喜びを覚える、そんな能天気な生き方はしてこなかった。ちゃんとそれ相応の理由があるのだ。

夏華はちよつと色々考えてみる。

そういえばさっきの一時間目、遅刻してきたのに先生から何も言われなかったなあとか。

そういえばここ最近ずっと、先生の笑顔が妙に痛々しかったなあとか。

そういえば帰り、教卓に置かれた出席名簿で自分の所を覗き見たら、無遅刻無欠席になってたなあとか。

こう振り返ってみると夏華は、思い当たる節がありすぎて逆に困っていた。なので憂さ晴らしにもう三度、同じ所をゲシゲシ蹴る。対する近藤は、反応もバカの一つ覚えみたいに忠実だった。

「夏ちゃん! 夏ちゃん! 夏ちゃん!」

喧嘩を売ってる――そう感じずにはいられない。
実際、高級車の乗り心地が最悪な夏華だった。

第一章 不確かな真実（うた）【華道会と白道会3】

そうこうしてる間にもベントは、他の一般車と同じく公道を走行していく。すると、前方の信号が赤になり、道路上に多くの車列が並んだ。明らかに他車と一線を画すその形は、^{なり}周りから注目を浴びるには十分だった。前後左右から、車内を窺^{うかが}おうとする奇異の視線を感じる。

夏華は何も悪いことはしてないというのに、小さく体を縮こませた。恥ずかしさからか、顔回りがいやに熱い。

（というか私、用があるんですけど）

鞆の中に入ったお弁当を、姉に渡さなければならぬのだ。冬という季節性もあってか、食材が傷むことはないだろうが、それでも早く渡すにこしたことはない。ただ、文句を言おうにもその相手は、一度言いだしたら聞かない性分。夏華自身、近藤については重々承知してるので何も言いようがなかった。

とはいえ、別に母と会うことに抵抗はない。むしろ母のことは大好きだし、毎日会えるものなら会っていたい。そもそも家族して、てんでバラバラなのがおかしいのだ。けど、そんなことを口にしよものなら兄が悲しむ。露骨に辛そうな顔をさせてしまう。それだけはやさたくないのに、けど、どうしてなのかが分からなくて……結局、無知で無力な自らは何もできなかった。

今までは。

（——ん？）

制服のポケットから、何やら振動を感じる。携帯のバイブレーション。さっき近藤から取り上げた物ではなく、自分のからだだった。夏華がポケットからそれを取り出す頃には、震えは止まっている。その短さからいってメールの着信。

夏華は携帯画面から受信ボックスを開く。すると新着メールが一件、届いていた。開いてみる。

『助けてほしいか？』

送り主の欄には「チコチコ」。弟からだった。傲慢なその文面は、屋上から人を見下したテンションそのままに送ったといった所だろう。

とはいえ、かくも女性というのは偉そうな人が嫌いなもの。なので当の夏華は返信しなかった。

すると、携帯がバイブする。ついさっきと変わらないの、着信メール。

夏華は再度同じ動作を繰り返し、それを開いてみた。

『助けてほしいですか？』

敬語になっていた。弟思いの姉としては、思わずクスリとしてしまう。きつとメールを送った後に、反省したのだろう。こちらが返信しなかったというのもあるが、それ以上に千己は心配症なのだ。

普通なら「めんどくせえ奴」という括りの下、切って捨てられる所だが、そこは家族。

夏華は彼が好きそうな文面を思案しつつ、指を走らせ文字を打っていた。結果、できた完成形がこれ。

『助けて。弟君』

送信した。すかさず返信される。

『音声メッセージでよろ』

という文字と共に、添付ファイルがあった。何やら見たことのない文字の羅列。開いてみるべくその文字を選択し、決定ボタンを押し込む。

途端、タッチパネル画面いっぱいにコンデンサマイクが現れた。

その画面下には横棒のゲージがあり、周囲の音量に合わせて上がった下がったりしている。と、なるとこのゲージはボリュームにあたり、送話口から音を取ってるのであろう。

（声を吹き込めてこと？）

添付ファイルの使い勝手が分からない、夏華だった。おそらくは千己自作のアプリ。

何を隠そう、彼は機械関係にめっぽう強くてアプリに限らず、ブックボックスとも押搦やゆされるパソコンの性能もいかなく発揮させられるのだ。が、それが時には行き過ぎて一時、取り返しのつかないことになったことがある。本人曰く反抗期だったとのことだが、そんな言葉では済ませられない大惨事だったのだ。

オタク文化を規制する公的機関にサイバー攻撃を仕掛けたり、ホームページ検索で「中華」と打って出てきたページにウィルスをはら撒いたり、週間オリコンランキングの一位から一〇位までを全てアニソンに置き換えるというハッカー紛いの児戯じぎまであったというのだから、警察沙汰だった。

それと比べるにつけ、今の千己は大人しくなったものだ。おかげで家族の心労は軽減された訳だが、代わりにそのツケがこちらに回ってくるというのだから、ままならない。

とりあえず夏華は、携帯の送話口に声を吹き込んでみた。

「タスケテ。オトウトクン」

抑揚も声量もない、言葉の羅列。外国人口調の如きそれは、感情が全くこもってなかった。

すると、まだ何も操作してないのに、画面に「メール送信中」との文字が映し出される。声が吹きこまれたら送信されるよう、設定が施されていたのだ。

少しの間、夏華が手持ち無沙汰で待っていると、画面に「メール受信中心」との文字が浮かび上がる。それに合わせ携帯を弄ると、新規メールを開いた。

「あれ？」

そこで夏華は戸惑う。文面がないのだ。あるのは添付ファイルだけ。開いてみる。

途端、またしても画面いっぱいになんかが展開した。といっても今回は千己のオリジナルではなく、youtubeなどにありがちな動画からの引用。どうやらアニメのようだった。勿論、それがどのアニメか特定できるほど、夏華は二次元に精通してない。なので、

ちんぷんかんぷんな面持ちで、ただぼーっとしていた。

視線の先では、萌えキャラと思いき女が絶対絶命の危機に陥っている。少女漫画に出てきそうなビックリおめめに、お姉さん風の顔立ち。そして彼女が見つめる先、悪役（怪獣）を隔てた奥には、千己に瓜二つの少年が……

（――嫌な予感がする）

夏華による一抹の不安をよそに、画面上の三役は勝手にクライマックスを築いていく。

ヒロインであろう女が、少年を見ながら大粒の涙を垂らした。こちらの情報不足もあってか全くもって感情移入できないが、それでも言うであろう台詞が分かってしまうのだから、不幸極まりない。

そして女は叫ぶ。目一杯に叫ぶ。おぞましい萌えボイスで、あの台詞を。

「助けてええ！！ 弟きゆううー」

絶叫の最中、それは消えた。

というか夏華が電源ボタンをこれでもかと押し、画面ごと消し去った。結果、電源の切れた携帯。

思うことは一つだった。

（……アイツめんどくせえ）

せっかく改心したと思ってメールを返したというのに、終いにはあんな言い方まで強要するという偏愛ぶり。千己は恩を仇で返す変態だった。おまけに車内に変な声が響き渡ったせいで、夏華は変な羞恥プレイを味わわされる始末。

すると、そんな雰囲気を感じてか近藤が声をかけてきた。

「大丈夫ですか？ 夏ちゃん」

「喧嘩売ってます？」

「はい？」

「あ、いえ」

遊び心で決めた呼び名に、逆に弄ばれるという夏華。

「あの、気にしないでください。ちょっと弟の残念な嗜好に打ちひ

しがれていただけ——ってあれ？」

話しかけられ、顔を上げてる内にようやく気づく。

車が停まっていた。

長らく携帯と睨めっこしてたせいで、他に気が回らなかったようだ。

「ええ。着きましたよ」

まだ状況を上手く把握できない夏華に、近藤は言って聞かせる。

「そうでしたか。着くの、意外に早かったですね」

いつもとは違う体感での到着に、少しばかり呆気にとられていた。すると、そんな夏華の耳にコンコンと、窓を叩く音が入ってくる。

振り向くとそこにいたのは、

「——母さん！」

窓越しに映る、優しげな微笑を向ける女性に思わず大声を上げる。過剰に反応してしまったのは、嬉しかったから。何せ一月ぶりひとつきの再会である。

五〇の太台をとうに越えてる母はここ最近、老け込みが目立つようになつていた。単にたまにしか顔を合わせていないからそう感じるというものもあるが、それだけでない焦燥感というか、疲労が顔に滲みでている。彼女の立場からすれば、必然と言っておかしくない兆候であろう。けど、与える影響は何も悪いことばかりでもない。

本来であれば「私わたしやもう長くないから」なんて達観した生き方をする齡だというのに、母の瞳は未だに生気が宿り、ギラついている。加えて、白髪であるはずの長髪を黒色に染め、小奇麗はたに束ねることで若々しさが醸しだされていた。風貌は、傍から見ると近寄りがたい威厳を放っているが、それもまた彼女の重責故のこと。

夏華は車の扉を開けると、外に飛び出した。そのまま一目散に母へと抱きつく。一方、彼女の方も両手を広げ、受け入れる格好で抱き返した。そして、愛しむように娘の髪を撫でていく。

「元気にしていたか？ 怪我は？ 食事はちゃんと良い物を食べているか？」

「はい。怪我もなく、元気にやっています」

親の心配に夏華は答えていく。さすがに最後の質問はスルーしたが、かといって酷い食生活を強いられる訳でもなし……毎日お弁当も含め三食、手料理をふるまってくれるのだから、その点だけ見ればむしろ健全だった。

「母さんの方は？」

言って、今度は夏華が母の心配をする。間近で見る彼女の顔。少し頬がこけたであろうか。もう随分な齢だし、無病息災でいることの方が稀だ。

「もしかして何かの病気にかかって」

「こおら夏。勝手に私を病人扱いするな。今だってほれ、この通りピンピンしておる」

「本当ですか？」

「本当よ。あ、それはそうと夏。話は変わるがな」

「――会長」

親子の会話に割って入る、渋い男声。いつの間に外に出たのやら、近藤によるものだった。

「分かっておる。今言おうとしてた所よ」

「会長」と呼ばれた母が、近藤の声に応える。

「そうでしたか。申し訳ございません。無粋な真似を」

「いや。お前の心配は重々承知している。さすがにこんな所で立ち話など、正気の沙汰でないわな」

そう話す二人の会話を聞いてて、夏華は不思議に思う。

（こんな所？ 何で実家をそんな他人行儀な口ぶりで……）

と思ったところで辺りを見渡してみる。

ここは、高層ビル群の一部として屹立する建物だった。近代建築の極みを骨の髄までしゃぶったかのような意匠が、至る所に凝らされている。下へ目を向けると大理石の床があり、左へ目を向けると、豪邸にありがちな噴水広場があった。その広場からの水飛沫が、小さな虹を創っている。

最後に右へ目を向けるとあったのは、そびえ立つという表現がピッタリな丸型の巨大ビルディング。時が夕刻ということもあってか、茜色に染まったガラス窓の照り返しは弱く、おかげでその趣深い美しさを直視できていた。

夏華はこの光景に見覚えがある。だから、ここがどんな所か知っている。だから、とんでもなくおったまげた。

「ってここは白道会の総本山じゃないですか!？」

たじろぐ夏華に、他の二人は動じない。

どう考えてもおかしかった。

ここは夏華の実家ではなく、白道会がその基盤を置いている丸ビル。

そして白道会とは、先の東京タワー崩落事件で犠牲になった人物が、前に所属していた暴力団である。また、関東最大の暴力団組織——華道会との対決姿勢を鮮明に打ち出している暴力団でもあり、つまりは、

「いやいやいや! どちらかというとな二人の方が冷静でいられないのでは? だって二人は」

「だからさっきの話に戻るのだがな、夏」

言って母が、夏華の喋りに割って入る。

そして告げた。これまたとんでもない無理難題を。

「私の力になってくれないか? この華道会と、白道会の架け橋に」

つまりは、華道花——夏華の母は親であると同時に、華道会を牛耳る長でもあったのだった。

第一章 不確かな真実（うた）【華道会と白道会4】

最近のエレベーターというものは、よくできている。

昔はガタンゴトンと駆動音がしたものだ、夏華達一行の乗ったそれは静かだった。更には、外が見渡せるガラス張り仕様だった為、景色を満喫できるというサービス付き。ただ、底も含め四方八方が透明なのは、利用者によっては、恐怖のアトラクションに様変わりする危険性も孕んでいた。

夏華達三人が乗るエレベーターは、あっという間に五階一〇階と、階を通り越していく。重力がかからないよう巧みに設計されたであろうが、それでも下に押し付ける圧力が三人に降りかかった。微々たるものだが確かな力。だというのに、当の夏華は微動だにしなかった。

というか、それどころじゃなかった。

（何でこんなことに何でこんなことに何でこんなことに何でこんなことに……）

自分の世界に引き籠もり、同じ疑問をループさせている。心の病み方が尋常でなかった。現実逃避とでも言っているのかもしれない。できるだけ後方にいる二人は見えないようにしている。そうすることで、少しでもここに居ることを忘れていたかった。

とはいえ、このままではいけないとも思ってしまう自ら。その、どこかに潜むちっぽけな良心が、状況を整理させていた。

（現在、白道会の本拠地に華道会の重鎮らがやって来てる。で、白道会と華道会といったら水と油くらいの敵対関係。これら二つから導き出される結論は？）

抗争、そんな言葉しか思い浮かばなかった。ならばと対抗策を練ろうにも、この丸ビルに入った瞬間から、そんなことを考えようがないくらい切羽詰ってる。だだっ広いエントランスを一步踏み込んだ途端、「ああん!？」だの「てめええ!!」だの罵声が飛び、強

面の男達に飛びかかれてた。無論、一女子高生を襲うなんてことはなかったが、殴られそうになる母を見る娘というのは、精神衛生上非常によろしくない。

即ち、ちょっとした抗争なら既に始まっていたのだ。

「――近藤。最近のお前はたるんでおる。仮にも若頭なら、日々の鍛錬を怠るでない。動きが鈍くて目も当てられなかったぞ」

「申し訳ございません。もう現場を退いて、五年以上は経つので」母と近藤が何てことない会話をする。その彼のスーツは、誰かしの鼻血で少し赤黒くなっていた。何せ迫ってくる白道会の組員を、丸ごとのしてきたのだ。正直、五人くらいまでなら数えられたが、それ以降はあまりの壮絶さに悲鳴ばかり上げていた。

おかげで今の夏華はみつともないくらいにげっそりし、声はガラガラに嘎^かれている。

そんな、ぐったりした人間が考えることといったら、やっぱり愚痴だった。

「何でこんなことに何でこんなことに何でこんなことに何でこんなことに……というか私、一七なのよ！ はめを外すって言っても、恋バナとかガールズトークとか、そういうのが積の山なんじゃないの？ 友達いないけど。スカートの丈折って膝上まで見せたり、髪染めたりして、ただただ先生に怒られるのが怖い――そんな年頃よ！ 怒られたことないけど。大体血って何よ血って！ 血飛沫浴びる一七^{ティーンズ}の女子なんて、どんだけ猟奇的だよ。言うほど浴びてないけど！」

心の中だけで呟いてるつもりが、知らず口に出てしまっている。精神の不安定ぶりが、如実に表れていた。何か後方で「くうっ！」といった、夏華を哀れむかのような男の涙声を聞こえる。こっちの方が泣きたいぐらいだった。

ついさっきの反省も踏まえ、今度こそ頭の中だけで思考を留める。（そもそも二人だけで白道会に乗り込むってどういうこと？ 無謀もいいとこだし、向こうに殴ってくれと言ってるようなもの。今回

は、たまたま人氣がなかったから良かったものの、もし普通の人ばかりがあつたら、いくら近藤とて無事では済まなかったはずよ）

刹那、エレベーターが停止し、夏華のうだうだも途切れた。見上げてみる。階は最上階である「三〇」を示していた。前方の扉が開く。

「さて、行くぞ」

華道花が、先頭を切って前に出る。

釣られるように近藤も出た。

片や夏華は、ここで一階のボタンを押してエレベーターを閉める幸せを考えていたが、行動に移せるだけ勇氣は持ち合わせていない。従って、嫌々ながら前に出たのだった。

この階層は一本道だった。三人は、赤のカーペットで敷き詰められた廊下を、ゆっくりとした足取りで進みゆく。途中、所々に設置しつちられた照明器具は、通行者の歩みに合わせ光るセンサー式だった。加えて、放つ輝きは高級感を煽る、厳かなもの。

周りの雰囲気^{ひんぎ}に当てられたのか、夏華の表情は自然と引き締まったものになる。とはいえ、普段ここに来る時は、こんな緊迫した面持ちになどなりはしなかった。と、なるとやはり元凶は、前方の二人。

夏華が思うことは一つだった。

（姉さん、きつと怒るだろうなあ……）

自然と、鞆を抱き込む両腕に力がこもる。それもそのはず。

元々下校した後、ここに足を運ぶ予定だったのだ。が、よもやこんな形での姉ひとに会おうとは思ってもみなかった。

横幅のある回廊は、徐々にそのうねりを減らしていく。そして終に、突き当たりを迎えたのだった。

視界の先に佇むのは、木製に似せた両扉。

実は自動開閉式であるそれは、差し詰め様式美といった所である

う。

(あれ?)

夏華は不思議に思った。それは、普段と違っていたから。いつもならあの扉の両脇には大柄のガードマンが二人、張り付いてるはずだというのに現状、誰もいなかった。

(何で?)

「やはりか」

そうぼやく母は、まるで何もかも見通してるかのようなだった。

「母さん。やはりって」

「夏。それはいいから、とりあえず先に入っておくれ。私からだ、何かと厄介なことになるからの」
むげ

夏華の聞きたそうな空気は無碍にして、母は本題に入っていく。一方、こちらとしては気にならないでもなかったが、あえて踏み込むほど野暮なことはしたくなかった。

故に夏華は、足並みを緩めた二人に代わって前へと出る。両扉の近くまで行くと、ウィーンという機械音と共に、扉が開かれた。その最奥では、馴染みのあの人が、黒革のソファ―ベッドに座って電話をしている。

齡は二八歳。セミロングの髪を少しカールさせることで、愛らしさを演出している。それは強気で、どちらかというと男勝りな顔つきとはギャップがあり、だからこそ魅力的だった。細身の体にはシミ一つなく、すらっとした脚には、自然と目がいつてしまう美しさがある。

可愛いというよりは格好いい。

可愛いというよりは綺麗。

女っぽいというよりは男っぽい。

というか、

(うっわー。やっぱそっくり)

今朝、兄と一夜を共にしていた女性の外見と、全くとっていいほど遜色がなかった。

そんな姉——加藤千世羅^{ちせら}が、電話越し発する音声。
初めに聞こえてきたのは、罵詈雑言だった。

第一章 不確かな真実（うた）【華道会と白道会5】

「だからウチは関係ないって言ってんでしょが！！　んなしつこいんなら奴さん、確たる証拠出せってーの！　こちとら朝から、ウチの者達を出張らせてそれどころじゃないんですわ。ええ……任意同行？　なら正式に逮捕状を取ったら、またおかけ直してください。それでは！」

ありったけの皮肉を込め、姉は電話を切る。

「警察からか？　近いうちに、ガサまで入るんじゃないかの」

その仕草に、声をかけるべきでない人が先手を打った。

喋りかけたのは、華道会の親玉。

夏華はただただ天を仰ぐ。

（てか私という緩衝材は！？）

先頭に立っているというのに、でくのぼうな自ら。

そもそも場の雰囲気のを和らげる為、第一声は託されたと思っていた。夏華が間に入ることで、少しでも双方がいがみ合わぬように、火花を散らさぬようにする心配り。少なくともその意図はあったはずなのだ。なぜならこの丸ビルに入る直前、母は「華道会と白道会の架け橋になってくれ」といった趣旨の発言をしてきたのだから。

しかしながら、蓋を開けてみればこの顛末。

先走りしやすい母の発言で、自分の立場は台無しになっていた。

後、夏華ができることといったら、所在無さげに俯くくらいなもの。

（私の存在意義って一体……）

だったらどうして巻き込んだ！　と嘆かずにいられない。が、そんなことお構いなしに、局面は張り詰めたものになっていった。

姉を見ると、下を向いている。その背後からはどうしてか、焰の如き激怒と大蛇の如き殺意が迸（ほとばし）りてくるように感じられた。見えるは

ずのないそれらは、五感として捉えようがないはず。これは目の錯覚、もしくは自身の情緒不安定さからくる強迫観念に違いないと、そう結論付けていた。でないと、やっていけそうにない。

「あらあら。これはこれは……今日は珍客が多いこと多いこと。テレビなんて見る暇さえなかったけど、きつと今日の運勢は最悪ね」姉がこちらには視線を合わさず、冷戦の口火を切る。

「それは嘘よな。今日び、ニュースを賑わしてる東京タワー崩落事件。それとの兼ね合いでお前さんとこの白道会は、引っ張りだこだっというじゃないか？ 羨ましい限りだ。会長」

「お褒めに預かり光栄です。それに、何かとウチの者とも遊んでくれたみたいで――」

と言いながら、近藤に目を向ける。途端、彼の全身がビクンと波打った。

(恐ろしい。恐ろしすぎる)

あの近藤をもって、あの反応。リアクション蛇に睨まれた蛙といった所だろう。同じカモられる側の夏華にとっては、とても他人事ではない。

「それより、座ってもいいかね。老体に立ち姿はきついでの」

「冗談。お帰りを」

そう口にしながら、不気味な笑みを浮かべる姉。対する母も母で、笑顔を作ったまま歩みを進めると、彼女の向かいに鎮座する同色のソファアーベッド、そのふくらみに腰掛けた。結果、対面する形になる姉と母。

建前という名の仮面を被った殴り合いは、ここからが本番のようだった。

とりあえず夏華は、ここでじっとしていても埒が明かないので、渦中の二人がいる所まで歩いていく。近藤も右に同じくといった様子で、そそくさと同じ挙動を見せていた。

ここは東京都心に拠点を置く、白道会の会長室。

姉の好みからか、内装は白と黒を基調にした、シックな逃あつらえだった。目に付く物といったら本棚に机、他には接待用のソファアーが二

対あるだけ。

そんな質素さが目立つ一角で、激しく燃え盛る二人の鏢迫り合いが佳境を迎えていた。

「にしても、これまた大それたことになったわいね。今じゃどこもかしこも、この話題で持ちきりよ」

「生憎と、そんな無駄話ができるほど暇ではないんでね。単刀直入といきましょう。丸ビルにまで乗り込んできた用件は？」

「……何が狙いよ？」

「いやはや、東日本を裏で操る方とは、およそ見受けられない洞察眼ですね。白道会がやったと、そういう見立てですか？」

「それ以外なかう。消去法よ」

「ならば、そちら以外考えられないのではないかと」

「何だと」

母は威圧しながらも、訝しげな表情をする。

「腹の探り合いなんて、する必要すらないのでは？ だってそうでしょう？ 塔をぶった切るなんてありえないこと、歌族の血筋を引くあなた以外、誰ができるっていうんですか」

「私がやったと？ 何の為に？ あんなモタレ（三下やくざ）一匹を消すのに、わざわざ大仰なことはするまい。というか、私の血統を受け継いでる者は他にもいる。お前があの冬治をそそのかしてやった——そうではないのか？」

「あの男、ですか。自分の息子に対して、随分な言いようだ」

「奴はもう、華道家から勘当された身。私の子は夏だけよ」

「なるほど。ですが、彼の性格はよくお知りのはず。アイツが歌を人殺しの道具に使うなんて、まかり間違ってもありえません」

「だから言っておる。お前が、そそのかしたんだと」

「これでは堂々巡りですね。まともな議論ができそうにない」

壮絶な舌戦は、じわじわと相手を追い込む、そんな女ならではのねちっこさがあった。

（歌族、か。やっぱりそこに行き着くのね）

二人のやり取りを聞きながらに夏華は、この血族について少しばかり考えさせられていた。

歌族とは、古くから華道家に脈々と受け継がれる、特殊な血統を持つ家系のこと。それは歌うことで、そこに込められた詞を現実^{じしは}に反映させられるという、異能が揮^{ふる}える家族だった。

即ち、その力はあまりにも人外で且つ、持て余すもの。

現に夏華が真つ二つにした東京タワーも、その異能によるものだった。それだけの凶悪さ故、幼い頃から歌うことは、いけないことだと教えられてきた。殊今に至っても、歌うことは学校も含め、決してしてはいけないことだと厳しく戒められている。

「――歌族というのはな、部外者が一朝一夕で理解できるようなものではないのだよ。古よりその家だけに受け継がれてきた、由緒ある血統故の掟。それなぞ、お主の与り知るところではあるまい？ 軽はずみな発言はやめなされ」

と蔑む母に対し、姉の切り返しは博識なものだった。

「『掟』というのは、決められた齢までは歌ってはいけないとする決まりでしょうね。現代では、その境目が二〇歳^{はたち}に上げられるとのこと。あ、でも齢^{とし}のくいすぎたあなたには、関係ない『掟』でしたね。ごめんあそばせ」

二人の会話は、段々と内輪の話になっていく。それは部外者からすれば、何を言ってるかさっぱりな話だった。が、身内である夏華からすれば、何もかもが知った話。

第一章 不確かな真実（うた）【華道会と白道会6】

（……あの掟のことでしょね）

そもそも「掟」については、随分前から知っていたのだ。何せそう言い聞かされてきたのだから。だから、自分がその禁を破ってることも自覚している。

「……何故お主がそれを知っておる？　もしやあの冬治おとしこから無理矢理聞きだした、そうなのか？」

母がピリピリした表情で姉を問いただす。対する彼女はあきれていた。

「何でそうなる。曲がりなりにも私達は家族なんですよ？　普通に教えてもらっただけです。理由は、あなたじゃできなかったことをする為。夏華かぞくを守る為です」

「何が家族よ。おぞましい。貴様らが、勝手に裏で手を回して作ったまが紛い物ではないか」

「紛い物で結構。少なくともそうせざる状況にまで追い込んだ、あなたには言われたくない台詞ですね。それに私を叩くのが実にお好きのようですが、お忘れなく……あの戸籍偽造から何から何まで、やったのはあなたのお子さん——冬治ですよ？」

その言葉に母は、苦虫を噛み潰したかのような顰しかめ面づらを見せる。

一方、夏華にとってこの話は幼い頃の出来事ただだけに、どういう経緯とかはすっ飛ばして結果だけを知っていた。

即ち、戸籍の偽造。

元々、異能を司る華道家には二人の跡取りがいた。それが華道会会長——華道花の息子である冬治と、娘の夏華。

また、事実上の会長に次ぐ実力者であり、華道会を支える若頭——近藤には二人の跡取りがいた。それが彼の娘である千世羅と、息

子の千己。

つまり夏華にとって、血の繋がった兄妹は冬冶だけなのだ。したがって本来なら千世羅は義姉にあたり、千己は義弟と相成る。

しかしながら、世間体的にはそうはならなかった。なぜなら兄が裏で手を回し、戸籍を偽造したから。結果、できた新しい関係。

冬冶、夏華、千世羅、千己——この四人は、一つの別な家族として生まれ変わったのだ。

苗字もそれぞれ、華道と近藤から加藤へと改名し、その筋から足を洗った。

その、はずだったのに、

(……姉さん)

どういう訳か数年前、千世羅^{あね}だけがこの華道会に戻ってきたのだ。

そして裏切った。

さすがに華道会を真つ二つにするほど、とはいかないがそれでも組織内が揺らぐくらいに大きな反逆。そうして反目した同胞を集めできたのが、あの白道会なのである。

(そういえば学校のパソコン室で見た2チャンでも、白道会は華道会の分派だとか何とか、当たらずとも遠からずな話があったわね)

そう思いながらも夏華には分かっていた。

どうして義姉^{あね}が裏の世界に戻ってきたのか、どうして裏切ったのか、どうしてこんな大変な境遇に身を置いたのか。

(全部、私たちの生活を支えるためなんでしょう？ お金の面でも安全の面でも)

つまりは養われる立場でしかない夏華が、あーだこーだ言える問題ではなかった。が、やはり納得がいくものではない。

こういう所も全部ひっくりめ潔癖症な性格だった。

「きっとそちらが最も恐れているのは、冬冶の動向でしょう。そり

やそうですね。彼のおかげで、今の関東一の地位まで上り詰められたんだから。けど、彼はあなたとは違う。あなたみたく平気で歌の力を暴力に変えるような、そんな人じゃない」

夏華がごちゃごちゃ考えてる最中も、二人の会話は続いていく。義姉のきついお咎めに、母は何やら物思いに耽ってるようだった。

「どういうことだ？ 奴が無関係とするなら、一体誰が？ 私と奴以外でそんなこと、できようはずもない。そんなことができる人間などいるはずが――」

そこまで呟いた所で不意に、母は夏華と目を合わせた。次いでその瞳が大きく見開かれる。

明らかにさっきまでと、佇む雰囲気は変わっていった。

「ここまできて、まだしらを切り通すつもりですか？ もうネタは割れてるんですよ。それで結局どう示し、つけてくださるおつもりか？」

片や問いつめる義姉は、母をこの崩落事件の犯人と見ているようだった。そんな話の展開を、ただ聞くだけの立場ではいられなくなった夏華。全身が訳もなく熱かった。頭が熱に浮かされるように、何も考えられない。胸が不安でいっぱいになり、何故か右手で左腕を抱く。

自分を抱き締めたことで、ようやく体が震えてることに気づいたのだった。

「……………」

そんな夏華の動揺を知ってか知らずか、義姉の言葉に何の返答もしない母。会話のキャッチボールがなされなくなった場には、当然の如く静寂が訪れた。

気まずい沈黙が続くにつれ、次の一声ひびくが出しにくくなる空間。皆が皆だんまりを決め込んでいる。

そして、やっと場を賑わせた声は異様だった。

部屋中に響き渡るほどの大笑이었다。

長く長い、母の嘲笑うような、蔑むような嗤い。わら不気味なそれは、

（母さん？泣いてるの？）

「ほれ見たことか。何も変わらない。私の言った通りになったでは

と喋る母は、だれか誰とも視線を合わせていなかった。まるでここにはいない冬冶に話しかけるように、斜め下に視線を落とす。

その奇妙な様子に口を挟む義姉。彼女はどこか怪訝けげんな顔つきをしていた。

対する母は、唐突に話を打ち切るとソファから腰を上げる。後、体を翻して自動扉に向かうと、近藤も彼女に付き従った。実の娘には見向きもせずに。

「ちよつと待ってください」

そんな二つの背中に声をかける義姉。敬語であることからそれは実の父にではなく、夏華の母に向けてのものだった。

「何よ？」

言って彼女は振り返らず、歩みを止めることなく両扉の前まで来た。そこまで行くとウィーンという機械音と共に、扉が開かれる。

「もう夏を巻き込むのはやめてあげてください。私は別に、冬冶のように一切会うなんて偏ったことは言いませんが、にしたってあんまりです。仮にもあの子は、この世界から足を洗った身。お願いですからもつと普通に接してあげてください。『華道会の一会長』ではなく『一母親』として」

「『家族』だったな？ お前達は」

訴えかけるような声調^{トーン}に変わった義姉に対し、母の切り返しは脈略がなかった。とはいえ、皮肉がたつぷり込められてるのはよく分かる。

そして彼女は告げた。これ以上ないくらい確信に満ちた瞳で。

「その『家族』とやらだがな、後三日もたずバラバラになるさ。

まあ、しょせんは偽物。むしろここまでよく粘ったといった所か」

「いい加減にしてください。さつきからね、話が全然見えないんですよ。電波飛ばすならどっか他でやって——」

「夏は必ず華道会^{ウチ}に戻ってくる。そう遠くないうちに………必ずだ」

必要最低限の、省かれた二言三言だった。おそらくは義姉にきちんと伝わらない、そんな内容であろう。

そんな母の言葉に、どうしてか夏華は胸を突かれる思いだった。さっきのように見つめられた訳でもないのに、額から嫌な汗が伝っていく。

全てを見透かされてるような、やるせない気分だった。

一方、義姉はというと、口元は動いているが声になってない。口出ししようにもその言霊が持つ、妙な説得力にほだされてしまっているようだった。言い返さないでいるといったのまにやら、二つの背中

はこちらから見えなくなる位置まで遠ざかっていく。

こうして両扉は自動的に閉まり、話は後味の悪いものに終わったのだった。

第一章 不確かな真実（うた）【華道会と白道会7】

「はー、全く冷汗もんだわ。どんだけの威圧感だよ、あのババア。こっちはこっちで手一杯だったのに。大体何のつもりで来たのかしら。最後までよく分からなかったけど」

「……………」

一難去ったからか、義姉は軽口を叩けるようになるが、夏華の方はというと深刻に口を噤^{つぐ}んでいた。

（母さんに、知られた）

まず間違いない。そう思うには、十分すぎる反応だった。

どちらにせよあの異能が揮えるのは、母と兄以外には自分だけ。さっきの話にあったように、「消去法」で導き出したのだろう。

夏華が東京タワー崩落事件の、真犯人であることを。

どうしてそれをここでバラさなかったかは、分からない。どうして問い詰めてこなかったかも。

どうして泣き笑いのような顔をしたのかも、分からない。

ただ、それでも、

（必要な種は、きちんと撒いた）

ここまでは全て、夏華の思惑通りだったのだ。

分かっていたのだ。こうなることは。と、いうよりもそうなるよう仕向けたと言った方が正しい。後々の為に。

あの崩落事件の裏に隠された本当の目的——「勸善懲悪」の為に。つまりは、今のところ順調だということ。だというのに、夏華は浮かない顔だった。それは、想像と現実とのギャップがあまりに大きかったから。

（恐、かった）

考えもしなかった。肉親である母が、あんな鋭い目つきで自分を

射抜くなんて。あの一瞬だけは確かに、華道会の長としての眼力が顔を覗かせていたのだ。

そして夏華は、頭が真っ白になった。分かったことだというのに、恐がってしまった。震えてしまっていた。望んだことだというのに、嫌でたまらなくなった。

何よりそんな矛盾した自分が、扱いきれない自分が不安でならない。

夏華は泣きそうだった。

（恐い。自分が分からなくなる。恐いよ……………兄さん）

「…………っ！ 夏！！」

刹那、耳をつんざく大声が、夏華を現実世界に引き戻す。義姉によるものだった。

「はいいい！？」

かなり耳元で叫ばれたせいで、夏華は頭がぐらんぐらんする。耳鳴りがひどかった。

「この私をわざわざ立たせ、名前を連呼させるなんてアンタ。どういう了見よ？」

怒りのベクトルが若干、おかしい方向にいつてる気がするが、それもまたご愛嬌といった所だろう。

「あ、いや、その」

彼女の声に答えようとするも、すぐにはいつもの自分に戻れず、夏華は口ごもる。

「アンタ大丈夫？ 何かすごく疲れた顔してるけど」

さすがに毎日、衣食住を共にしてるだけあって、少しの動揺も義姉は見逃さなかった。

（まずい。しっかりしないと）

気持ちを切りかえる意味で夏華は一度、大きく深呼吸する。

「大丈夫です。ちょっと二人のぶつかり合いに、びっくりしただけで」

「そう。まあ、あんなの滅多に見れるもんじゃないからね。にして

も、夏。お願いだから、もうこんなことに首を突っ込まないで。あなたのお兄さんが華道会と決別したのは全部、あなたに普通の生活を送ってほしいからよ。なのに、こんなドロドロしたことに身を置いて……これじゃ冬冶が浮かばれないわ」

「それを姉さんに言われる筋合いはありません。兄さんが守りたかったのは、私だけじゃない。私達家族、みんなです。なのに姉さんは裏切った。勝手に華道会に戻って、勝手に」

「おい」

言って義姉は、夏華の両頬を一つまみする。加減がなかった。

「いひやいいひやいいひやいいひやい（痛い痛い痛い痛い）！？」

「子供ガキのくせに、大人に口ごたえしないの。分かった？」

「ほひよひよやひやいへふ（子供じゃないです）！」

「そういうところが子供なの。何でもかんでも、綺麗さっぱりとはいかないのよ。誰もが人には言えない悩みを抱えて生活してるの。それにアンタが口を挟む権利はない。オーケー？」

「はひやひへふははい（離してください）！」

「さすが潔癖症けつぺい。人の言うこと聞きゃあしない。なら、こんなのはどう？」

「ひゃふへふは（何ですか）！」

「――夏がお母さんと会ってたこと、冬冶に言うわ」

脅しとしては十分すぎる言葉だった。学校のパソコン室でビクついた義弟と同じく、震え上がる夏華。

姉妹そろって兄を利用するあたり、家族というのは脅し文句も似通っていた。

「アイツがこのことを知ったら、間違いなく家から叩き出されるでしょうね。まあ、でも家から追い出されるなんて昔はよくあったことだし、たまにはいいかも。あ、言っとくけど、もうアンタもいい歳なんだから、前みたく私の助けを期待しないように。可愛くない妹なんてね、ほっぽっとくに限るのよ」

頬を左右に引っぱる指は、なおも力を緩めそうにない。躍動感あ

ふれるその指さばきは、夏華をどんどん涙目にしていく。

どうあっても覆せない、姉妹間の上下関係。

絶体絶命の義妹いもうとが言うことといったら、一つだった。

「ほほほへんひゃひゃい（ごごごめんなさい）！！」

そうして、ようやく義姉は、頬をつまむのをやめたのだった。

片や夏華は、腫れた両頬を、跡が残らないようにとこすっていく。
色んな意味で心が折れていた。

「ひどいです。あんまりです。私はただ、学校帰りに姉さんの所に寄って、お弁当を届けるだけだったんですよ！？」 それなのにいつものまにか黒ベンツに巻き込まれて、気づいたらここに」

「えーっと。話が見えないんだけど――とりあえず落ち着いて。苦労したんだろうなっていうのは伝わるから。冬治には言わないわよ。だから、大丈夫。そんな泣きそうな顔しないの……ほら、来いな」

首を傾げながらも義姉は、弱った義妹を抱き込む。夏華の鼻腔いっぱいに、女性特有の甘い香りがした。これだけで、もし自分が男だったら惚れてしまうんじゃないか、そんな熱に浮かされてしまう。加えてこの包容力。

加藤千世羅という義姉は、紛れもなく大人な女性であった。

夏華はそのたおやかな胸に顔を埋めると、温もりにただただ甘える。自分の髪が、優しくにと梳とかれていくのを感じた。

「この甘えんぼうさんめ………恐かったでしょう？」

「はい」

「お姉ちゃんがいるから安心なさい。アンタを絶対、あのクソババアから守ってみせる」

「クソババアって、私のお母さんですよ？」

「娘を不幸にするだけの母親なんて、クソババアで十分。私の方がずっとアンタを思ってる。ずっとアンタを、幸せにしてみせる」

「……はい」

こういう明け透けなく本音をズバズバ言うところは、極道の任侠からくるものだろうか。

それはよく分からないけれど、夏華はたまらなく嬉しかった。少し、泣きべそもかいてしまっている。

やっぱり夏華は、この家族が大好きだった。だから失いたくない。バラバラになってほしくないのだ。

「さーてと、ずいぶん遅くなったけど、お昼ごはんとしましょうか。丁度お腹もすいてきたことだし」と、義姉が湿っぽくなる雰囲気を作る。

「ですねですね」

夏華もそれに合わせ、元気に振舞う。

こうして義姉に肩を抱かれる中、手持ちの学生鞆を漁ると、最後の弁当箱を取り出した。その色は、赤。

二人は和気藹々なムードの中、いつものように中華弁当談議に花咲かせていく。お互い、少なからぬ悩みを持っていながらに、笑顔を絶やすことはなかった。

姉妹で気遣い合う、思いやり合う、そんな光景。

それは痛々しいような、けれども微笑ましいような、相反する情感がたっぷり込められたものであった。

第一章 不確かな真実（うた）【都市公園 世羅（せら）1】

義姉の昼食に付き合っ後、長らくだべっていると、あっという間に時は過ぎていく。

二人が丸ビルを出る頃にはもう、外の街並みは真っ暗で、代わりにライトアップされた噴水広場が幻想的な色のハーモニーを見せていた。

「……綺麗」

夏華は自然と思ったことを口にする。その唇からは、白い靄がふわっと上がっていった。東京の冬は今日も冷えこんでいる。

「何というか、絵になるわね」

と言う義姉は感慨深げだった。

「はい？」

「可愛い子ってのは何をやっても許されるって言うけど、夏はその典型ね」

「それは嫌味ですか？　だって姉さんの方がずっと綺麗だし、胸だつてあるし、大人の魅力たっぷりだし、それにそれに」

「はいはい、ありがとう。私が言ってるのはそういうことじゃなくてね、こう純真無垢っていうか、乙女っていうか……うまく説明できないけど、要は『若いっていいな』ってこと」

「はあ。まあそりゃ、三十路手前の姉さんに比べれば——」

途端、ゲンコツが夏華の脳天に直撃する。

「それにしても、今日は人通りが多いわね」

「何がですか！！」

まるで何事もなかったかのように、同じ呼吸で会話をしようとする暴力女^{あね}。一方、夏華はというと、頭を抱えて蹲っていた。

「後一〇年経てば、分かる」

「どうしたら人の頭かち割りたくなるってんですかええ！」

「ぶち切れるとヤクザ口調になるなんて夏……可愛くない。お姉ち

やんは悲しいです。そして、可愛い妹であってほしい。だから、ほら」

おもむろにしゃがみ込み、手を差しのべる義姉。彼女の的にはここで、義妹に微笑んでほしいのだろう。その夏華はというと、腕をへし折ってやろうかと思っていた。

けれども、しょせんは一時の感情。

夏華は義姉の手を握ると、起き上がる。結局、憎まれ口を叩くだけで終わったのだった。

そんなこんなで、二人は手を繋いで歩きだす。

この界限は、人ばかりでゴった返していた。

並び立つ高層ビル群を縫うように、できた道路脇の歩道を二人は進んでいく。道幅が狭いそこでは、誰もが窮屈そうにしていた。目につく人といったら、会社帰りの忙しいサラリーマンやOLばかりで、まるで生活観が感じられない。その様は、まさにビジネス街一色といったところだろう。

そんな中、制服姿の夏華は明らかに浮いていた。ただ一人ではない分、恥ずかしいとまではいかない。というかそれ以上にこの服で問題なのは、

(寒い)

吹きつけるビルの隙間風が、無防備な膝下を凍えさせているのだ。加えて翻ってしまうスカート。

その端を押さえながらも夏華は、さっきから気になってることを口にしたのだった。

「あの、ところで姉さん。私たち帰らないんですか？　まさか徒歩で帰るなんて言いませんよね？」

「んー。にしてもさっきの中華弁当、いつも余っちゃうのよねえ。まあ、ラーメンだけだったら食べきれるんだけど」

「私はそういう姉さんに脱帽です。むしろアレ以外だったらいける

と、普通はそうなるところですよ」

「そう？ まあどうせ残っても夕食では、そういう余り物をうまくアレンジした料理、作ってくれるからね」

「ってただ温め直すだけじゃないですか。それを『アレンジした料理』と表現するには、あまりに家族びいきかと」

「って言いながらもアンタ、食べきるじゃない」

「うっ。け、けどそれは、チャーハンに限っての話です。あれなら、油を拭き取れば何とかいけますから」

「私だってラーメンに限ってのことよ。で、ウチの実弟は確か、餃子だったっけか？」

「千己ですか？ ええ。今日、お昼を一緒にした時も分けてあげました」

「そうなんだ。まああの子の場合、ちよつとアレルギー体質で決まったものしか食べれないからね」

「あー、そうでしたね。牛乳アレルギーでしたっけ？」

「ええ。だから日ごろ食事を気遣ってくれる冬治にはね、頭が下がる思いなの」

「いやいや姉さん。さつきからというか、毎度というか、兄さんい鼻び屑いすぎなんですよ。特に食事に関してなんて、褒められることは何一つしてないじゃないですか」

「……………そう？」

と、間を置く義姉の問いかけは、とても意味ありげだった。

「何ですか、その意味深さは？」

「いえいえ。単に冬治がかわいそうだなあと。親の心子知らずというか、兄の心妹知らずというか」

「人を勝手に悪者扱いしないでください。だから何なんですか、その含みは？ 兄さんが毎日毎週毎月毎年、中華を作り続けるのに、しかるべき理由があるとしても？ 実は私が中華しか食べれなくて、それでもって中華は家族愛の象徴で、そこにはお涙ちょうだいの話が隠されてるとでも？ ちなみに私の大好物はスイーツです」

「はいはい分かった分かった」

義姉は手を繋いでない方の左手で、癩癩を起こしそうな義妹の頭を撫でる。

「納得できないことがあると、すぐ怒りっぽくなるんだから。ダメよ、そういう性格^{とく}。何でもかんでも完璧にしなくたっていいの。夏が言うように、冬冶が中華にこだわるのに理由なんてない。ないけどね……けど、素敵なの」

「はい？」

中華地獄に苦しめられてきた夏華としては、どうあっても納得できなかった。

「ま、いいじゃない。そんなこと」

「ええ。どうでもいいですね、そんなこと。で——一体全体、どこ向かってるんです？」

「んー。にしても」

「姉さん！」

さすがに夏華としては怒りっぽくもなる。ただ、それは別に納得できないからではなく、義姉がはぐらかしてばかりいるから。

とはいえ、

（どうせあそこに行くんだろうけど）

夏華には、どこに向かってるかの検討くらいはついていていた。なぜなら、毎度こういう展開だから。けれど、せめて言ってよと思う。

そしたらこちらとしても言い返せるのだ。それが、無駄に終わるということ。

「公園に行っても兄さん、来ないですよ」

我慢しきれず先手を打って、夏華は言いたいことを口にする。何せ手がかじかむほどの寒さだ。早く家に帰りたい心情からすれば、致し方なかった。

「えーっと」

その決定打に、困ったように視線を彷徨わせる義姉。

「……………」

その様子に、一切助け舟を出さない夏華。追い込まれた義姉は、あらぬことを口にしたのだった。

「何のこと？」

「今更知らぬ存ぜぬで通せるとでも!？」

すつとぼける義姉に、義妹の怒りはついに爆発した。

「大体どこまで恥ずかしがりや気が済むんですか! 別に私は、昔二人が恋仲だったことは知ってますし、今でも惹かれ合ってるのは知ってますし、だから何で別れたのかなんて見当もつかないですけど、にしたってその恋路に私を巻き込まんといってください! 寒空の下、来るはずもない人を待つ女性。それはとっても絵になるでしょうが、んなものより私にはコタツですよコタツ!」

「え? 惹かれ合ってるって………冬冶、私のこと、好きって?」

こんなにも言葉を羅列したというのに、義姉が聞き返したところは本題と無関係だった。加えて頬を赤らめさせ、柄にもなくモジモジしている。

夏華が思うことは、一つだった。

(コイツめんどくせえ)

中華中毒の兄といい、厨二病の義弟といい、少女漫画チックな義姉といい、夏華の家族は問題ばかりだった。

「あの、私帰ります」

と家族を見限った所で、首根っこを引っぱられた。抱き込まれる。勿論、こちらとしても本当に帰るつもりはないのだが、見透かされるのも癪だった。なので、頬をぷくつと膨らませる。

「もう、今のは冗談に決まってるじゃない。だから、ぷりぷりしないの。それより、ほら。着いたわよ」

その言葉に、夏華は辺りを見渡す。すると左手に映ったのは、規則的な景色に逆行するかのような、開けた公園だった。だだっ広いそれは、さっきまでが息苦しかった分、憩いの空間としての印象を強く感じさせる。都会の大袈裟なくらいの眩しさと、園内に設置された電灯の光とが、所々生い茂る緑を美しく照らしだしていた。

夏華は入口部分にあるプレート、そこに彫られた文字を読み込んでみる。

『都市公園 世羅^{せら}』。

そして夏華は、ため息をついたのだった。

第一章 不確かな真実（うた）【都市公園 世羅（せら）2】

おそらく『都市公園 世羅』の『世羅』は、義姉の名前——千世羅からきているのだろう。自分の買い占めた敷地名に、自分の名前を組み込むという利己主義^{エゴイズム}っぷりには、ほとほとあきれるばかりである。

「……ここに来る度思うんですけどね、姉さん。もうちょっとマシなネーミング、考えられなかったんですか？　これじゃまるで、自己顕示欲の塊みたいな人に思われるじゃないですか」

「ん？　アンタ知らないの？　このご時世、女性が社会進出する時代なのよ」

「こんな進出、痛いだけです。ちなみに、さっきまでいた丸ビルの名前は？」

「『ツインビル 世羅』」

「いつビルがツインになった!？」

「あーもう、口やかましい子なこと。別にビルが一つだっていいじゃない。何か住友ツインビルだったり、三田ツインビルだったり、大手ってそんな感じでしょ。その系列で」

「どんな系列ですか無関係もいいところ!」

無駄だと分かっていることに首を突っ込まされたイライラと、極度の寒さが、義姉への怒りを加速させていく。

「はあ。つくづくアンタのそういう性格^{とく}は要改善ね。無駄だと分かっていたっていいじゃない。寄り道、していきましよう」

後ろから義妹の手を掴み、公園内へと強引に引っばっていく義姉。一方夏華はというと、不機嫌極まりない顔つきをしていたのだった。

ここは、義姉の率いる白道会が買い占めた土地、その上に成り立っている公園である。

元々は中小企業のビルがこじんまりと建っていただけなのだが、いつしか買収され取り壊され、後にこの大公園ができた。

これらに関して、誰による介入があったかまでは分からない。が、この話題になると黒い噂が絶えないということは、つまりはそういうことなのだろう。

そんなこんなでできた公園内は、整然としていた。真っ直ぐに奥へ伸びる一本道は横幅が広く、そこを通る姉妹ふたりに窮屈な思いをさせることはない。両脇には桜の木々が鬱蒼と茂っていた。今の時期は枯れ木にすぎないそれらは、春になるとこの道を桜色へと染め上げ、通行人の目を楽しませていく。

そして、更に奥へ進んだ所でようやく聴こえてきたのが、雑多な音楽。

見える前方の光景は、多くの聴衆で溢れていたのだった。

「——今日も盛況ね」

そう呟く義姉。夏華も、それはそうだなと思う。

中心となる大広場には、野外のライブ会場が設置されていた。五人以上の人間が自由に立ち振る舞えるだけの、四角のステージ。その舞台裏には、最新の音響装置やら舞台装置やらが完備されており、現状どこかの無名バンドがロック調の歌をうたっている。その背後に控える大スクリーンでは、メインボーカルの顔がドアップで映し出されていた。

ド派手とまではいかないまでもそれなりの規模を誇る会場。

更には、常に絶えることのない観客の数。

それがこの公園の醍醐味でもあり、また、白道会がこの土地に手を出した狙いでもあった。

白道会という組織は一暴力団であると共に、一エンターテインメント集団でもあるのだ。

暴力団排除条例が全国に施行されて以来、肩身の狭い思いを強い

られることになったヤクザ稼業。華道会ほどの大組織ならいざ知らず、白道会程度の組織では、大手を振るって本業に手を出せないでいた。

そんな中で見出されたのが、もう一つの才覚。堅気の世界に溶け込み、且つ出るとこは出るという、光と闇の部分を併せ持ったプロデュース能力だった。

（にしても何人いるんだろう？ 千人以上いるのは確かだけど）

この大広場は、半円状に奥行きを持ってる構造だった。その収容スペースは千人単位は軽く入れる広さで、あまり有名でないであろうバンドを前にして、それなりの観客が動員されている。

その半円より奥——コンクリートの敷居を越えた先には、深闇の隅田川がたゆたっていた。

そして背景には、あの真っ二つにされた東京タワーが逆さまに映って——

「っ!？」

途端、胸が息苦しくなる。あの象徴的な赤光りが夜の景色から消えるだけで、与える物悲しさは計り知れなかった。

それだけ自分が犯した罪は、重い。

「やっぱり私の見立ては間違ってたわね。昨今、着歌やら着メロやらのダウンロードが主流になりつつある音楽業界。楽曲はMP3ファイルとして、データとして管理される時代になった。で、今の情報化社会と。必然的に不正ダウンロードは横行し、歌が売れなくなる訳よ」

「……………」

「そこで私は生歌に目を付けたのよ。こんな時代でも、各アーティストによるライブの動員数だけは落ち込まなかった。理由は単純。歌は不正にアップできても、ライブ映像は不正にアップできても、そこにある臨場感まではアップできないもの。皆、歌を生で聴けるのなら聴いてみたい。それが無料タダとあればなおさらよ」

「……………」

「勿論、こっちだって慈善事業じゃない。ステージに貼られる広告や、合間合間でスクリーンに映し出される宣伝には、がつつり広告料と宣伝費をかけてるしね。なのに申請する企業が後を絶たないってのは、嬉しい悲鳴よ。おそらくここがビジネス街の中心にあつて、それだけに宣伝効果が高いっていうのがあるんでしょう」

「……………」

「ただ、こればかりは一概にそうとは言いきれないわ。だって歌とビジネス街って、およそ歌と無縁じゃない。中年男がポップなチューンを聴きにくる絵って、あんまり浮かびにくいし——そろそろ何か言ってほしいかな、なんて」

「……………」

「夏？ 夏！」

「はいはい。聞いてますって。このビジネス街で歌が成功した理由ですよ？ 何だかんだで、歌って取っ付きやすいからなんじゃないですか。働き盛りの三〇代なら、若者ほどではないにしろ流行の曲についていってるでしょうし、何より一緒いちにはいになって騒げるじゃないですか。中年のおじさんだって、お酒を一二杯いちにはいかつくらってほろ酔い気分になったら、よく分からない歌にだって千鳥足で踊るでしょうし」

「さすがの洞察眼と言いたところだけどアンタ、冷めてるわね。まだ怒ってるの？」

「別に」

「そう？」

「まあいいんじゃないですか。結局は、この公園に住まぬしう主のおかげってことで」

と、夏華は平気な顔して、義姉の一番痛いであろう部分を突く。対する彼女は、引きつったような笑みを浮かべていた。

「これまた、抽象的な呼び名を使うわね。いつものように兄さんと、そう呼べばいいのに」

「やめてください。誰かに聞かれでもしたら、大変なことになるじ

やないですか。前に知り合いだと思われて、ファンの人に揉みくちゃにされたんですよ。主に姉さんのせいで、ですけどね」

「いいじゃない。堂々としていれば。何一つ恥じることないわ」

「私は姉さんのように、神経図太くないんです。繊細なんです。ここでは無関係を装うんです」

まるでロボットのように、機械的に義姉との会話をこなしていく夏華。

犯した罪に苛まれている。

そして、そんな雰囲気を知ってか知らずか、止まらない彼女の唇。正直煩わしかったのだが、いつしか彼女のペースに吞まれ、気をそらすことができていたのだった。

(……敵わないなあ)

素直に、夏華はそう思う。どうしても家族故の鼻肩目が出てしまうが、それを差し引いても義姉という存在は別格だった。

飄々としているが、見るところはちゃんと見てる。

傍若無人だが、誰より頭が切れる。

実際、こんなギャップが彼女の魅力、その本質だった。現にその奥深さに惹かれる異性は多い。

かくいう夏華の兄——冬治もその一人だった。

「けど何でもかんでも冬治の手柄にされたら、たまったもんじゃないわね。私だって頑張ったのよ？」

「というか、どうしたって行き着く先はそこじゃないですか。あの都市伝説が生まれなければ、ここまで人が殺到することはなかったでしょうに」

「それはそうだけどお」

相変わらず、ぬけぬけと惚^{ほう}けてみせる義姉。とはいえ夏華だけに分かっていた。彼女が、どれだけのことをしたかを。

加藤千世羅という義姉は、持てる知恵の全てを振り絞り、加藤冬治という兄を救ったのだ。

華道会と決別し、新たな家族を背負うことになった冬治。元いた組織からは勘当され、けれども家族を養っていかねばいけなかった。当時幼かった夏華には、およそ理解の及ばない所であり、また、高校生の今に至ってもその苦労は推し量れないのだが、それでも彼が何を捨てたかくらいは分かる。

冬治は恋を、そして歌を捨てた。

義姉から聞いた話では、いい所までは行っていたらしい。路上ライブやインディーズで頭角を現し、メジャーデビューのお声がけもあったという。そんな矢先の、あのお家騒動。今でも夏華は、どうして親のスネをかじらないのかと思ってしまう。浅はかな考えかもしれないが、それでも意地なんて張ることないと思ったのだ。

けれど彼は、家族の為に何もかもを捨てた。

そして義姉はそんな融通の利かない兄を、歌の世界へと引っぱりだしたのだ。

「んー、でも確かに初めの頃は閑古鳥が鳴いてたものね。無人の公園に赤字ばかりの決済。このままじゃ一族路頭に迷って、首をくくるしかないって所までいったもんよ」

いまだに義姉は本当のことをはぐらかしている。その様子にもどかしさを感じた夏華は、つい思ってたことが口を突いて出たのだった。

「そうだったんじゃないかって……そうなるよう仕向けた。違いますか？」

「私がわざと自分を苦境に立たせたとしても？ まさか」

「いいえ。姉さんはあえて苦難の道に飛び込んだんです。どうにもならなくなつて、にっちもさっちもいかなくなれば、兄さんが助けざるをえなくなりますから。そもそも考えてもみてください。ビジネスが本場の街に歌を盛り込むって発想自体、どうかしてます。採

算、取れるはずないじゃないですか。聡明な姉さんにしては、あまりに不可解。理由は兄さんにもう一度歌ってもらう為——それ以外にないです」

「色々勘ぐってくれてる所悪いけどね、夏。私はそんな殊勝な人間じゃないのよ。むしろ打算的な人間。で、上に立つ者^{もん}つてのはね、皆そんなもんよ。下に付く者^{もん}らの生活を背負^もってるの。自分のことばかりとはいかないのよ」

（嘘だ）

確信を持って思える。

彼女は嘘をついている。

義姉は、兄の為なら犠牲を厭わない人間だということを夏華は知っている。実は献身的な女性だということも。

何より兄のことなら、彼女は誰より知り尽くしているのだ。

だからきつと気づいている。自分が惚れられてることに。そして、必ず助けにきてくれることに。

この公園の成功、その舞台裏には互いに想い合ってるからこそ繰り出せる、そんな淡い駆け引きがあったのだった。

第一章 不確かな真実（うた）【都市公園 世羅（せら）3】

「で、結局はあの兄さんを上手く丸め込んだじゃうんだから凄いです。どんだけ自分に自信あるんだ、って言いたくもなりますけどね」

というか兄が義姉じふんにそっくりな姿形とはいえ、女をとつかえひつかえしてることに何も思わないのだろうか？

そんな疑問が頭を過ぎるが、当の本人がそれを気にする素振りは見受けられない。割りきった大人の関係といったところだろうか。それとも好色が、締めつけられた願望の捌け口になってることを見越してるからだろうか。

仮にどちらかの推測が真実を言い当てていたとしても、夏華あずかの与り知るところではない。

やっぱり夏華に慣れない恋愛ごとは、理解不能だった。

「んー、何か言った？」

近くにいながらに二人の会話は、もう耳を澄まさなければ聞こえない状況に陥っている。

ようやく二人は五万ごまんという観衆、その後尾につけたのだった。

間近で響く大音量の音楽が、遍あまねく人に歌を振り撒く。激しい楽曲の割には、それを聴き入る立ち見客は落ち着きがあった。どちらかというと冷めている、そんな印象。差し詰め静観といったところだろうか。

（無名のバンドにここまで人が集まる訳ないし……と、なると、きつと今日の大トリを待ってるのね）

気づけば、時刻は夜中の九時前を示している。月9げつくしかり九時というのは、ここでは大トリ——最も注目されるべきミュージシャンだけが、歌うことを許された時間帯だった。今ではここは、スカウトマンが足しげく通うほど名が知れ渡ってる為、それ相応のバンド

でないとしてトリを張ることは許されない。

最近でもこの時間帯でのパフォーマンスを許されたのは、次代を担うだけの実績あるインディーズバンドや、メジャー落ちしたが可能性を感じるバンド等々。メジャーデビューの地に、ここが利用されることすらあるくらいなのだ。

それくらいに競争が激しく、また実を求められる音楽業界。

とはいえ……

（早く帰りたいなあ）

そんなことより、一刻も早く家路に着きたい夏華であった。

（大体、姉さんはどうして兄さんがここに来るって思ったんだろう？ もし歌うんなら、必ず家族への事前連絡は欠かさない兄だし、よほどのことがない限りは———）

そこで夏華は、ハッとした。

頭を巡らしてみても初めて気づく、自分の愚かさ。

少し考えればすぐに分かることじゃないかと。よほどのことなら起こったじゃないかと。自分が起こしたじゃないかと。

あの、東京タワー崩落事件を。

（……………っ！？）

訳もない罪悪感に駆られた夏華は、思わず一步後ずさろうとした。が、

（え？）

できない。というか、身動きが取れない。

振り返ってみる。

そこには前方と同じくらい、いやそれ以上の観衆が五万と犇めき合っていたのだった。

「……あ、ああ」

夏華は、変なうめき声を上げてしまう。開いた口が塞がらない。知らず、浮き足立っていた。

ついさっきまで、余裕をもって歩いていた桜並木道。そこに所狭しと並び立つ観衆。

こんな光景、初めてだった。

何でこんな事態になってるのか？

そんな疑問に対する答えは歴然としていた。

皆、不安だったのだ。なんだかんだで、恐かったのだ。いつもあるはずの東京タワー、お馴染みの東京タワー、そして日本の象徴でもある東京タワー……それが、あんなことになったことが。

だから期待している。この公園の主——加藤冬治が見せる奇跡を。あの、都市伝説を。

刹那、鼓膜が張り裂けんばかりの大歓声が、園内を席卷した。あまりの迫力に、夏華は右へ左へと体をフラつかせてしまう。

軽く目眩を覚えながらも一呼吸置き、ゆっくりとライブ会場へ視線を戻す。

そこには——

（兄さん）

彼がいた。確かにいたのだ。

堂々とそれでいて毅然と、ステージのど真ん中に佇むマイクスタンド、その前に立っている。小脇には、自宅にあったあのアコースティックギターを抱えて。

時刻は夜の九時。

喝采は鳴り止まない。

いまだ収まりのつかない盛り上がりを噛み締めるように、兄は辺りを見渡している。不意に、彼は目元を拭うような仕草をみせた。

その動きに夏華は、義姉の顔を覗いてみる。

強気な彼女、そのうつむき顔には一筋の涙が伝っていた。

他人には分らない、二人の感情の昂ぶり。

夏華には痛いほど伝わる、ここまでの道のり。

兄はギターを真剣に身構え下を向くと、場に緊張を喚起する。たったそれだけのことで、嘘のように園内は静まり返ったのだった。まるで魔法にかけられたかのように、歌い手と聴衆の心がシンクロしてるようだった。と、いうより聞き手は、そんな魔法にかけられたがってるのかもしれない。皆が皆、彼が作り出す歌の世界観に浸っていたいのだ。聴いていたい。あの、心躍る音楽を。

そして遂に兄は、顔を上げる。それが始まりの合図。

目に映った彼の顔つきは、これ以上ないくらいに勝気で、これ以上ないくらいに幸せそうだった。

（――来る）

第一章 不確かな真実（うた）【都市公園 世羅（せら）4】

そしてギターは掻き鳴らされる。はじく指から導き出されるは、踊る旋律。目にも止まらぬ速さで奏でられるイントロは、誰がどう見ても神業だった。更にはその作られたメロディーラインと共鳴し合うかのように、独特の体づかいでリズムを取る歌い手。

続く躍動感に、心奮わせるだけの音律。

加えて、ベースやドラム、エレキやストリングスといったバックサウンドが彼の楽曲に後押しする。

調和した音の総和は聞き手を圧倒させるだけの、そんな壮観さで溢れていたのだった。

? Darling 僕はここにいます

息の詰まる このよごれた世界に

Darling 僕はここにいます

ニユースの絶えない このろくでもない世界に

Darling 僕はあなたといま

そんな世界で 笑っていられる為に

Darling 僕はあなたといま

そんな世界でも 愛すべきもんが——Darling!?

Aメロは緩急がつけられたものだった。初めは激しくもなく、かといって緩やかでもない。滑らかに唇を震わせていった。声質は中性的でいながらに、人の聴覚を刺激するだけの力を持っている。

加えて揮われるもう一つの力。

歌族生来の、異能の力。

彼が歌った、?僕はここにいます?というフレーズ。

瞬間辺りは暗くなり、設置された電灯、そこから放たれる光が異様な光景をみせる。

公園中を照らす電灯——照明、その全てが筋となり束となって、

冬治^{あに}だけに注がれたのだ。

「っ!？」

あまりな出来事に夏華を含め、観客はどよめきだす。
幻覚と見紛うだけのありえない光景。

集められた光は、まるで生き物のように歌い手を慈しみ引き立たせ、ただただ彼の実存性を高めていく。

とはいえ光量が絞られてるのか、眩しいという訳ではなく、目に優しい加減で瞬いていた。

が、これで終わりではない。

？僕はあなたといいます？で冬治は、手を観客へとふり翳^{かざ}す。

刹那、膨大な煌^{きらめ}きが、彼ら彼女らに降り注いだのだった。

冬治経由で放たれるそれは、まるで光のカーテンのように一息^{ひといき}と、最前列から最後尾まで広がっていった。夏華もその帯^{おび}を浴びる。

感じたのは眩しさと、そして温^{ぬく}さ。真冬だからこそありがたみあるその暖かみは、人に言いようのない歌心を感じさせる。

が、これで終わりではない。

締め^{しめ}に歌われた？Darling!？の大声。

瞬間、電灯——そのLED照明が激しい火花と共に、散^ちっていたのだった。

結果、その灯具^{とうぐ}やらカバーやらの一切合財は弾け、一瞬にして園内を照らし上げて後、真っ暗にしてい^いく。

打ち上げ花火のごとく最後の散り際をみせる、照明。その有り様は儚^{はな}く、また殊のほか激烈だった。

？好きなもんを 挙^あげてみる

おにぎりおらずに 四季色とりどり

どんなちんけだって　どんな美だって
噛み締められりゃ　そりゃ結構なもんで？

Bメロはビートが上げられた、テンポのいい流れだった。

一方、辺りはというと、舞台上に設置された照明も消され、完全なる闇に包まれている。そんな中であって響く歌声は、唯一の発信源であり道標。より人の耳に届く、そう工夫された環境だった。

彼が歌う？四季？。

瞬間、起こった異変に誰もが気づいた訳ではなさそうだった。ただ、夏華には分かる。というか人差し指に止まってるのだ。

夏の風物詩である、あの蛍ほたるが。

？こんな

夏いまを抱き込んで　嫌って　振り回され　好きになって
くるくる

向き合い掴むは　ちっぽけな現在あいま——だとしても

あーだこーだ　あった過去あいま

だから

どんな冬ふゆだって　見つめて　悩み　泣き笑いして
くるくる

育み繋ぐ　でっかな未来あいま——もっともつと

嘆き　声を上げてく　この素晴らしい春いまを？

サビが人に夢を見させる。

？夏？のところで真冬の公園に、無数の蛍が舞い上がったのだ。

映ったのは、果てない緑光の粒と粒。その圧巻の光景は自然の、この世界の最も美しい部分を見せられてる気さえする。

どこからか感嘆のため息が複数、ハモリ合って伝播していった。
美しい。ただただ美しい。

？くるくる？で観客の頭上を旋回していく、緑の線と線。それは川となり渦となって、夜空を席卷していく。人工の光が消えたせいか、ひよっこり顔を出した星々が、どういう訳か夏華の目に沁みた。

長いことこんな景色、気にも留めたことなどない。

そして、クライマックスにあたる？春？。

瞬間、真冬の並木道に、満開の桜が咲き乱れたのだった。

「……………」

ここまでくると、もはや誰も声を上げない。夏華はというと圧倒されすぎて、現実の非現実さに頭がついていってなかった。

ついさっきまで枯れ木にすぎなかったそれが、彼によって息吹をふき込まれ、蕾を咲かせ、一斉に花開かせる。

不意に、ひらひらと舞い落ちる花卉が、夏華の鼻に止まった。感じるのは春の訪れと、夏の奥深さ。桜を宿り木にする蛍の光が、鮮やかな情景を映し出していた。倒錯した季節ならではの、不可思議な情緒。それが奇しくも、人々を魅了しているようだった。

片や冬冶はというと、曲を終わらせる頃合を見計らうかのように、ギターを掻き鳴らし続けている。聴衆の機微を読み、望むだけにひたすらストロークを利かせていく。それはとりわけ長く、どれだけこの場を共有する観客一人ひとりが、この幻想的な雰囲気味わっていたいかがよく伝わる。

やがて伊智は飛び上がり、着地する。

と同時に、一斉に音楽は止み、何もかもがリセットされたのだった。

「……………」

際立っているのは、終わったと同時に焚かれることになっていた照明演出のみ。

蛍は消え、桜は枯れ木に。電灯に至っては残らず壊されていた。静寂だけが園内を包み込む。

が、それは数瞬のこと。

「——！？」

沈黙を切り裂く大音声だいおんじょうが、追って園内を塗り変え、混沌とさせて

いった。

あまりな喝采。

夏華のすぐ近くでは両拳を突き上げ、謎の雄叫びを上げてる輩まで出てくる始末だ。

拍手は鳴り止まず、その熱狂ぶりはこちらにまで伝染する熱さと労いがあった。

一方、その渦中にいる夏華はというと、理解できない頭で鳥肌をたてていた。

そんな中でふと、あの都市伝説のことが思い出される。

いつ、どこで、誰が広めたかも知れぬ風の噂。

『この公園には、魔法使いが住んでいる』

「ふふっ」

思わず、夏華は微笑してしまう。なぜならこれでもかというくらいに、二次元だから。

誰がやったかなんて、一目瞭然。

千己がやったことは、一目瞭然。

きつと持てる機械知識に託けて、ネット上にこの類の情報スラングをばら撒いたのだろう。そして、でっち上げた。無論、二次元っぽいというだけで彼一人に絞り込めようはずがないのだが、この家族を長年やってる夏華に見通せないことなどなかった。

つまり、この兄を巡る歌の駆け引きは、単に二人の恋模様で綴られる、そんな薄っぺらいものではない。

家族の絆が絡んでいるのだ。

繋がっている。他人には分からない、深く深い奥底の部分で。

そしてそこには、冬治あにの手を引く千世羅あねがいて、冬治の背を押す

千己おとうとがいて――

「……………」

そしてそこには唯一、夏華の姿だけ、どこにも見当たらなかった

の
だ
っ
た。
。

第一章 不確かな真実（うた）【都市公園 世羅（せら）5】

あらかたのお祭りごとが終わって後、夏華はしんみりとした雰囲気浸っている。集まった大勢の観客も同じ気持ちなのか、すぐには帰ろうとせず、雑談をしながらもその余韻に浸っているようだった。

すると、

「あ」

順々に明かりが灯されていく。ちらほらと、公園内を照らしだすLED照明。

さきほど異能の力によって壊されたはずの電灯が、その力によって修復され、気づけば元通りになっていたのだった。

（歌いながらに、終わったら元通りになるよう詞に込めてたのね。どこの部分かまでは分からないけど……細部までパフォーマンスは欠かさないあたり、兄さんらしい）

本来なら蛍や桜を消した時に、同時に電灯も元に戻せたはずだ。それをしなかったのは、ひとえに演出の為。現にその照明は、この宴の終わりをきちんと印象付けていた。

最初から最後まで歌に対して真摯な冬冶。普段が大雑把なだけに、どれだけそれに心を碎いてるかがよく伝わる。

どうしようもなく歌っていたいのだろう。たとえば、日の目を見ることがなくても。

一方、観客はというと、ようやく帰り支度を始めだす。これだけの奇異が起こっても騒ぎ立てない辺り、今の世といったところだ。おそらく勝手に最新の映像技術やら3Dの進化版やらで、自分の脳内に説明をつけてるのだろう。

無論、歌の異能によるものだと気づけるはずもない。それでも中

には、疑問に思っ
てパソコンの掲
示板やツイッター
に書き込む輩が
出てきはするが、
どれもこれも無為
に終わった。

表沙汰になつては
何かと困る、もう
一つの華道会ちからがそ
れに蓋をし
てゐるのだらう。

「うーん。さつてと、
帰りますか」

と言うと義姉は、流
れだした人ごみに合
わせ公園出口へと向
かう。ずっと繋が
れていた彼女の手は
離され、温もりが消
えていった。

「え？　ちよつと姉
さん！　せつかくだ
し帰るなら兄さんと
一緒に

――」

そう夏華が声を上
げたところで、義姉
はふり返る気配さえ
見せなかった。た
だ後ろ向きで、軽く
手を振るだけ。何
せこの人の数だ。
すぐさま彼女は雑
踏に紛れ、追いか
けようとする夏華
は、人のうねりに
巻き込まれてしま
っていた。

身動きがとれず、
ぎゅうぎゅう詰
めの中を右往左往
するばかり。

やっと人波が引
いたと思つた頃
にはもう、義姉の
姿はどこにも見
当たらなかった。

「……………」

ぽつんと公園に
取り残された夏
華。勿論、他にも
まだ遊んでいた
い輩がいるには
いるが、身内に
置いてけぼりに
されたのは、い
ささかショック
だった。

とはいえ、これ
はいつものこと。

かれこれ何年
になるだらうか。

その期間が分
からないくらい
長く、義姉は兄
を避け続けている。
あれだけあから
さまに想つて
るのに。想わ
れてるというの
に。そして、
それは兄も同
じ。

これがかつて
恋仲だった二人
の現状。別れた
男女としては、
あまりに変な話
だった。知った
人なら誰だつて
こう思う。

こんなのおかし
い。

（早くヨリを戻
してほしい。いや
、私が仲を取り
持つんだ。私だ
つてこの家族の
一員なんだから）

自分だけが何
の役にも立っ

ていない。

だから、夏華は力になりたかった。そう強く願っていた。もうずっと、ずっと前から。

「――夏？」

聞き違えることのない男声が聞こえる。兄だ。黒のダウンコートを羽織っている。

考えに耽りながらも、とぼとぼ歩いていた夏華は、気づけばライブ会場の舞台袖まで来ていた。

ライブ終了後はいつもここに来ていたので、あまり意識せずとも辿り着けたようだ。

「あれ、兄さん？」

「それはどちらかというところ、こっちのセリフだと思うんだが。何で夏がここに？」

「あー、それは姉さんが……いえ、やっぱり何でもないです」「ん？」

「そんなことより、もう終わったんですよ。帰りましょ帰りましょ。ていうか、寒くてたまらんですよ」

すると、おもむろに兄は夏華の手を触れてみせる。

「お前、こんなに冷えてるじゃないか！？」 それにその格好……まさか学校帰りで、そのままここに？」

「え？ え、ええ！ その通りです」

さすがに、本当のことは喋れない。

「こんな寒いってのにどうして？ いやもういい。帰るぞ」

問答無用で夏華の手を取ると、公園出口まで引っぱっていく彼。

正直、人前で兄と手を繋ぐことに恥ずかしさがないと言ったら嘘になるが、この通りな無神経男あになので、身内いもつととしては色々諦められていた。

第一章 不確かな真実（うた）【タクシーで帰宅】

案の定、無鉄砲に顔を出した冬冶を、園内に残ってたファンが目ざとく見つける。すぐさま取り囲まれた。が、当の彼は一切を取り合わない。黄色い歓声も聞こえてるだろうが、それにも応えようとしなかった。

ただ集まった人混みをかき分け公園出口に出ると、タクシーを止めるべく道路脇で手を上げている。

（……つくづく融通の利かない人）

本当ならこんな等閑なこと、するはずがないのだ。歌い手であれば誰しも、聞き手がどれほど大事な存在か分かっているもの。それがメジャーバンドでなければ尚更だ。なのに、冬冶は突き放す。というより、それ以上に優先すべきものがあるのだ。

（また、私のせいだ）

彼の中心にあるのは、いつだって家族だった。

思い出されるのは今朝のひと悶着。妹がお腹を空いているというだけで、兄は平気で恋人を切って捨ててみせた。

『とりあえずお前、もう帰れ』

反芻される、あの突き放しの言葉。もし自分が彼女の立場だったらと思うと、たまったものではない。

そのくらいに極端な、彼の家族愛。

つまり夏華は愛されていた。そして、それは同時に夢の足枷になっていることも意味する。

「――夏？　おーい。聞こえてるか？」

「え？　は、はい」

兄に声をかけられ、夏華の思考は現実に戻される。すると目の前、その道路端にはもう白塗りのタクシーが止まっていた。チカチカと、ハザードランプを点滅させつつ後部座席のドアを開かせている。

「お前、さっきからなんか変だぞ。ぼーっとしてばかりで」

「いや、その、すみません」

「いいから。ほら」

と、兄は妹を中へと先導する。先にタクシーに入った夏華が奥に詰めると、追って彼が乗り込んできた。

そのままの勢いで、兄は行き先をタクシードライバーへと告げる。ややもしてドアが閉められる音がした。白黒の制帽を目深にかぶった中年男性が、ハンドルを道路へと切っていく。

目的地——二人の家へと、車を走らせていったのだった。

車内は暖房が利いており、暖かかった。車外との温度差に晒された夏華、その黒フレームのメガネは曇ってしまっている。

後部座席は三人が座れるくらいの余裕があった。とはいえ、夏華は兄にびったり寄り添う。どうしてか人の温もりが欲しかった。そしてそれは、誰でもいいという訳じゃない。

「ん」

兄は、声にもならぬ声を発すと夏華を抱き寄せる。そのまま手を上げていくと、妹の長髪を撫でていく。とても自然な仕草で。

「着くまで寝てな。起こすから」

言って夏華の頭を自分の右肩に預けてくる、冬治。ついさっきまであれだけの観客を相手に、あのパフォーマンスをやったのけたのだ。真冬だというのに、兄の着るダウンは少し汗ばんでいた。おそらく中のシャツはびしょびしょだろう。

どちらが本当に疲れてるか、はつきりしていた。

そして、それが悪いと分かった上でも夏華は彼に甘えてしまう。ずっと長いこと、繰り返されてきたこと。慣れてしまったというより、二人にはこれが日常だった。

夏華にとって加藤冬治という人間は、兄であると同時に、母であり父でもあったのだ。

幼い頃、華道家を飛び出してからこれまで、どんな時も一緒だった。無論、いっぱい喧嘩した。いっぱい反抗おとうともした。それは千己も同じで当時、反抗期を迎えた二人を一手に受け止めた冬冶には相当な苦勞があっただろう。

それでも、全て受けきってくれた。そして、いっばいに笑い合った。だから夏華は思う。強く、強く思う。

「――へえ。そうなんですか。にしてもやっぱり、不況の煽りですかねえ」

兄の声がする。タクシードライバーとたわいもない話をしてるようだった。片や夏華はというと、眠気眼でうとうととしていた。

彼の温もりに包まれるだけで、与えられる安心感は計り知れない。どんな恐怖も吹き飛び、どんな不安も拭い去られる。守られている、そう強く感じるだけの無条件の愛。

だから夏華は思う。強く、強く思わずにいられない。

加藤冬冶という兄の、力になりたいと。

第一章 不確かな真実（うた）【四人家族で和氣藹々1】

車内に充満する暖気に、寒気が吹き込まれる。

ドアが開かれたのだ。

知らず、夏華の体が身震いをおこす。

「夏。着いたぞ」

兄に呼ばれ、肩を揺すられた。随分深い眠りについていたのか、夏華の意識はすぐには戻ってこない。

「……ん。んう」

寝言ともとれる猫なで声をこぼしてしまう。タクシードライバーの「可愛い妹さんですね」との一言に、「ええ。ただ潔癖症なのが、たまに傷でして」と喋る兄。

どうやら二人は雑談中に、色々と身内話もしていたようだった。

「兄、さん。着いたの？」

「あ、起きたか。先に降りてな。こっちは金払わんといかんから」

「はいはい」

まだ眠そうなだみ声を残しながらも、自分方面に開かれてるドアから外へと出る。

「寒っ」

冷えた外気が、ぼんやりした頭を叩き起こしていく。

すると、見える景色が馴染みの家を映し出した。

夏華達の家だ。

それは、二階建ての一軒家。みすばらしい、というほどではないがかなりの年季が入っている。二階建てなので、大きいかと問われれば必ずしもそうではなく、こじんまりとしていた。色は近隣の住宅街に溶け込む中間色で、庭とも言えない敷地を跨いだ先に入口の扉がある。

二階を見上げてみる。窓からは、薄明かりが灯されていた。義姉、義弟共に、もう帰っている頃合だろう。

帰る家があるという、迎えてくれる人がいるということ。

夏華にとってそれは当たり前で、だからこそ妙なテンションになれていた。

広げた手を頬に当てると、

「帰ってきましたよー！」

「こら、夏。こんな夜中に近所迷惑だろうが」

すぐさまお叱りの声をもらう。と同時に、ブロロという効果音も耳にした。タクシーが帰ったのだろう。

「む。せっかくいい気分でしたのに」

「怪しいことをすな。それより、ほら。入った入った」

兄は妹の背中をポンと叩くと、先へと進む。その動きに合わせ、夏華も後をくつついていったのだった。

扉が開かれる。二人は家内へと入った。

玄関に辿り着くとそこには――

「あら。お帰り」

まるでぼったり居合わせたかのように、そこには千世羅^{あね}がいた。

バスタオルで髪をくしゃくしゃに拭きながら、なんてことない言葉をかける。

「ただいま」

冬冶^{あに}がそれに答える。

結果、今日ここにきて初めて交わされることになった、二人のやり取り。

夏華は、義姉の顔を覗いてみる。

肩までかかるセミロングの髪――タオルケットを被ったそこから垣間見れた彼女の横顔は、あんまりな笑顔。

最高の、女性としての笑みだった。

(……姉さん)

この一時にかける義姉の思いに、夏華は胸打たれる。当然、鈍感^あに

男は、彼女のそんな横顔など見ていない。ただ靴を脱ぎ、夕食の支度をするためリビングに消えていった。

こういう所は、いくら家族を第一に考えてるからって許せるものではない。

どうして気に留めてくれないのかと夏華は思う。

思いのほか水滴が飛び散ってる、玄関前の床。

一階ではなく、二階に浴室があるという事実。

義姉の部屋は二階にあるという事実。

これらの内、一つでも気に留めればすぐに分かるはずなのだ。義姉がどうして玄関にいたのか。

「夏もお帰り。もう少ししたら夕飯だから、着替えてきなさい」

その彼女に軽く声をかけられる。いつもの、自信満々な声色で。

「了解です」

だから夏華も元氣よく応える。彼女の思いに。

あれこれ首をつっこむべきでないのだろう。少なくとも今は。

とりあえず姉妹仲良く階段を上がると、それぞれの部屋に散っていく。四人の部屋割りは明解で、階段側から兄、妹、義弟、義姉の順だった。ちなみに、奥側には洗面所兼浴室がある。

夏華はすぐそばにある扉、そのノブに手をかけた。そして回す。

開かれた自分の部屋。

瞬間、何かが飛び込んでくる。

映ったのは、ちびっ子の鬼気迫る表情。

千己おとうとの泣き顔だった。

第一章 不確かな真実（うた）【四人家族で和氣藹々2】

「姉さん!!」

抱きついてきた小柄な彼を、反射的に受けとめる夏華。少しのけ反ったが、踏ん張れるだけの重みだったので押しとどまる。

「――っくりしたあ。一体全体、何でつてのよ？」

「無事だったですか!? 無事だったんですね! よかったあああ」

次は勝手に納得して、勝手に安堵するという奇天烈ぶり。

さすがに夏華としては、千己の言動が理解できなかった。

「ちよっとチョコチョコ。どうしたのよ。それに、今さら敬語って」

「いやだって何度連絡しても繋がらなかったから、心配で心配で」

その言葉に、夏華は少し回想してみた。

（ああ）

そして思い当たる。確か、千己のあまりな面倒くささに、携帯の電源を切ってたんだった。

（それで携帯が繋がらなかったから、私のことを心配して……そっかあ）

敬語なのは、こちらが怒ってるんじゃないかというのも心配してのことだろう。

どこまでも心配性な千己。

けれども、それもこれも自分を思つてのことだろうから、夏華は彼が可愛くてならなかった。

少し強めに抱き返す。いまだ鼻につく臭いにおが潔癖症な自らを不快にさせたが、それ以上に愛めでてあげたかったのだ。

「おバカ。私は大丈夫よ。大丈夫」

ひねくれた義弟でも、根は優しいことを夏華は知っている。何せこの家族の一員だ。

あの兄の愛がまんべんなく行き届いた家族。

そんな愛された環境だからこそ、互いが互いを思えるのかもしれ

ない。

「とにかく、ほら。着替えないといけないから廊下で待ってて。一緒にリビングまで行こう。ね？」

「また夕食……中華料理ですかね？」
デス・チャイニーズ

「そうね。中華料理ね」
デス・チャイニーズ

穏やかな雰囲気になった場に、齒がゆい沈黙ができる。

後、二人して吹き出したのだった。

わだかまりが無くなった所で、夏華は千己を部屋の外へと促す。一人になると制服を脱ぎだし、黒フレームの眼鏡を外して近くの鏡台に置いた。花柄で、もこっとした部屋着に着直すと、上着に滑り込んだままの長髪を両手で外に追いやる。オシヤレというよりは暖かさを重視したそれは、家内ならではだった。

着替え終わるとドアの前で待ってた千己と共に、一階へと降りていく。そのまま右手に見えるリビングへと入った。

四角のリビングは真ん中にあるテーブルを中心に、奥には台所、右端にはテレビをと、まさに一家団らんの典型的仕様だった。この家一番の広さを誇るそこは、一軒家ならではのものもあり、それが左端にあるガラス戸である。そこを開けた先はあの庭とも言えない敷地が広がっており、つまりはすぐそばにブロック塀があった。

そして、そこに目を向けた時に、事件は起こった。

夏華にとり目を疑う光景にして、許されざる行為。

ガラス戸が開けられた庭先にて兄が、タバコを吸っていたのだ。ぷかぷかと。

吹かしたところで、夏華の堪忍袋の緒が切れた。

一目散に兄のところまで向かうと、その啞えタバコを奪い取る。ただ、消そうにも近くに灰皿はない。有害物質を手にしてるだけでも我慢ならないというのに、その最たる副流煙がゆらゆら迫ってくるというのだから限界だった。

夏華はそれを床のフローリングにこすりつける。

「お前っ!？ 何てこ」

「考えられない!!」

夏華による罵声を契機に三度、兄妹喧嘩の火花が散ったのだった。どこからか「よくやるわねえ」といった女声が聞こえる。義姉であらう。

どこからか「さすが潔癖症^{けつぴ}」といった男声が聞こえる。義弟であらう。

二人に見守られる中、口喧嘩する兄妹。

その有り様は騒がしく、だからこそ変わらぬ家族の情景なのであった。

第一章 不確かな真実（うた）【明かされる真実】

夕食を終えると皆が皆、寝支度に入る。

各々がそれぞれの明日のため、自分の寝床に入ったのだった。

結果、静まり返った二階の廊下。

その暗闇にあって何故か、一条の明かりが照っていた。

光源は奥側。

時刻は深夜〇時。

洗面所にいたのは、就寝したはずの夏華だった。

化粧をしている。ファンデーションやらマスカラやらで整えられた顔つき。齢の割には背伸びした、そんな色香を漂わせていた。目には眼鏡の代わりにコンタクトを入れ、リップで唇に紅のルージュを塗っていく。

ふと、こんな時、父がいたらどうするのだろうかと思う。

兄と同じく、歌を人殺しの道具として揮うことを許さないのだろうか。

それとも、自分の苦心を汲んでくれて優しく抱き締めてくれるのだろうか。

いずれの問いかけも、今となっては答えを見ない。もう、何もかもが手遅れだから。

父は殺されたのだ。あの東京タワーの警備員にして、白道会の元組員である室井健人に。

夏華が洗面所から廊下に出ると、声がした。かすかな咽び声。音源は扉を隔てて向こう側から。義姉の部屋からだった。

（――姉さん）

彼女は泣いていた。声質はくぐもっていて、布団を被って必死に声量を抑えようとしてるのがよく分かる。それでも伝わる、どうしようもない悲壮感。

特に兄の歌を聴いた後に、それは激しさを増すのだ。一度や二度じゃない。

もう何度も、何度も彼女の涙声を聞いてきた。

「……………」

ふと、こんな時、義姉の母がいたらどうするのだろうかと思う。

兄と同じく、家族第一の傍観者を気取るのだろうか。

それとも、義姉の恋心を汲んで優しく抱き締めてくれるだろうか。いずれの問いかけも、今となっては答えを見ない。もう、何もかもが遅れだから。

義姉の母は殺されたのだ。華道会の、ある組員に。

そして、この二人の殺人事件は同時刻、同じ場所で起こっている。そして、その翌日、加藤冬治と加藤千世羅は、長い付き合いに終止符を打ったのだった。

チャリラリラーン♪

場違いに陽気な着メロが流れる。それを一音でとると電話に出た。「まだ、階段のところよ」

気づけば夏華は、階段を下りるところまで来ていた。とはいえ、家族を起こしてはいけなかったので小声で話す。

相手からの音声はない。沈黙が場を支配した。

ややもして、プツツという音が聞こえる。電話が切れたのだろうか。

夏華は玄関まで辿り着くと重い出口への扉、そのロックを外す。

音を立てないよう、扉を開けると外に出る。するとそこには、

「あ、やっときた」

さっき電話をかけてきた主——加藤千己が立っていた。厚着のフーードコートを纏い、小脇には小型のノートパソコンを抱えている。

「ごめんごめん。下準備に手間取ってね」

言って二人並ぶと、扉から離れていった。ゆっくりと外に向かって歩みを進める。

その間際、夏華は振り返ると見上げた。

送った視線、その先にあるのは兄の部屋だった。

（……兄さん、待ってて。私が全部終わらせてくるから。そしたらまた、みんなで笑い合おうね。兄さんが恋を押し殺す訳でもなく、姉さんが恋で嘆くこともない——そんな本当の家族に、きつとなれるから）

夏華は胸の内に今一度強く、念を込める。

そうして二人は、夜の暗闇に消えていったのだった。

第二章 確かな代償（うた）【某バーカウンター1】（前書き）

視点が、主人公（夏華）からある人物へ変わっています。

第二章 確かな代償（うた）【某バーカウンター1】

第二章 確かな代償^{うた}

深夜 某バーカウンター

そのカウンター席に男はいた。

ロックグラスに、注がれたウィスキーを流し込む。水割りでもなく、ソーダ割りでもなく、ただ氷一つで喉を通らせていった。アルコール度数が高いせいか、首筋と耳元が熱い。顔は真っ赤で、すでに泥酔するほどの量を飲み干していた。が、向かいにいるバーテンダーに空いたグラスを置く。その仕草に、彼は少し引きつった笑みを浮かべながらも、すぐさま愛想笑いをふりまいていった。それもそのはず。

男の顔形は、とても堅気^{かたぎ}の人間のそれではなかった。

黒スーツに、黒のサングラス。厳^いしい風貌に加え、ごつい骨格をしている。髪型はスプレーにより固めたオールバックで、明らかに他人を寄せつけなかった。現に人気の多い店内にあって、彼のいるカウンター席には誰もいない。

男はぐらんぐらんする瞳で、辺りを見渡す。そこでは、バスドラムの拍子が特徴的なハウス・ミュージックに合わせ、男女が踊り乱れる様が見て取れた。上部に設置された巨大なミラーボールがきらきらと、うす暗い店内に細切れの光を差していく。くすんだ地下にあってそこは、言わばナイトクラブといったところだろう。

（どいつもこいつも）

荒れた心で覗く景色は、気に入るものではなかった。

男は女を誘うために、女はそんな危険を味わうために、腰を振っているようにしか見えない。そんな、発情した獣の如きまぐわいは嘲

笑を呼ぶものでしかなかった。

再びカウンターに目線を落とすと、なみなみ注がれたウイスキーがある。震えた手でそれを掴むと、一気に流し込む。喉元がいやに熱い。覚束ないグラスの持ち手が、当然の結果を生んだ。

手からすると抜けたグラス。それがテーブルに落ち、次いで転がって床に落ちた。パリンと、割れたガラス音が耳に障る。

やおら拳をテーブルに叩きつけた。強い打音と共に痛々しい光景が、バーテンダーの体をビクつかせ、顔をしかめさせていく。

(ちくしょう……ちくしょう)

男は気に食わなかった。これ以上なくらいに不機嫌だった。

「わしらを守ってくれるって——そういう話じゃなかったのかえ」
途端、今度は急に涙声へと変わる酒びたり。感情の起伏が激しいが、どちらにせよ最悪な気分であることに変わりはない。

やはり、頭を何度もかけ巡るのはあの、東京タワー崩落事件。

これがあの異能の力によるものだということは、男も分かっていた。

なぜなら男もまた、その華道会かどうかいのれっきとした組員なのだから。

(やっぱり華道会ウチの会長がやったに違いねえ。けど、だったら何で一度はわしらを助けたんだ？ 殺そうと思えばいくらでも手があつたはず。何であんな惨いむじことを)

と、思ったところで吐き気を催し、堪らずカウンター席で嘔吐する。口いっぱいに酸っぱさが広がった。こんな前でみっともない真似をしているというのに、どこか他人事のように思える。ただせり上がるままに、吐き出していった。

図太い男声に加え、広がる生臭さ。

そんな中だった。

ふと、背中をさすられたのは。

「ああん!!」

これが極道の性さがなのか、むやみやたらに虚勢を張る男。そして、睨んだ先にいたのは、あまりに予想外な人物だった。

女性だ。それもとびつきの上物^{びじん}で、長髪な。

目、鼻、胸、腰回り――映る四体の全てが、整っていた。均整の取れた美といった所だろうか。少しけばいとも取れる化粧の濃さも、幼さの残る顔を隠すという意味では、きちんと力を持っていた。

齡の割には背伸びした、そんな色香を漂わせている。

とはいえ、それ以上に男が気になったのは、彼女の服装だった。冬だというのに露出度の高い真紅のドレスを着こなしている。開けた胸元にはたわわな谷間が見え、スカートのスリットから見え隠れする脚のラインが、男をそそらせていた。

ここまで露骨にアピールされると、さすがに男は事態が呑み込めてくる。自分の腕にはめた高級腕時計をさすると、自嘲的な笑みを浮かべたのだった。一体自分は何を期待してたんだと。

その女がかかる第一声は、やはり甘い誘惑であった。

「大丈夫ですか？」

「……ああ。悪いな」

「いえ。でも、まだ顔色がよくないですね。無理に飲みすぎたんでしょう」

言って女は、床下まき散らされた嘔吐物を、取り出したハンカチで拭いていく。無論、多量に水分を含んだ惨状だ。ハンカチ一つで、どうにかできるものではない。

つまりはパフォーマンス。客引きのための。

「お嬢ちゃん。店はこの近くなのか？」

「はい？」

まずはすっ呆けてみせる女。最低限の演出は心得ているらしい。

「ふん。ならそれでいい。名前は？」

「名前、ですか」

そうオウム返しする女。顔は窺えない。男からの目線では、しゃがみ込む彼女の後ろ姿だけが見えていた。

そうしてじきに、彼女がふり返る。映った顔つきは、悪戯^{いたずら}っぽい笑みだった。

「私、夏^{なつ}っています」

「ナツ？　それが店での名前か。珍しいな」

およそキャバクラやクラブでは耳にしない源氏名だった。かくいう彼女は、困ったような笑みに表情を変えていく。その仕草が妙に色っぽくて、男のツボでもあった。

第二章 確かな代償（うた）【某バーカウンター2】

「何か、お話でもしましょうか？」

と女は喋ると男の真横、その座席にすわる。肩肘をテーブルに付くと、長髪を耳元までかき上げた。そんな一挙手一投足が、男の情欲を駆り立てていく。

「……………」

そして、女は無言になった。

自分で話を持ちかけておきながら、黙り込むという行為。

聞き手に徹するというのもまた、夜の世界で学んだテクニクなのだろう。

（よくできた女だ^{スケ}）

同時に、計算高い女だとも言える。が、男にとってそれはもうどうでもよかった。この溜まりに溜まった鬱憤を誰かにぶちまけたい。そんな気分だったのだ。それがたかだか遊女なら、なおさらのこと。べっぴんな女を前にして男は、次第に饒舌になっていった。

「わしを見て、何か思わないか？」

「何かとは？」

「わしを見て、周りの人間と同じに見えるのかと、そう聞いている」
その言葉に、女は人差し指をおでこに当てる。考え込んでいるようだ。後、返ってきた答えは、うまくぼかされたものだった。

「どう、なんでしょうね」

「はっ。そこまでの気配りは無用だ。この形^{なり}を見れば誰だって分かるだろう。わしやあ金筋（筋金入りの極道）よ。それもとびつきり悪^{わる}のな」

「とびつきり？」

「ああ。わしはあの、華道会の人間だ」

その一言に、女は驚いたように瞳孔を開かせる。更には両手で唇を覆ったみせた。

絶句している。

「恐いか？」

と、男が低音で言うのに対し、女は視線をテーブルに落とした。小刻みに体を震わしている。少しの間を置いて後、

「ええ」

そう声を震わせる。が、すぐに顔を上げると彼に向け、こう切り返してみせた。

「けれど、そういう危険な香りを嗅ぎつけるのが、夜の蝶じゃありません？」

「……ははっ。いい女だな、お前は」

まさかそんな言い回しを使ってくるとは思わなかったので、男はあっけにとられると共に、唸ってしまう。気丈な女には、何とも言えない清楚さが醸しだされていた。

（まあどうせ、この女に話した所で何が起るでもあるまい）

上機嫌になった男は、ようやく口を滑らせていった。

「わしゃあ今、命を狙われてるんだ。その華道会の親玉にな」

「命を？ これまたどうして？」

「それはこっちが聞きたいくらいよ。一度はわしらの罪を揉み消してくれて、公にもしなかった。あれだけ守ってくれたというのに、匿ってくれたっていうのに……今更になって何で！！」

我慢ならず再度、拳をテーブルに叩きつける。三度ふり上げようとして――

「な!？」

瞬間、腕をひしっと掴まれた。真横にいた女がその前身を使って、その腕に抱きついていたのである。突然の出来事に、開いた口が塞がらない。ただ固まってしまっていた。

第二章 確かな代償（うた）【夜の歓楽街1】

「ご自愛ください」

声と体を震わせながらも、全力で掴みにかかる女。二つのふくらみが惜しげもなく、服ごしに暖かな感触を伝わらせる。

男が疑問に思うことは当然だった。いくら客引きの為とはいえ、そこまでするものかと。もしかしたら本当に心配してくれてるのではと。

そんな妄想に酔った男に、女が耳元で甘く囁く。

「その、わしらって？」

その質問は唐突で、だが舞い上がった男が気にできるほどのものではなかった。

「ん、ああ。東京タワー崩落事件、知ってるか？」

「それは勿論。確か、元暴力団の方が犠牲になったとか」

「ああ。その室井健人っちゅう奴とわしが、あの――」

と口にしたところで、ハツとする。今自分は何を言おうとしてたのかと。

何を言わせられようとしていたのかと。

「おんどれえ（お前）」

男の、女を見る目つきが変わる。

一方、女も笑みを変えていく。

悪女なそれへと。

「ようやく、酔いが冷めましたようですね。ちょっと夜風にでも当たりましょうか」

そう囁くと男の腕をするりと抜け、女は出口への階段に向け歩いていく。男もすぐさま追って、その上り階段に駆けていった。が、まっすぐ進んでるつもりが千鳥足になってしまい、知らず横転する。

「ちくしょうがああ!!」

叫んでみた所で、何が好転するわけでもない。女はもう階段をのぼっている。

（待ってっただ!）

男は焦っていた。嫌な予感が頭をもたげる。

痛めた体を抱え、トンネル型で地上に伸びる階段を一段一段、這いつくばって上がっていく。立って階段をのぼれるだけの力はもう、残っていないかった。それくらいに酒に吞まれた飲兵衛^{のんべえ}。

どこをどうのぼってきたかまで覚えていない。その後、どこをどう歩いてきたのさえ。

気づけば陰湿な空間を抜け、掃き溜めに潰れていた。

ここは夜の歓楽街。

深夜ならではの華やかさが、眠らない街に確かな彩を与えている。路上で人が途絶えるということではなく、往来する人波に呼び込みの男女が声を上げていた。

両脇に並び立つビル群、そこで隙間なく展開される怪しげな店の数々。

その建物らから突き出すようにひしめく看板が、休まらないネオンを映し出していた。

道端にまで溢れかえる、その店々の雰囲気合ったメロディーがこの界限を妖艶にみせている。

かくいう男がいるのは、その中心街を一步外れた路地裏。一張羅のスーツを汚すだけ汚し、ゴミ袋の山に体をうずめていた。

朦朧とする意識では、女を追っていたということくらいしか分からない。

「あらあら。完全に潰れちゃいましたかね」

声がする。さきほどの女の声。すぐ背後からだ。

男は最後の力をふり絞り、翻って女に飛びかかる。が、体は空を切るばかり。

今度は地べたに顔をうずめたのだった。

「くそつたれがあ！」

自分の体だというのに言うことを聞いてくれない。口内からは、鉄の味がした。どうやら唇を切ったらしい。

見上げると、そこには蔑むような瞳の女に見下ろされていた。ただでさえジメジメした陰鬱さがある場所だというのに、そんな視線を浴びせられるものだから堪ったものではない。

「近藤千恵」
こんどうちえ

唐突に、彼女が告げた個人名。

その名に男は、震え上がった。

「お、おうあ！？ おどれ（お前）どうし」

「殺しましたね？ あなた」

冷めた目つきで、女は淡々と事実だけを連ねていく。

「近藤千恵——華道会若頭である近藤の妻」

「おんどれえ……何者や？」

「何故、殺したんです？」

「わしの質問に答えろやゴラァア！！」

「何故、殺したんです？」

「おんどれに答える義理なんてもんはねえ！！」

呂律の回らない唇で、それでも目いっぱい虚勢を張る。それぐらいに男は恐怖していた。何故だかは分からない。伝わるのは女の瞳に宿る苛烈な意思だけ。さきほどのナイトクラブとはまるで違う、嗜虐的な瞳。

（殺^やられる）

漠然と、だが確信をもってそう思えてしまう。なぜなら身に覚えがあるから。たかだか遊女相手に気が動転するのは、味わったことがあるからだった。

この、圧倒される眼差しを。

「義理？ ならありますよ。だってあなた達、私の父……殺したで

しょう？」

「っ！？」

「まだ気づかないんですか？ 私ですよ。あなたとグルだった室井健人——東京タワー崩落事件で犠牲になった元組員が、殺した人物の娘です」

「あ、ああ」

「そう。あなたの華道会トコの親玉、華道花かどうはなの娘なんですよ。私は」

と、女は明かしたところで不気味の笑みをみせる。その様は、まさに悪の真骨頂わるといったところだろう。

対する男は啞然あぜんとしていた。口をぱくぱくさせている。と同時に、どこか納得ずくでもあった。それもそうだと。

何せあの会長の娘だ。あの末恐ろしい瞳にデジャブを覚えたのにも、今では分かる。会長と同じ強さをもった瞳。

「ナツ……夏華なつかお嬢様、ですね？ となると、そういうことでしたか」

「ええ。おそらくは全部、あなたの思ってる通りですよ」

男には思いもよらない出来事だった。しかし、こうなると色々説明がついてしまう。

「にしてもどうやってわしらのことを？ 真実はすべて、闇に葬られたはず」

「この情報化社会。隠しきれることなんてあるはずがない。それにウチには、こういう調べごとにめっぽう強い弟こがいるんでね」

第二章 確かな代償（うた）【夜の歓楽街2】

「わしを、どうするおつもりか？」

「どうする？ 決まってるでしょう——同じですよ」

「同じ」ということは、あの東京タワーで犠牲になった男と同じ末路ということ。

とどのつまり、救われないということだった。

刹那、男の体に異変が起こる。

絶望を、死を突きつけられたからこそくる、どうしようもない怯え。男は噛みあわない歯を幾度となくかち合わせ、唇を震わせている。酔いなんてもう吹き飛んでしまっていた。

ただ怖い。逃げ出したい。

従って次に起こす行動は決まっていた。

「何故、殺したんです？」

夏華がくり返した質問を契機に、男は雄叫びとともに起き上がる。あまりの鬼気迫る勢いのおかげなのか、彼女は悲鳴を上げると尻餅をついた。

それを見返すまでもなく男は瞬時に地を蹴る。光の差す方へ。

（大勢の中に紛れられればまだっ！）

男は生きたかった。とにかくどんなことをしてでも生きたかったのだ。それがどんなに往生際悪く、みつともないものだとしても。

ふらつきながらも必死に、足を引かずらせ雑踏に飛び込む。その拍子に足がつんのめって、前のめりになってバランスを崩した。無関係の歩行者を数人巻きこみながらも、人混みの中心に倒れこむ。

何事かと覗きこむ野次馬や、倒されたことに文句を言う輩もいたが、男の風貌を見るや否や一目散に去っていく。

ここは夜の歓楽街。

相変わらず人通りは絶えず、ちょっとした騒ぎなどは気にも留めない、都会の冷たさが身に沁みる。

だが、男にとってそれはどうでもよかった。重要なのは、人混みに紛れられたこと。

ふり返ってみる。そこでは夏華の姿どころか、数多の顔形が行き交っており、誰が誰を特定することなど不可能のように思えた。

（助、かった………助かった！！）

ボロ雑巾のような格好ながら男は、小さくガッツポーズをする。一時的な危機から逃れられたためか、安堵できていた。ホッとしていた。

そして、少し浮かれていたのだ。だからかもしれない。

流れる音楽が変調をきたしている——そのことに気づけなかったのは。

種々雑多だったはずのメロディーが、同一のイントロを利かせはじめる。それはダーク調で、かつディストーションがよく震わされた、暗くも荘厳な曲調。

響く重厚感は、ともすると地獄の黙示録を思わせる、そんな音律だった。

第二章 確かな代償（うた）【夜の歓楽街3】

? Do you wanna be an earth man?

Or

Do you wanna be a flying man? ?

Aメロに入る前の導入で一度、無音の空間が生まれる。

そこに上書きされる加工が施された機械ボイス。どんなにエフェクトがかけられていたとしても、それが異様だということは明確だった。

それは音痴な歌声——あんまりな女声だった。

「! ?」

? earth man? の所で男は、ありえない重力に打ちひしがれる。

刹那、全身がアスファルトの路面に叩き付けられ、且つ抉^{えぐ}りこまれ、めり込まされた。

「かはっ! ?」

顔中に鼻血のものか鮮血が舞い散り、過度の痛みに四肢の自由が奪われる。

漆黒のアスファルト、その土台がみしみしと、埋まった自分の人型近くで隆起している。

が、それで終わりではない。

? flying man? の所で男は、ありえない浮力を得る。

刹那、全身が夜空に飛びたつ。

「うわあああああああああああああああああああああ!」

絶叫マシンと同じく急に上空に上げられ、落とされる。

違うのは安全の保証など全くなく、この身一つだということ。

？白染まりの僕　ネクタイを絞めるだけ締めたならほら

街へ繰り出すのさ

ブレスケアは忘れずに　髪形までばっちり決めたならほら

街中の女共がほら　そこら中で逃げ回ってるさ

黒染まりの僕　とりあえず近場の人間を殴ったならほら

街へ繰り出すのさ

プライドは忘れずに　ちっぽけな凶器を内に秘めたならほら

街中の女共がほら　ふり返っては引っ叩いていくさ？

Aメロは音量を極限まで上げられたものだった。夜空を舞う男に
さえ聞こえる、不気味な声調。それはまるで眼下に広がる夜景、そ
の綺麗さが男を死に誘っているような錯覚を覚える。

妖艶な女に似た、美しくも残酷な光景。

それが男の脳内を沸騰させ、また狂わせていく。

が、男に休む猶予は与えられない。

？街へ繰り出すのさ？の所で男は、ありえない引力を受ける。

刹那、歓楽街の中でも目立つビル、そのてっぺんに立てかけられ
ているトタン板の看板に頭から突っ込まされた。

反動で肢体が掻き回され、口からは予想だにしない嘔吐物を吐き
だす。

血。

おびただしい量の血反吐だった。

？黒に限りなく近い白　白に限りなく近い黒

グレーゾーンめがけ

置きにいった自分^{たま}は　あっけなく打ち返され？

Bメロが否応なく夜の街に映えていく。

男はたまらず体を強張らせようとするが、それすらもうできない。
体のどの部分がおかしくなってるのかは分からない。と、いうより
どこかおかしくも瓦解していた。

ガラクタになった心身。

そんな人間が考えることといったら決まってる。

切望。渴望。乞い願う。生を乞うてるのだ。

これまでしたことに對する懺悔など、脇に置いて。

(頼む頼む助けてくれ頼むよおおおお!!)

?あっけなく打ち返され?の所で男は、ありえない衝撃をみぞおちに受ける。

刹那、まるでバットに打ち返されたボールの如く、この身は弧を描いて歓楽街にアーチを利かせる。

?灰 愛なマントたなびかせ 飛び立つスーパーマン

誰を救うっていうの?

灰 哀なマントたなびかせ 飛び立つスーパーマン

誰が救えるっていうの?

何せ裸の王様 かれこれな玉虫色ベテランさ 何でも聞いておくれ

なら どんなマントにすりゃいいの? ってスーパーマン

誰色に染まろうっていうの?

んな 格好つかないことするくらいなら スーパーマン

ありったけの十人十色ペンキぶちまけるんだ

誰にも理解されない 自分ピカソになったならほら 街へ繰り出すのさ

そしたらほら 蹲キミって泣いてる僕ぐらい 救えるだろうさ?

Cメロ(サビ)が、男に悪夢を見させる。

?スーパーマン?の所で男は、ありえない魔法にかけられる。

操り人形になる魔法。

刹那、男はまるで、どこかの戦隊もののように体を回転させ宙返りしてみせては、中空で演舞する。そして、最後にはヒーローよろしく、格好いい着地の仕方で行く人々を驚かせた。

そして、その歓楽街の中心で粹なセリフを吐くでもなく、血だらけの男は絶叫した。

?誰が救えるっていうの??の所で男は、最悪の終焉を迎える。

刹那、横殴りの衝撃が男の全身を弾けさせ、転がらせていった。

元の路地裏もくあみへと。

とはいえ、相も変わらず歌は続いている。

どこまでも人を震わせる、身の毛もよだつ楽曲。

結局のところ最初から最後まで贖罪はなく、また与えられることもなかったのであった。

第二章 確かな代償（うた） 【夜の歓楽街4】

「起きてください。聞こえてるはずですよ。意識は失わないよう、
……そう詞に込めてたんですから」

声と共にピシピシと、男は頬を叩かれていた。とはいえ、皮膚から伝わる感覚はない。どこもかしこも腫れ上がったこの身ではもう、痛覚が麻痺していた。

「あ、うあ」

男は、何かにうなされたかのような呻^{うめ}きを上げる。徹底的に打ちのめされたのに、意識はあるという不条理。声だけは上げれるという生殺し状態は、まさに異能ならではの悪夢だった。

「助けてくれえ……助けてくれよお」

「もうろくするのは後にしてください。さあ、私の質問にお答えを。何故、殺したんです？」

「違う……違うんだ。俺じゃない。殺したのは俺でも、俺じゃないんだお」

「？ どういうことですか？」

「歌が……歌が聞こえたんだ。で、気づいたらあのご夫人を首を絞め――」

喋ってる最中のその口から血飛沫を上げ、悶絶する男。全身を痙攣させつつ、陰湿な路面をのたうつ。

この満身創痍ではもう、少しの長話も許されなかった。

（熱い。痛い。痛い。寒い）

もはや男に理性は残されてない。ただ本性に任せるままに伝う五感に苛まれていた。

「やはり言うことは東京タワーのあの元組員^{ひと}と同じ、ですか。ここまで重なると、単に命乞いによる妄言と切って捨てる訳にもいかなくなりますね。となると事件の黒幕は、そういうことになるんでしょうね。とても信じられた話ではないですが」

確信めいた眩きとともに、どこか納得ずくの夏華。一方、男にあってはそんなのどうでもよかった。ただ生きたい。殺されたくない。男の頭を占めてるのは、生への執着だけだった。

他方、夏華は携帯を取り出し、誰かに電話をかけている。少しした後、受話口から耳を離す彼女。

刹那、再び歓楽街に、あのダーク調のメロディーが響き渡ったのだった。

「ひぎいっ!？」

まだ何もされてないというのに、された後のような奇声を上げる男。経験からくる条件反射のようなものだった。

「そういう反応^{トコ}もともすると、あの元組員と似てるやもしれませんね」

と嗤^{わら}うと夏華は、ループしたメロディーに合わせ歌おうとする。が、その中途を遮ったのは、他ならぬ男その人だった。

足元に縋^{すが}りつき泣き言からの懇願を、往生際の悪さをさらし続ける。オールバックにしていたリーゼントはくしゃくしゃに乱れ、外見からくる威圧感^{かけら}は欠片もなかった。

「お願いだ。助け」

「知ってます? あなた達が犯した罪^{こと}のせいで、苦しんでる人達がいることを。ある兄^{ひと}は、恋しくてならない人と別れ、それでも別の女性にその人の面影を求めています。ある弟^{ひと}の反抗期が酷かったのも今思えば、お母さんをあんな形で亡くしたんですものね。荒れて当然です。でですね、知ってます? ——ある姉^{ひと}はあの事件以来ずっと、今この時も泣き腫らしてるんですよ」

男の言葉を一蹴する夏華。その語感に込められたニュアンスは殊のほか冷淡で、また内に秘められた激情が吐露されたかのような、そんな重みを感じられた。

えもいわれぬ迫力に返す言葉を失う男。口ごたえなど許さない、

そのくらいに苛烈な眼差し。一介の極道を事もなげに怯ませるさまは、華道会を一手に背負うあの会長に瓜二つうりふただった。

「教えてください。これって、許せますかね？」

問いかける夏華に、ただ震えるだけの男。

分かっていた。

これは質問ではない。こちらに答えを求めてるでもない。初めから何もかも決まっていたのだ。

結論ありきの反語。

男は、自分に降りかかるであろう災厄を悲観するしかできなかった。

故に発狂する。

訳もなく。一抹の生をこの世界に主張するかのように。

「ごめんなさい。私、家族を傷つける人間だけは……どうしても許せそうにないです」

その言葉が、男に対する最後の手向けだった。

夏華は音楽に合わせ、歌をうたおうとする。そして、次の瞬間だった。

——響いたのは歌声ではなく、くぐもった声ばかりに終わったのだった。

何故だかなんて男には分からない。というより、極度の興奮と緊張で頭は真っ白になり、まともな視野すら得られてなかった。

そんな自虐の結果、落ちゆく意識。

定かでない視界の中、男が最後に捉えた二つの面影。

それは小柄な女性のものともう一つ、大柄な男性のものなのであった。

第二章 確かな代償（うた） 【夜の歓楽街5】 （前書き）

視点が、男からある人物へと変わっています。

第二章 確かな代償（うた）【夜の歓楽街5】

「んぐむうつ!？」

夏華の歌おうとする声は、くぐもった声を上げるに留まった。それもそのはず。

紅のルージュに濡れた唇は、男のごつい掌に覆われていたのだ。と同時に、右手を絡め取られ後ろ手に回され、固定される。

夏華は何者かの手によってあっさり拘束されたのだった。

鍛錬された身のこなしに、抗えようのない腕力。

もがこうとしても非力な自らでは、どうやら太刀打ちできそうになかった。

仕方なく夏華は無為無策でじっとしていると、ようやく相手方の男が言葉を発する。その声質は馴染みの、予想通りの男声だった。

「何てことを……もうこれでは取り返しがつかない」

その声色は華道会若頭、近藤その人のものだった。その目は、口から泡を吹き動かなくなった男に向けられている。

そして、異変は不意に起こった。

さっきまで流れていた同一のメロディーが、雑多なメロディーに戻って夜の歓楽街を賑わせていく。おそらくは華道会むしこうの力が働いたのだろう。

「さっきの曲で歌の異能を揮ったんですね？ 何という惨いさいことを」

と、近藤が嘆きつつも夏華の口を塞いでいた左手を離す。後ろ手に固定した右手だけは外すことなく。

「いいんですか？ 私の口を押さえていないで。これで、いつでもあなたを殺やれるんですよ？」

「強がりはおやめください」

「強がり？ 何を」

「こんなに――震えてるじゃありませんか」

「!？」

言われたとおり夏華は激しく震えていた。気づかれない程度に小刻みと、だがこの間中ずっと震えていた。酔った男には分からなくても、愚直な近藤には分かっってしまうだけの怯え。

どれだけ自分が無理をしてるかは明らかだった。

それでもやらなければならない。やらなければいけないのだ。

夏華の頭を占めてるのは、家族みんなが真に笑い合える、そんな憧憬。

この体は言うことを聞かなくてもこの心には、一切のブレがなかったのだった。

「身の程をわきまえないからこんなことになるんです。あなたはまだ高校生の身分なんですよ？　そして、異能の力は二〇歳までは使うことを許されない。掟というものはえてして、そう戒められるだけの理由があるんです。なぜなら多くの先人らによる知恵の積み重ねが、掟として後世に伝わっていくのですから。その訓戒を無視してまで何かを成し遂げた所で、報われることなど何一つとしてありません。理解できておいでか？　あなたはもうすでに取り返しのつかない所までできていることを」

「近藤。御託は無用です。それより早く呼んでくださいよ。あの母を。いないとは言わせませんよ。きちんとここまで足を運んでくださるよう、そう呼び立てしたのですから」

「お呼び立て」――それは、あの白道会はくどうかいの丸ビル『ツインビル 世羅』でのひと悶着にあった。夏華はわざと東京タワー崩落事件という奇天烈、且つ大袈裟な演出をみせることで、自分が事の真犯人であることを母に知らせた。たまたま母がその真相に気づいたのがあの丸ビルだったというだけで、たとえばあそこでも母はこの事件の実態を究明できたであろう。そのくらいに華道花という人間は聡明で、また狡猾なのだ。

他に一線を画すほどの老獪さに加え、誰もが平伏すだけの威厳。それが東日本一の規模を誇る暴力団組織、華道会の長というものである。

第二章 確かな代償（うた）【夜の歓楽街6】

「あなたのような頭でっかちではココまで辿り着けようはずがない。いるんでしょう？ 母が。早く出してください。私はあの人に用があるんです」

見かけ倒しだとしても毅然と、夏華は唇を震わせていく。それに合わせるようにまた、相対する近藤の目の色が変わっていった。

極道のそれへと。

「あなたは本当に何も分かってないようですね。あなたは踏み越えてしまったんですよ？ 踏み越えてはならない一線を。裏側の世界へと。はっきりさせてあげましょう。私はね——」

それは唐突だった。

いきなり夏華は、近藤の腕力により前のめりに屈まされて後、顔を路面に擦りつけられた。乾いたアスファルトの表面に頬が擦れていくつかの擦り傷を生む。

「きゃあっ!？」

驚きを隠せない夏華に追い討ちをかけるように、近藤は懷から何かを取り出すと引き抜く。そして首筋におったてたのだった。

それは短刀。^{ドス}

「……………」

あまりの出来事に夏華はどう反応するかを通り越して、安心してしまっていた。

あの温厚な近藤が今現在、刀の切っ先を自らの首筋に当ててるといふ事実。それに対して何を言葉にしているいかも分からないし、何より言葉にできなかった。

何より近藤が夏華に与えるプレッシャーには、並々ならぬものがあったのだ。

「――あなたを殺すことだってできる」

と、彼はドスの利いた声で脅す。重低音なその声は殊こういった場面で恐ろしいほどの効果をもっていた。

片や夏華は何も言い返せなくなっている。突きつけられた冷遇に、返す言葉など考えられなかった。事前に脳内シミュレーションであったはずの理論立てはあっけなく崩れ去り、後に残るのは自分の未熟さばかり。

だからなのかもしれない。この身が危険に陥った場合、どうなるかまで想定が及ばなかったのは。

それもまた唐突だった。

声が聞こえる。幼い咆哮。

大好きな義弟（きでい）による精いっぱい（こころをこめて）の虚勢だった。

「うわああああああ!!」

オタクな彼が見せる、ひ弱なもやしっ子が見せる全力のタックル。それが近藤の背中をしたたかに打つが、全くもってビクともしない。逆に義弟の方が反動で、弾かれるように転んでいった。

「千己（ちぢ）!? アンタ何――んなことより早く逃げなさい! アンタじゃどうしたって」

「離せ!! 夏を離せよ!! 離せて!!」

夏華の制止を振りきって義弟は、近藤の首に飛びかかる。そのまま暴れ回るが、うんともすんともならなかった。

騒ぐ二人にため息をつく近藤。

そして次にみせた挙動は夏華にとり、目を疑うものだった。

近藤が実の息子の、顔面を殴る。

殴られた千己は鮮血とともに、えび反りになって後方の壁にぶち当たる。散見される飛び散った歯のいくらかが、その無遠慮さを夏華に伝えた。

「っ!? 千己!!」

近藤の手が義弟に回ったことで、拘束から解かれた夏華。ありったけの憎悪を彼に向けると、立ち上がろうとして、

「え？」

立ち上がれずへたれ込んだ。それもそのはず。

気づけば夏華は、起き上がれないほどに腰を抜かしていたのだった。

第二章 確かな代償（うた）【夜の歓楽街7】

「――ははっ。可愛い稚児ややこよな。夏は」

声がする。いつも耳にする声色でありながら、いつもとは全く違う含蓄をもったそれ。

その音源に向け夏華は振り返る。

するとそこには案の定、あの人が佇んでいた。

数十の同胞を背後に引き連れ、悠然と。小脇にはあのノートパソコンを抱えている。

それは夏華が家を出る際、義弟が抱えていたはずのものだった。

「……母、さん」

「今や歓楽街はちよつとした騒ぎになっておるよ。にしてもまさか、この街中の音楽を軒並みハック（改変）するとはの。およそ大人では思いもつかない所業よ。どうやってやったかは知らぬが、パソコンれの力なんだろうよ。いやあ、そっちを收拾させるのに大分時間をとられてしまったわいな。まあ、それも夏の計算の内やもしれんがな。つくづく私の娘やなと思ひ知らされるわ。底の知れぬ子よ。可愛い可愛い稚児」

と、母は褒めながらに夏華のところまでやって来る。そして、うつ伏せに俯く娘の長髪を慈しむように梳いていく。

そして、次の瞬間だった。

母は娘の長髪をわし掴むと、無理矢理に引っ張り上げたのだった。

「っ!？」

痛みに顔を歪ませる夏華を冷笑で迎え入れる母。その顔つきに親の面影は微塵も感じられなかった。

顔を上げられた状態そのままに、母は自身の頭を夏華のそれにぶつける。

当たったなんて柔いものではなく、強烈なる頭突き。

脳天にぐらんと鈍痛が響くが、そんなもの夏華にとっては些事だった。

頭がうまく回らない。

信じられない出来事の連続で、ショックのあまり何もかもが絵空事のようにしか見えなかった。

自分の息子を「千己坊^{ちこぼぼう}」と呼び、溺愛していたはずの父がその子を殴り飛ばすという現実。

自分の娘を「夏」と呼び、愛してくれてたはずの母がその子に頭突きを見舞うという現実。

とても鵜呑みにはできない数々に、夏華は正常な判断ができなくなっていた。

そんな、呆然としてる娘に母は告げる。

これ以上ない一言を。

「舐めんじゃねえぞわれえ」

それは夏華の目を覚まさせるには十分すぎる、衝撃的な一幕だった。

「母、さん。どうして」

「近藤」

娘の弱音を無視して母は近藤を呼ぶ。その彼はというと、倒れた千己を引きずって起き上がらせると、そのこめかみに目を疑うものを突きつけた。

チャカ
銃だ。

カチリと、撃鉄が起こされる。

「千己!!」

まるで豹変したかのように叫びながら、一心不乱に近藤に掴みかかろうとする夏華。ブチブチと髪の毛がいくらか抜ける嫌な音がしたが、構いもしない。

「こおら夏。自分の置かれた状況をよく見てから動け。例えばお前が近藤のところまで辿り着けたとして、まかり間違って千己を助けられたとしてだ……たかだか子供^{ガキ}二人にそこから何ができると？」
そこまで言われてハッとした。辺りを見渡してみる。

二対の建物に挟まれるようにしてできた路地裏、その両出口に所狭しと並び立つ男ら。数にして数十。強面だが精悍ある様は、一高校生などが抗えられるような雰囲気ではない。

こちらの与り知らぬうちに出来上がった包囲網は隙がなく、いつのまにやら夏華達は袋小路へと追いやられていたのだった。

第二章 確かな代償（うた）【夜の歓楽街8】

「それにこの暗がりで面^{つら}までは拝めないが、千己^{ちご}は気絶してるだろうよ。実の父に銃口突きつけられても、ピクリともしないからね。にしても何だ、夏。随分と背伸びしたものよな。まあ、お前がそこまでする理由は分からなくもない。が、にしたって身の丈に合わないのだよ。お前が踏み込んでどうにかなる問題ではない」

と決めつける母の言い方に夏華は反論したかった。が、結果的には押し黙る。そうせざるをえないのだ。

その胸中にあるのは、義弟の心配ばかりであった。

「お前の計画は差し詰めこんなところだろう。まずは大仰な事件を起こすことで、私にだけ事の真相が分かるよう仕組んだ。また、いわく付きの男を手にかけることでココにおびき出す為の伏線も張ったと。同時に、私にだけ自分が何を目的に動いてるかも知らせ、で、ここでのサシの話し合いを求めていた。いや、それこそ事の真相を暴きたかったのかもしれない。私が本当に、あの二人を殺した黒幕なのかどうかを」

齒に衣着せぬ物言いに夏華は顔をしかめる。

夏華の狙いはまさに、母が言った通りのものだったのだ。

夏華達の父は、東京タワー崩落事件の犠牲になった白道会の元組員——室井健人によって殺された。その加害者である彼がいまわの際、口をついて出たのが「歌が聞こえて、気づいたら殺^やってしまっていた」との言い訳。

また、千己達の母——近藤千恵は、すぐそこで泡を吹き倒れてる華道会の組員によって殺された。その加害者である彼もまたいまわの際に、口をついて出たのは同じような言い訳。

これらのことを鑑みるにつけ、結論は一つである。

殺された二人は、異能たる歌の力に巻き込まれたのだ。

そしてそれを行使できるのは、この世に三人だけ。夏華とその兄、

後はその母ばかりなのだ。

無論、兄が歌を人殺しの道具に利用するはずがない。かくいう夏華も身に覚えのない話だった。と、なると残された可能性は一つ。「だが、残念なのはその詰めの甘さだな。私は夏がどういう人間なのかよく知っておる。お前は潔癖症で、且つ完璧主義な子よ。それは裏返せば、一度構築された理論は絶対と疑わない愚かさにつながる。お前は普段の私から、娘に甘い母親像を思い描いていたのだろうよ。近藤についても同じく、優男だと踏んでたんだろう。だからこうなることは思いもよらなかった。考えもしなかったゆえに、ショックは計り知れないだろうよ。でな、それが……私の狙いでもある」

「っ!？」

「いいか、夏。私はお前がショックで腰を抜かすことを確信しながらに、もしもの場合に備え脇もこの通り固めてきた。千己の心配性を読み、無謀にも近藤に飛びかかるのを見越しながらに、もしもの場合に備えパソコンのIPアドレスも辿らせていた。私が何を言いたいかわかるか？ 夏。分からないなら教えてやろうさ」

「母さ」

「バカか、お前は」

「!？」

その痛烈な口ぶりは、住む世界の違いを見せつけるには十分すぎるものだった。

「お前はな、してはならない一步を踏みだしここまで来たんだ。ここはな、家族の血縁よりも兄弟の盃ひやかず、その益が最優先される。つまりな、私らの目障りになるようなものは誰であれ、死ぬ覚悟をする必要があるのだよ。お前にその覚悟はあるのか？ 例えば私を追い詰め、真相を吐かせたとしてその後は？ 私を裁く、殺すだけの覚悟はあるのかと聞いている」

「それは……」

脳裏を過ぎるのは自分が掲げた、「勸善懲惡」の四文字。その意

味からいえば、母は罰せられるべき存在なのかもしれない。ただどうしても心の奥底では、母が殺人者であってほしくないとの淡い願望を抱いてしまっていた。可能性がなくとも縋ってしまうのだ。どうしたって自分の肉親に変わりないのだから。

そんな、都合のいい滑稽さに終止符を打つかのように母は告げる。これ以上ない事実を。

「あの二人ならな、間違いない——私が殺したさ」

第二章 確かな代償（うた）【夜の歓楽街9】

瞬間、夏華の脳内は目まぐるしく沸騰した。母が大好きな人達の肉親を殺めたという事実。母が実の父を殺したという不条理。声を上げようにも内に渦巻く激情に、胸を詰まらせるばかりだった。

言葉にならない。言葉にしようがない。その苦しい胸の内を抑えるかのように、胸元のドレス生地を掴むと目いっぱい叫んだ。意味をなさない罵声を。

「どうしてっ!!」

「おお。腰を抜かすほど怖いだろうに、よくそれだけの大声が出せたものよ。中々に夏の逆鱗に触れてしまったようよな。にしても、今さら理由を聞いてどうする？ 何もかももう終しまいのこと」

「どうしてっ!!」

夏華の悲痛の叫びはなおも収まらない。三度、四度、五度六度と静寂の中、声を嗔からしていく。本当は理由なんてどうでもよかった。分かってしまったから。誰も彼も救えないことを。救いようのないことを。

兄と義姉は、決して結ばれることのないことを。

だから叫ぶ。ただただこの悲劇を嘆く。兄の母が義姉の母を殺したという、当事者同士ではどうにもならない、この悲恋の末路を。とはいえ、すぐさまその稚拙ちせつさはいなされる。母による再度の虐ず使つきによって。

腫れ上がったおでこに打ちひしがれたボロボロの心。その心身に追い込みをかける母は母であって、とても母には思えなかった。

「どうして殺したかって？ 決まってるじゃないか。愛してたからさ」

「……………え？」

「夫とは、仮にも好き合った仲よ。好きで殺すなんて、あるはずがなからう？　もう一人の千己アバズレとあの千世羅の母も、私の一番の理解者であり唯一無二の親友だったさ」

そう喋る母の瞳は心なしか、どこか遠くを見つめてるようだった。
「母、さん？」

「身に余る力を揮えば、必ずその代償を支払うことになる。因果応報、何だってそうよ。この歌という異能の場合、その代償が愛すべき人だったというだけのこと。つまりは私も未熟だったということよな——夏と同じく」

「一体、何を」

「まだピンと来てないのか？　私とて好きで二人を殺したわけではないと、そう言っている。まあ簡潔にいけば、未熟な人間が歌の異能を揮えば、その代償として最愛の人を殺すことになるということよ」

次第に話が噛み砕かれていくにつれ、夏華の頭まで上っていた血がサーッと引いていく。真冬だというのに首筋から、汗の雫が伝うのを感じた。その冷汗を実感できたことで我に返る自ら。

背筋が、そして血が凍る思いだった。

「ところで、未熟にも一七という幼さで歌の異能を揮った我が娘こよ。私からお前に、聞きたいことがある」

「嘘」

「お前にとって最愛の人とは、誰に当たる？」

「嘘」

「私か？　残念ながらそれは違うだろうな」

「嘘よ」

「その千己ちうぎか？　いやそれも違うだろうな」

「嘘！！」

金切り声を上げ両耳を手で塞ぐ夏華。その取り乱した様にも、母は涼しい顔色を変えない。そのまま唇を娘の耳元まで近づけると、こともなげに囁いた。悪魔めいた死の宣告を。

それは問いかけではなく、非情な念押しであつた。

「加藤^{かとう}、冬^{とうや}治^ぢだな？」

と挑むような母の瞳に、夏華はこの日初めてにして一番の睨みを返す。そこに宿る憤怒は自分の中にある何かの箍^{たが}が外れたかのよう
な、抑えようのない激情の表れだった。

第二章 確かな代償（うた）【夜の歓楽街10】

「まるで親の敵でも見るかのような目つきよな。母としては何とも言えん、複雑な気持ちよ。というか、誤解してるようだが私が冬冶を殺すわけではない。冬冶が殺されるのはあくまで、未熟者が異能^{ちから}を揮ってしまったが為の代償、その結果としてだ。つまりな、冬冶殺すのは――夏、お前よ」

「ありえない」

すぐさま否定から入り、夏華は母と真っ向から対立する。一方その母はというと、変わらずの能面で淡々と言葉を返していった。

「ありえない？ 人生経験十数年の甘ちゃん^{あま}が何をもってそう断定できる？ この世なんてもんはの、およそ信じがたいことばかりが起こる、そんな世よ」

「ありえない」

「さっきっから言うことといったら、同じことの繰り返しよな。まあ、回らない頭ではそれが限界といったところか。とにもかくにも今のお前は、我らの害であって益でもある。何せあの目障りな冬冶^{おとし}を消してくれるのだからな。願ったり叶ったりよ」

辛辣な言い回しで、息子の死を歓迎する母。とても理解できない発言の数々に、夏華の思考はそこでストップしてしまっていた。すると、

「安心しいな。役に立つ内は殺しはせん。近藤」

母はおもむろに近藤の名を呼ぶ。と同時に、彼は自分の息子に突きつけていた銃を降ろしたのだった。「お前の車で、その二人を家まで送ってやれ。お帰りだ」

その一言を最後に、母は掴んでいた娘の長髪を離すと背を向ける。そのままネオン煌く夜の喧騒へと、一步を踏みだしていったのだ。た。お付きの黒ずくめな男らもその歩調に合わせ雑踏に紛れると、やがて見えなくなっていく。

唇を震わせ、ただ固まってるだけの夏華には何もできなかった。
そんな臆病者に近藤が告げるのは、指示された通りの二言三言。
そこに父親としての情、人としての情けは微塵も感じられなかった。

「近くの駐車場に車を停めております。行きましょう」

第二章 確かな代償（うた）【帰宅】

夏華が乗せられた車は、あの下校時に見た馴染みのベンツだった。ぐったりした千己は前の座席、その運転席でハンドルを切る近藤のすぐそばに横たえられている。夜の帳が下りた景色は覗いたところで定かではないが、夏華の俯いた視線は自分の足元、そのハイヒールの赤に注がれていた。流動する夜景など気にも留めず、かといって何を考えるでもなく下を向きつづける。

そうこうしてる内に、タイヤの擦れるようなブレーキ音と共に車は停められた。

乗ってからこれまで、どのくらいの時間が流れたのだろうか。そう思ってしまうくらいに麻痺した体感。この身では普通の人ができることでさえ、億劫になってしまっていた。

「着きましたよ。降りてください」

と、振り向きざまに近藤が言う。一方、夏華はというとフラフラと、扉を開けると外に出たのだった。そこはもう、あの家からは目と鼻の先。

少しすると近藤が、千己を抱えながらも外に出てくる。そして、お姫様抱っこに体勢を変えると夏華の元までやって来た。その後、ゆっくりした動きで小さな体躯を預けてくる。合わせるようにして義弟を抱く形になった夏華。

「それでは」

こうして近藤は別れを告げると車に乗り込み、それを走らせていく。結果、閑散した通りに残された二人。

静かな家並みを縫うように夜風が一阵、二人の肌を撫でていった。それから、どれだけの時間が経ったのかは分からない。

次に夏華が気づいた時にはもう、暗闇は白みがかかり、朝日が顔を出し始めていたのだった。

ただ何もせず、また何もできない。早朝の冷えこみは激しく、息

づかいをする唇からは絶えず白い吐息が舞い上がっていた。

だからだったのかもしれない。

一人でいることの救いようななさを、家族がいてくれることの幸せを噛み締められたのは。

「ん……んう」

声が聞こえる。声変わりをしてもなお、幼い男声。義弟によるものだった。

「千己!？」

一気に目を覚ました夏華が、意識が戻ったであろう義弟の体を揺さぶっていく。そうしていると、ぐったりしてた彼の瞳に少しずつ生氣が戻っていく。まぶたが開かれるとようやく、その眼差しが夏華へと注がれたのだった。

「良かった。夏……無事で」

それが服を擦りきれさせ、前歯が数本欠けた義弟が発する第一声だった。口内は血で真っ赤に染まり、泣きそうなくらいに痛いはずなのに――夏華の身を心配している。

「っ」

夏華はそんな義弟を強く抱いだいた。涙ぐみ、かといって彼の前では弱さは見せまいと顔を伏せると、涙をこらえる。こらえられそうになかった。

「ごめんね。本当に、ごめんなさい」

震えながらも彼の温あたたかみを肌で確かめる夏華。申し訳なさが込み上げるばかりだった。守ってあげられないどころか、自分のせいで傷つけてしまった。

悔やんでも悔やみきれようはずもない。けれども、ならばどうすれば良かったのかと思わずにいれなかった。

何がいけなかったかも、これからどうすればいいのかも夏華には分からない。ただ今は、ここにある温もりに安堵していた。義弟が生きている、それだけでもう十分だった。

感極まるあまり夏華が咽返むせかえっていると、そんな光景を見かねてか

義弟も弱々しいながら抱き返す。加えて、背中まで回らない華奢な手のひらで、あやすようにトントンと叩いた。

「何か今日は疲れたよ。家に帰ろう」

そのくたびれた声に応えるように、夏華は大きくうなずく。何はともあれ、義弟の怪我を診てもらうのが先だ。

夏華は体を痛めてる彼を労わり肩を貸すと、起き上がらせる。家は実はもう真横にあつてすぐそばのブロック塀、その角を曲がれば入口に到着できる。あまり無理をさせないよう、そつと義弟を先導していった。

ややもして角を曲がって見えた入口。そこには、

「――!？」

そこには、あろうことか誰かが立っていたのだ。

ギラギラと。

照り返す逆光に夏華の視界は遮られる。そんな日の光をバックに佇む人影。ゆっくりこちらを振り向いていく。

その人は、光沢あるシルク素材のパジャマを着こなしていた。その上にはこじやれたカーディガンを羽織り、その下にはサンダルを履いたままの状態で。

真冬にしてはあまりな軽装ぶり。ただその服装からいって、誰であるかははっきりしていた。なので夏華は頭が真っ白になる。

これでもう、何もかもが万事休すなのだ。

「おかえり」

そう言つて迎え入れる、義姉。

送られる眼差しは、いつものそれとは全くと言っていいほど違っていたのだった。

第二章 確かな代償（うた）【翌朝の騒動1】

夏華の朝は、いつもと少し変わっていた。

目覚ましのアラーム——その着メロが、頭に響いてくる。

すかさず一音で止めるとはいかず、サビが終わってもなお夏華の眠気は続いていた。

起きたくない。とにかく寝ていたい。

そうこうしていると、携帯から鳴り響く音が聞こえなくなっていた。一時だが、部屋に待望の静けさがやってくる。とはいえ、夏華という人間は潔癖症な性分。もし起きれなかったらということも想定した上での準備には、事欠かなかった。

ジリリ！！ と、今度は置時計から耳をつんざく目覚まし音が部屋中をにぎわす。最後の砦用買ったそれは、凄まじい音量ボリュームだった。たまらず夏華は眠気眼で音の鳴る方へ、手を伸ばしまさぐつていく。だが完璧主義の自らが、手の届く範囲にそれを設置セッしてるはずもなかった。

それは夏華の部屋、そのドア付近に置かれていた。なので一度はベッドから抜け出さなければならぬ、そう計算された距離である。まだ目の覚めないうちに、夏華は寢床から這い出すとカーペットの床を四つんばいで進みゆく。そうすることでやっと、けたたましい音を止めることができたのだった。

起きぬけの冴えない頭で、寝癖でくしゃくしゃになった長髪を一撫でする。とりあえずは床に膝つき、背伸びしつつあくびもする夏華。

「ふわあああ」

思わず出てしまうヘタレ声は相変わらずだった。それでも、いまいち緊張感なくいられるのは義姉という存在、その後ろ盾の大きさからくるのかもしれない。

何を隠そう、義姉はこちら側の肩を持ってくれたのだ。

てっきり兄と同じく、歌の異能を暴力として扱うことに否定的な立場の人間だと思っていた。とはいえ起こした事が事だ。それだけに、多少のことは目を瞑ってくれたのだろう。頭でっちな兄ではこうはいかない。

だからこそ義姉は最後にああ言ったのだ。

思い返されるのは、彼女との約束事。

『冬冶しまだけには知られたら終しまいよ』

その言葉が、義姉がこちら側に付いてくれたんだと教えてくれた。同時に、その一言から義姉は全ての顛末を把握したんだと確認できる。何も言わなくても義姉という人間は、一を知って一〇以上を知れる、そんな家族一の切れ者なのだ。

ゆえに夏華達がいけないことにいち早く気づき、極寒の屋外で待っていたのだろう。自分のことで手一杯のはずなのに、着の身着のまま胸騒ぎのままに。

とどのつまり、夏華は義姉に対し頭が下がる思いだった。あの後、義弟の応急処置から何から何まで彼女がやってくれたのだ。勿論、手伝おうとしたのだが「いいからアンタは早く寝なさい！」とのお咎めを受け、門前払いされる始末。ただ彼女に任せた方がうまくいくだろうから、その時は頼りがいある家族に甘えることにしたのだった。

義姉というこれ以上ない味方ができたこと。それがどれだけ夏華の心を救ったかは、言葉に言い表せないほどである。こんな中でもぐっすり眠れたのは、そういう心強さを得られたからであろう。

とはいえ、

「……………」

一段落したことで考えさせられるのは、やはり昨夜の出来事。その際に最も心を痛めた、あの母の発言だった。

『冬冶殺すのは――夏、お前よ』

ふり返るや否や、首をブンブンと横に振る夏華。ありえない。落ち着きを取り戻した今に至ってもなお、その心に変わりはなかった。（どうして母さんはあんなデタラメを？ 私が兄さんを殺すために歌うなんて、起きるはずもないのに）

むしろ夏華は、母の言ったことを額面どおりには受け取ってなかった。

何か裏があるのではないか？ こちらの心理を揺さぶることに狙いがあったのではないか？ いや、それ以前に理由などなく、単に脅しのため口をついて出た戯言ではないのか？

こう頭を巡らしてみるのが、どれもこれもしっくりこない。

結局の所、不気味な面持ちのまま問題を棚上げせざるをえなかったのだった。

第二章 確かな代償（うた）【翌朝の騒動2】

「……………よし！」

とにかくにも、夏華は気持ちを切り換えた。暗い顔ばかりしていても何も始まらないのだ。どんな紆余曲折はあれど、それを兄に知られては本末転倒。なので今では習慣になってる自己暗示をかける。別人になるよう言い聞かすのだ。犯した罪に悩む女ではなく、明るい一家族の妹として。

夏華は日ごろの手順ルーティンよろしく、いつものように起き上がるとベッドを這い出し、窓側に向かった。

後、カーテンを掴むと横に押し広げようとしたのだが、
「くさっ!？」

不意に嗅がされた異臭に、出鼻をくじかれる。たまらず夏華は後ずさった。

あんまりな刺激に、カーテンの布地を警戒するように距離を置く自ら。無論、初めてのことだった。が、冷静に考えてみるとこのカーテンが臭いにおを放ってるとは到底認められない。何せ夏華は潔癖症なのだ。清潔を心がける中であって、こんな身の毛もよだつような悪臭をほっばっとく訳がない。加えて窓はきちんと閉めたはずだし留め金もしてある。と、なると諸悪の根源は窓を隔てた先にあるということ。

夏華は恐る恐る窓際まで近づくと、カーテンの裾をつかんだ。その一つまみのままに押し広げ、外を覗いてみる。

そこには、逆さに吊るされた義弟のミイラ顔ががドアップで映し出されたのだった。

「きゃああ!！」

断末魔の悲鳴を上げ、逃げまどう夏華。尻餅をついてしまってい

た。

すると、詰まった笑い声が聞こえてくる。音源は包帯でぐるぐる巻きになった^{みのむし}蓑虫から。

それは、義弟の高笑いだった。

「くははっ。これだよこれ！俺がずっとしたかったのはこういうことなのだよ、夏！アイドルへの早朝ドッキリ然り、朝というのはイベントフラグ全開フルスロットルなのだよ、夏！更には義兄弟という設定に同居という決まりごとがありながら、それを生かしかれてないという鬱憤今ここに極まりなのだよ、夏！さあ、夏！後は君次第だ。何も言わなくとも分かっているだろう？そう、君の思ってる通りさ。むろん加減はいらない。一息に目をキラんと輝かせやってくれたまえ……さあ、この俺をぶっ飛ばして空の彼方へ！！」

昨夜はあんなことがあったというのに、この通りけろりとしている義弟。

本来であれば実の父に殴られた翌朝である。彼の泣きっ面があっても決しておかしくはないのだが、本人はご覧の通り元気にふるまっていた。

（無理しちゃってまあ）

義弟が本当は気の弱い、心配性な人間であるということを夏華は知っている。けれどもそれを表に出さないのはきつと男の意地、誇^{プライド}りというものが関係してるのだろう。夏華にはとても理解できたものではないが、傷つけてはいけないものだということは経験上分かっている。

従ってそんな彼に夏華が言えることといったら、あたり障りない朝の挨拶くらいだった。

「あーチコチコ。おはよう」

「あー、おはよう……じゃねええ！！違うだろ！？それ何か違うだろ！？もっとこう、ここでは問答無用のアクションシーンが求められてる訳だよオーケー？」

「だってアンタ、怪我してるじゃない」

「それは殴ってから気づくものなの!!」

「はい？ 何を怒られてるかよく分からないんだけど。てか、それ以前に窓閉めきったままだし」

「そこは窓かち割って許されるところだろうが!!」

歯が抜けて、口内はぼろぼろのくせして大声を出すものだから、喋るたびに悶絶する義弟。糞虫がことあるごとにプルプル震えるさまは、いい笑い者だった。

「にしたってアンタ、そこで何してるのよ？」

そう言いながら窓越しに、義弟の姿を見返してみる。彼は包帯で全身をぐるぐる巻きにされており、逆さ向きに吊るされていた。その足先からは、複数の包帯の束が屋上に伸びている。とても一人ではできない作業工程だった。

「というかこれ、姉さんがやったの？」

「うん。何か兄さん対策だって」

「兄さん対策？」

その言葉に三度、義弟の姿を見返してみる。彼は目と鼻以外は包帯でぐるぐる巻きに隠されており、外見からではおおよそ傷を負っているとは分かりそうになかった。

（なるほど。包帯で傷口を隠したんだ……いや、正確にはチコチコに触れさせないようにしたってとこかな）

それが夏華の部屋、その窓際に義弟を吊るした理由なのかもしれない。

まずもって兄が彼のあられもない姿を見ようものなら、真っ先に駆けつけて介抱するに決まってる。が、それでは誰かに殴られたことに気づかれてしまう。そこで義姉は夏華の部屋に目をつけたのだ。ここなら、たとえ彼の包帯姿を見てもすぐには駆けつけられない。そこに辿り着くためには、就寝中の夏華の部屋を跨がなければならぬからだ。家族思いの兄が、妹の安眠を邪魔する行為に打って出れるはずもない。

兄の性格を熟知してるからこそできるその仕掛けは、まさに隙がなかった。

第二章 確かな代償（うた）【翌朝の騒動3】

「ん？ けどそれって、もう兄さんにチコチコの姿は見られてるってことになるんじゃない？」

「うん。ついさっきね、ゴミ出ししてる兄さんに見られたばかり」「あらそう。それはそれは————何ですってええ！？」

会話の途中、思いもしなかった出来事におったまげる夏華。兄が義弟かぞくのこんな姿を目の当たりにしようものなら、たとえここまで来れなくとも動かないなんてあるはずがない。そして、この仕掛けからいって義姉は単身、あの兄を迎え撃つ気なのである。それがどんな修羅場を招くかは言うまでもない。

とにかく夏華は、すぐさま自分の部屋を出るべく足を走らせたところで、

「あーダメダメ」

鏡台にたてかけられた鏡に自分の顔が映ったところで、急いで引き返す。あの昨晚、近藤につけられた擦り傷がいまだ生々しく残っていたのだ。

焦る手つきで引き出しから化粧箱を取り出すと、そこに入ってるファンデーションを取り出し塗りたくる。

少しの時間をかけて後、傷口の赤をファンデーションの肌色に染め上げる夏華。階下に向かおうとして、

「いやいやいやいや、なに普通に俺をスルーしてやがりますか！ そんなまさかの放置プレイ！？ い、嫌だーっ！ 本当は鬱血うっけつし

まくりプラス逆さ吊りプラス頭に血が上りMAXなんですよ？

ただ格好がつかないから我慢してただけで、もうとうに限界はきておったのですよ？ 夏、あ、いやお姉さま！ こっちを振り向いてくださいお願いします」

背後から、わめく男性が泣き言が聞こえる。さっきまで二次元に酔いしれ、随分楽しそうだったというのに置いていかれると見るや

否や、騒ぎだす蓑虫。

かわいそうなので一応ふり返ってみる。そこには潤んだ瞳で救助を待つ、子犬に似た可憐さがあった。というか、それを必死に演出してる愚弟。ちよつと痛々しかった。

「ごめん。今は急いでるからまた後でね。すぐ戻ってくるから」

窓を隔ててるから聞こえにくいだろうが、口を動かし扉へと翻す。刹那、

「い、嫌だーっ！！ 何が悲しくて真冬にアクロバット飛行」

「あーもう、うっさい！」

義弟の大騒ぎを一喝する夏華。ふり返ってみる。

蓑虫がぴょんぴょんと、必死にもがき飛び交っていた。

「はあ」

夏華は一度ため息をつくとき、ベッド下に置かれた自分の学生鞆のところで歩みを進める。次にその中をまさぐると取り出したのは、義弟用にと備えられたマスクと制汗スプレー。

瞬間、彼の顔色がみるみる青ざめていく。加えて後ろに飛び退き、振り子の原理で窓にぶち当たっていた。

「おのれ貴様も闇に堕ちたか！！」

「まだ私、何もやってないんだけど」

勝手にこれから起きるであろうことを悲観し、暴れる義弟。とはいえ、過去にもこういうことは多々あったので、夏華としては慣れたものだった。

「おのれ三次元。この俺をそっち側に誘おうというのか？ 笑止！

この不肖千己。たとえお姉ちゃんっ子の願望に破れようと、退かぬ。退かぬぞお」

やたら騒ぎ立てる義弟を尻目に、夏華はマスクをして防臭対策をする。そして手に持ったスプレーを構え、臨戦状態の面持ちで彼に向かっていった。

「えーっと、何かおかしくなくない？ てかこれ完全にデッドエンドへの伏線じゃね」

「全部、アンタが悪いのよ」

「その台詞キター！　てかそれ以前に選択肢は！？　この土壇場でもあるもんだろ生死分け目の選択肢！」

「だって、臭いんだもの」

「わわわ分かった。これは俺が試されてるんだな。ここで俺が『命乞いをする』を選べば、上手くいくように見えてその実、デッドエンドになると。ならば俺は座して『真実を話す』を選択しよう。断腸の思いだが、背に腹は代えられぬ」

電波を飛ばす義弟は無視して、夏華は窓にかけられた留め金を外すと覚悟を決める。

一気に、窓を開け放った。と同時にスプレーを吹っかけようとしたのだが、如何せん彼から放たれるオーラは尋常でなかった。

思わずたじろぐ夏華。片や義弟はというと、某少年漫画ばりの熱き血潮が宿った瞳で、名ゼリフでも吐かんかのような風格だ。

終には一旦うつむき、溜めまで作る始末。それはあの『都市公園世羅』でのライブ、そこで兄が見せた拳動と瓜二つうりふただった。

そして義弟は顔を上げる。それが始まりの合図。

目に映った彼の顔つきはこれ以上ないくらいに勝気で、これ以上ないくらい自信に満ちたものだった。

（――来る）

「俺は……………夏のパンツをくんかくんかしたことがある！！」

そして非情にもスプレーは、その自信に満ちた瞳へと噴射されたのだった。

第二章 確かな代償（うた）【翌朝の騒動4】

二階にて断末魔の雄叫びがこだまする頃、一階もまた悲惨な状況になってることを心配せずにいられない夏華。ただ当の義弟は頑丈に固定されていたため、ハサミで切る工程は困難を極めた。

ようやく切り終え、小さなその体を屋内に入れた時にはすでに、中々の時間が経っていた。急いで私室を出ると廊下を走り、階段を下りていく。そのまま半円に回り込んでリビングに入ると、そこはもう修羅場なんて言葉では言い表せない緊張感が漂っていた。

兄と義姉がテーブルを挟み、向き合う形で座っている。

この状況ですら家族にとっては稀なこと。だというのに、ここから窺える兄の表情が、取り返しのつかない現状をあからさまに伝えていた。

怒っているなんてものじゃない。鬼の形相なんてものでもない。有無言わさぬ苛烈な眼差し。その張りつめた雰囲気の前にしては、どんな言い訳も口にしてはいけないような、そんな異様なプレッシャーがかけられていた。

現にリビングに入った瞬間から、夏華は固まってしまっている。動くことも、音を立てることも許されない行為のように思えてしまっていた。息をしているのに息苦しい。知らず、呼吸さえも控えられてるようだった。

きっと義姉も同じ心持ちだろう。夏華の視界に映ってるのは彼女の後ろ姿だけだが、現に彼女の体には目に見えての変化がみられる。あれほど強気だった義姉、その肩が絶えず震えてるのだ。

（このままじゃいけない）

幸い兄が向ける視線の対象は、義姉であって夏華ではない。それが夏華に、ほんの少しの勇気をくれた。

夏華は何も言えない代わりにしゃかりきに駆けると、義姉に飛びつく。意味なんてものはなかった。ただ助きたい、力になりたいと

いう気持ちが先に立ってこんな行為に走ってしまったのだ。

一方、後ろから抱きつかれた義姉はというと、思いもよらなかったのか体をビクッと波立たせる。対する夏華はというと、構わず彼女の頬に自分のそれを擦りつけていた。加えてできる限り強く、めいっぱい気持ちを込めて抱き締めにかかる。

「夏？ おはよう」

とりあえずといった感じで声をかけてくる兄。当然、その声色には怪訝なものがあつた。おそらくはいきなり義姉に抱きついたのを、不審に思ったからであろう。分かっている。兄は、自分がどれだけ人を怖れさせてるかまるで分かっていないのだ。

すると、不意に長髪が撫でられた。彼女によって。

「……ありがとう」

と、心のこもった囁きしてくる義姉。その内緒話に夏華がふり向くと、目に映ったのは負けん気たっぷりの彼女その人だった。

（良かったあ）

微笑む夏華、そのほっぺに義姉が口づけをする。それはよくされる愛情表現の一つで、つまりはいつもの彼女になった証でもあった。

第二章 確かな代償（うた）【翌朝の騒動5】

「夏？ とにかく起きたなら、お前の部屋に少しお邪魔させてもらうぞ」

そう告げ、冬治はにべもなくリビングを出ようとする。が、その進行先を塞ぐように手が掲げられた。義姉によって。

「何だ」

兄による冷めた一言が、夏華の胸に突き刺さる。実際、言われているのは義姉なのだが、普段の彼とあまりに違うものだから怖くてならない。

そんな夏華と対称的な義姉は涼しい顔で、攻めの一手に打って出る。これでもかと張りつめた雰囲気を更新する、これ以上ない緩和へと。

そして、それは投下された。放られたその生地は丸まったまま宙を舞うと、三人が見守る中、ふわっとテーブルのど真ん中に軟着陸する。合わせて縮こまっていた柔い形状が開かれ、その正体があらわになる。

レース生地で色は純白。

それは、夏華のパンツだった。

「いやああああ！！」

気づけば絶叫アトラクションばりの悲鳴が、閑静な住宅街を賑わせていった。

片や家にいる夏華は、一瞬にしてその元凶をかき消すと、真っ赤な顔してプルプル震えている。後ろに回された手、その握った拳にはあの下着が極限まで握りつぶされていた。

（最低）

確かに、さっきまでの緊張が嘘のようではある。全くもって効果

観面なのかもしれない。が、夏華にはとても納得できる話ではなかった。

（私を利用したわね、姉さん）

とんだ裏切り行為に及んだ彼女を睨みつける。その横顔はというと、わざとらしく俯かれていた。

そして、義姉がやさぐれた空気感のまま口にした暴露。

それは夏華にとり、生理的嫌悪そのものだった。

「それね……弟の部屋にあったの」

「何ですっ——むぐぐむう!？」

兄そっちのけで物申そうとした口を、義姉の手が塞ぐ。彼女の鼻はひくついており、怒ってるのが目に見えて分かった。

「こんのおバカ。今はそれどころと違うでしょうが。いいからここはお姉ちゃんに任せるの」

「そうしたくてもですね、できないほどにこの話題はタイムリーなのですよ！ ついさきほどですね、パンツ嗅いでたって垂れ込みがあったんですよ。本人から！ 大体これ、ちょっとくらい前に下着ドロに入られたってあの子が騒いでた下着ものじゃないですか。姉さんのもあつたのに何で自分のだけと思ってましたが、まさかあの子の自演だったなんて……一体姉さんは、いつからこのことを知ってたっていうんですか!？」

ひそひそ話で済むはずの内容はいつのまにやら、兄に筒抜けなほどの音量ボリュームになっていた。

第二章 確かな代償（うた）【翌朝の騒動6】

とはいえ、救いだったのは兄が鈍感で且つ、どんな時でも家族を最優先に考えるところ。

「悪いが、俺は用があるんでな」

と、案の定まったく相手にしない兄。一方、義姉としても埒が明かないと思ったのか、夏華の弱点——まだ癒えぬおでこにデコピンをかますと、蹲らせ黙らせる。

その間に再度、兄に向け語りかけたのだった。

「だからそれに関係してる話なの。昨日の夜ね、偶然にも見かけちゃったのよ」

「話が見えないんだが」

「最後まで言わないと分からない、か。了解。その時ね、夏の部屋だけ扉が少し開いてたの。で、私は変に思っただけ扉を開けてみたら……後の説明はいらないわよね？」

「はあ？」

「あーもう！ 了解。もう遠回しに言いませんよはつきり言う。つまりね——ウチの弟はアンタの妹に発情して、夜な夜なパンツを盗み出してはくんかくんかしまくってたってこと！」

「！？ なん」

「何ですってええ！？」

兄の驚きをかき消すほどの仰天でもって、声を荒げてしまう夏華。むろん昨夜は義弟と一緒にいたため、嘘なのは確かなのだが、問題はどこまでが嘘なのかということである。

妙に真実味めいた、生々しい内容に夏華はショックを隠せていなかった。

「で、さすがにそういう現場を押さえた以上、叱らないっていうのは問題じゃない。かといって警察に突き出すなんてことしたくないし。それは冬治も同じ考えよね？」

「それはそうだが、にしたってあの千己がまさかそんなことを？」
「どの千己のこと言ったら、そんな発言になるのよ。どの面切り取ってみせても、千己ってたらムツツリスケベの典型じゃない。まあでも、あの年頃の子にはよくありがちなことよね？ アンタだって実は子供の頃、好きな女の子の縦笛、舐めたりしてたんじゃないの？」

夏華の心情をむげにし、軽口を叩きニヤつく義姉。もう完全に彼女のペースになっていた。

「ありえない。俺は女に惚れたら、まず自分の想いを相手に伝える。お前の時だってそうだったろうが」

「あ」

瞬間、沸騰したヤカンのごとく、ポツと顔を赤らめさせる義姉。それどころか、まるで頭から湯気でも出んばかりに狼狽すると、視線をさまよわせていた。明らかにその落ち着かないさまは、恋する乙女。

（何だろう、この煮えたぎる愛憎は）

本当は微笑ましい光景のはずなのに、夏華はこの甘ったるい雰囲気が増たらしくてならない。自分をダシにして作られたムードに、この上ない理不尽さを感じていた。

「しかしな、それだけのことがあったとはいえ、寒い屋外であんな風に逆さ吊りにするなんて、お仕置きにしては度を越えてるんじゃないか」

そう口答える兄は、どこか自信なさげだった。それもそのはず。こういうデリケートな問題は男性にとり、特に苦手とするところである。

「だから毎度デリカシーがないって言われるのよ。見なさい、夏を。こんなにも震えてるじゃない」

片や自信満々の義姉は、利用できるものは何でも利用する性質らしい。かくいう夏華が体をプルプルさせてるのは、この気に食わないムードに対してであって、決して変質者おとうとを怖れてではない。むしろ

ろ今の夏華なら、喜んで義弟のあの要望に応えそうなものだ。
「ぶっ飛ばして空の彼方」よろしく、お決まりのはっ倒^{ピンタ}しで。

第二章 確かな代償（うた）【翌朝の騒動7】

「そ、そうだったのか。こればかり同じ男としては何ともな。世羅。この問題はお前に任せていいか？」

「……………」

「世羅？」

「ひゃひゃひゃい！？ も、もちろんよ。私に任せといて」

「？ ああ、頼む。もう仕事に行かないとまずい頃合だしな。食事とかもろもろ用意してあるから、後で暖め直して食べてくれ」

なぜか慌てふためく義姉に、時間に追われる兄。もはや夏華は完全に蚊帳の外だった。

一連の話がまとまって後、兄はいったん二階に上がると、すぐ下りてくる。身支度を済ませにいったのだ。現にさっきまでの部屋着とは打って変わって、格式張ったスーツを着こなしている。さらにはネクタイもばっちり締められたというその正装には、どこことなく男の色気を感じさせた。元々が整った顔立ちなので、その端整さに大人っぽいスーツという組み合わせは、お互いが引き立つ仕様のように思える。

つまりは、見惚れんばかりの美しさということ。

「——いい」

と声を漏らす義姉。かくいう夏華も同じ印象だったのだが、ここはあえて口は噤んでいた。やはり納得がいかない。下着を盗まれ、拳句の果てには変態行為に及ばれた被害者そっちのけで展開される、甘酸っぱいムード。

夏華は笑顔でいながらに、この茶番をぶち壊しにするタイミングを虎視眈々と狙っていた。

「じゃあ行ってくる」

そうリビングから見える玄関にて、出かける挨拶をする兄。

「行ってらっしゃい」

と、まるで新婚はやほやのような甘ったるい声で見送る義姉。
そして兄は外へと繰り出し、夏華の内にはどす黒い感情が芽生えたのだった。

片や、そんなことなど知る由もない義姉。嬉しさのあまりか夏華の肩をビシバシ叩きだす。

「ね！ 今の聞いた？ 聞いたわよね！？ 私のこと『世羅』って呼んだのよ、あの冬治が！ ここ何年も名前でなんて呼ばれたことなかったのに、もう私びっくりしすー！？」

刹那、なめらかだった唇の動きがピタリと止まる。いじられても微動だにしない夏華、その真顔に当てられたためであろう。

どうやらようやく、事態の深刻さを呑みこめたようだった。

「姉さん……………ずいぶんと楽しそうですね。私があんなにも卑劣な、痴漢行為に遭ったっていうのに」

「またまたあ、大袈裟な」

軽い口ぶりでご愛嬌とばかり、腕をグリグリしてくる義姉。夏華はそんなおふざけをひと睨みで一蹴すると、彼女の方にふり向く。

「何て野郎なの、その千己ってヤツは！！ そうよね！？ 私もちょうど今そう思ってたところよ」

次いで旗色が悪いと見るや、手のひらを返す彼女。そのお下劣さに挑むように今、姉妹喧嘩の幕が切って落とされる。

「まっ待ちなさい！ アンタ学校は！？」

最後の抵抗とばかり、悪あがきを口にする義姉。そんな逃げ腰な彼女をあしらうべく夏華は腕をふり上げると、壁を指差す。

そこに掛けられてるのは、カレンダーだった。何の変哲もないオーソドックスな一覧表。そこには、今日の日付けも赤色で記載されている。つまりは休日ということ。

「オーマイガッ！」

「姉さん……………あなたという人はあっ！」

ふざけることで問題をうやむやにしようとする義姉に、飛びかかる夏華。

二人の取っ組み合いは地味に長く、それでいてねちっこいものになっていったのだった。

第二章 確かな代償（うた）【目的地に向け移動】

文化の日しかり、勤労感謝の日しかり、一週間の規則的な学校生活を送ってる夏華にとり、たまにやって来る祝日は願ってもないことであり、また持て余すものでもある。何せ日頃つなかりが深いのが極道な人たちであるから、プライベートで遊べる同性の友達など皆無に等しかった。

そんな寂しさを気づかってか、はたまたあの取っ組み合いに対する謝罪の気持ちからか、夏華は義姉に誘われ、指定する場所まで来るように言われた。そこで一緒に遊ぼうということなのだ。

とはいえ、おかしいのはその招かれ方。普通、誰かと遊びに行く場合はどこかで待ち合わせしてから、映画館なり喫茶店なりの目的地に繰り出すようなものである。現に義姉との付き合いは、往々にしてそういうものばかりだった。

なので直に、しかも別々に向かって現地集合しようなんてことは初めてのことである。

（絶対に何か企んでる）

こうあからさまだと、逆にそう気づかせることが彼女の狙いなんじゃないかと穿った見方をしてしまう。少なくともこちらの思っているような展開にならないことは確かだ。それがあの取っ組み合いに対する報復なのか、それとも何かのサプライズなのかは分からない。ただ特にすることない夏華にとって、誰かに誘われるということはそれ自体、甘い誘惑だった。

逆らえない。というか逆らおうものなら家で一人っきりだ。脳裏に過ぎるのは、その結果できた義弟という前例。愛用のノートパソコンを「ミキ」と呼ぶことで、引き籠もりを成功させてしまったような子だ。おそらくはその妙にありがちなネーミングからいって、実在する人物——クラスで気になってる子からの引用であろう。

こういった成れの果てを目の当たりにするにつけ、夏華は喜んで

義姉の計略にかかったのだった。

とはいふものの、指定された場所はおよそ家からすぐそこはいかない距離だった。電車をいくつも乗りつぎ、その度ガタンゴトンという効果音とともにこの身も揺らされていく。祝日ということもあつてか車内は多くの人でごった返しており、立たされるはめになる夏華としては勘弁してよと言いたくなる心境だった。ただでさえ昨日の出来事で疲れてるのに、それに輪をかけておしくらまんじゅうが繰り返されるという始末。これは着いた先に何があるというわけではなく、むしろ着くまでに嫌がらせをしようという魂胆でもあるのではないか、そう嘆きたくなる圧迫感だった。

そうして何とか数時間かけ、言われた駅のホームに降りたつ夏華。その頃にはもう時刻はお昼をすぎていた。遊ぶ前からぐったりしてしまつてるのはどうかと思うが、そうもしていられないので改札を出ると目的地に向かう。義姉が書いてくれた拙いメモを頼りに、あっちこっちに歩き回る自ら。

その後も四苦八苦すること、ようやく辿り着けたのだった。

「嘘、でしょう………これは一体、どういうことなんですか？」

そしてぶつける。当然の疑問を。

その相手は、仕事で家を出たはずの兄なのであった。

第二章 確かな代償(うた) 【テーマパーク1】

「夏？ お前こそ何をやっている？ ここは、俺の職場だぞ」

「職場！？ てかこことて——遊園地、ですよね？」

改めて辺りを見渡してみる。そこら中カップルやら親子連れでごった返しており、近くの券売所でチケットを買っては、きゃっきやしな中に入っていた。見上げると小高い山々を背景に、今にも覆いかぶさってきそうな巨大観覧車が迫力をもって夏華を迎えていた。その視界の端には、もの凄いスピードでうねり狂うジェットコースターが映っており、そこからの女性の絶叫がここまで聞こえてきている。

(ディズニランドほどとはいかないけど、随分な規模なのね)

全体的に中規模ではあるが、個々の設備はなかなかの物だった。

外観がどことなくお伽話風ときばなしふうでメルヘンチックな面があるのはさておき、時代の最先端を見据えてるのは確かだ。現に入場ゲートを通る客らの中には、そこに付属された認証端末に携帯をかざして通る人もちらほら見受けられる。かつての磁気カードを用いるものから、配信されるQRコードを携帯に取りこみ活用する、現在の多元化社会にそった対応がなされている証だった。

「へえ。兄さんは、ここの支配人か何かですか？ にしても落ちぶれましたねえ。仮にもあの華道会を関東一の暴力団組織にのし上げた立役者ですのに」

かくいう夏華は、兄の現在における職業や過去における暴力団時代について、全くといっていいほど教えられなかった。というか教えてくれなかったのだ。理由は横暴。前者はそんなこと気にしてる暇があったら勉強しろとあしらわれ、後者は教育上よろしくないとあしらわれた。

つまりは古風なのだ。いつもは女関係でちゃんぽらんとしてるのに、それが家族に関係することに及ぶと神経をこれでもかと尖ら

せる。

なので夏華の「華道会を関東一の暴力団にのし上げた立役者」との話は、あの『ツインビル 世羅』で義姉が言ってたこと然り、人づてに聞いたものにすぎなかった。

「やはり裏社会を仕切ることとテーマパーク運営とでは、畑がまったく違いますものね。とはいえ、あれだけ混沌とした世界を一手に引き受けていたというじゃないですか。こういう諺あるの知ってます？ 柔よくを制す。兄さんに足りないのは、まさにそういう所なのです。もっとできるはず。だって私の兄ですから」

愛ある叱咤激励のつもりで、言葉を連ねる夏華。対する兄はとうと、首をかしげていた。

「お前なに勝手に勘違いしてるんだ。俺はな、ここの一従業員にすぎない」

「またまたあ。謙遜なんてしないでくださいよ」

「謙遜って、夏は俺がそんなことするような人間に見えるのか？」

「うちの兄が謙遜？ まさか！ 女心一つ分かってない兄さんが自分をへりくだるなんて器用なこと、できるはずないじゃないですか」

「お前、何言ってるんだ？」

「ですね」

「だな」

短い会話が応酬されて後、一時の沈黙が流れる。

「ななな何ですってええ！？」

次いで、お決まりの口癖で仰天する夏華。

「こおら、夏。人前でみっともない」

「な、だ、だっておかしいですよ兄さんなんですよあの！！ 私の兄さんはこう、完全無欠明朗いかつ奇奇怪怪な完ぺき超人の天才少年で」

「だからお前、何言ってるんだ。ちよっと落ち着きなさい」

「いいから支配人をちゃっちゃと出してくださいよさあ！ もう我慢なりません私は。だいたいこのテーマパーク、なんていう名前の

んですか？ どうせろくでもないハゲたおっさんが考えそうなネーミングセンスの――」

とテーマパーク、その入場ゲートにかかる半円形のアーチを目にするや否や、夏華は口をあんぐりさせる。女性なのにはしたないとか、そんなこと言ってられるような状況ではなかった。

花柄でファンタジックなアーチに浮き彫りとなって明示された、この遊園地の名称。それは……

『テーマパーク S E R A 』。

「ファ――

ー！！」

ゴルフのキャディよろしく支配人というのは、夏華にとり最も警告すべき想定外な世羅^{あね}だった。

第二章 確かな代償（うた）【テーマパーク2】

夏華たちが入園した先の光景は、日常から切り離された架空の世界を楽しめるよう意識づけされた空間だった。どこもかしこも現実くさはなく、足元の区分けされたブロックには違和感のない範囲でカラフルなペイントが施されている。所々、マンホールの生活観をごまかすべく、義姉に似たキャラクターロゴがあしらわれていた。近場にあるマスコットのふれあいコーナーでは、義弟そっくりのぬいぐるみにちびっ子たちが襲いかかっている。現在、何かの演目の真っ最中らしく、入ってすぐのステージ上では夏華に瓜二つのぬいぐるみが世界の平和を脅かすらしき悪党に捕まっていた。つまりは絶体絶命の危機。そんなとき図ったようにどこからか、わざとらしいMCからの女声がマイクを通して聞こえてきた。

「まあ大変！ ナツちゃんが悪者たちに捕まっちゃった。このままではいけないわ。さあ、みんなの力を貸してちょうだい。せーので呼んでみましょう。せーのっ！」

「トーヤーー！！」

兄の名前がお子ちゃま達に叫ばれる。

瞬間「とうっ！」というかけ声とともに、兄の顔そっくりの戦隊マスクを被った何某^{なにがし}かが、羽織ったマントをはためかせド派手に登場する。同時に、ドカンと爆発は起こるわ煙は起こるわ火花は散るわで、なぜかそこだけ経費のかけ方が尋常じゃなかった。

戦隊ものを丸パクリするという暴挙に加え、完全なる兄びいき。

（これは酷い）

現に、子供達の「がんばれえ！」とか「負けるなあ！」といったカタルシスを与える間もなく撃退される敵方。一〇秒と待たず世界を救う正義^{ヒーロー}の味方。まさに子供にとり、ひんしゅくの対象だった。

客らを見渡すと、小さな子はポカンと口を開け呆然とし、大人は顔を引きつらせ困った顔をしている。

「トーヤーはいつ見ても強いなあ。一声あげるだけで敵を全滅させちまうんだから……にしては強すぎる気が」

「兄さんのせいでしょうが!!」

本当は彼のせいではないのだが、その責任の一端は必ず担ってると考えざるをえない。とても見過ごせない三文芝居の数々に、夏華はほとほとあきれるばかりだった。

「何ですかこの、姉の道楽により生みだされた自己中な世界は。こんな所で兄さんは働いてるっていうんですか？」

「さっきからお前は何を言ってるんだ。世羅は、ココとは何の関係もないんだぞ」

「————ハア？」

「それにしても夏。先に俺の質問に答えろ。ついさっき、この支配人からの指示だってんでわざわざ仕事を中断してまで外に出たらな、お前とばかり会ったんだよ。これって一体どういうことだ？」

その言葉に夏華はがく然とした。これだけ義姉を匂わすヒントが散りばめられていながら、兄は何一つ分かってないのだ。もうここまでくると鈍感とかそういうレベルで語られるものではない。バカなのだ。救いようのない家族バカ。

この時に至り夏華は、兄を相手にすることの虚しさを悟ったのだ。

第二章 確かな代償（うた）【テーマパーク3】

（でも、そうなるとその展開は姉さんの思惑通りってことになるわね。でも何で仕事中の兄さんを私に会わせたりするんだろう？）

と、兄そっちのけで物思いに耽ることにした夏華。片や、彼はというとその様子に業を煮やしたのか、自己完結することで急場を凌いでいた。

「まあ、でも何だ。二時間は戻ってこないようにとのお達しもあったことだし、ちょっとそこら辺を案内してやるよ。せっかくだしな」「え？ あー、そういうこと」

そこまで話を聞いたところで、ようやく事態が呑みこめてきた。即ちこれは、義姉からのせめてもの気持ち——謝罪の表れなのだろう。今朝のことに対する。

（思えば、というか思い返すだけでも腹立たしいくらい恥をかかされたものね。あの姉でも、さすがにやりすぎたと思ったのかな）

ふと回想されるのは、自分の幼かった頃の記憶。あの頃は兄が親代わりで、「私、将来はパパのお嫁さんになる！」的な発言を、よく彼にぶつけていたものだ。今では全くもって御免^{バカ}こうむる家族だが、あの当時は確かに兄ちゃん子だったのだ。なので彼のことは何でも知りたがっていた。無論、そこに仕事のことは含まれる。そして、その場に義姉も居合わせていた。今思えば、その時からもう恋人同士だったのだろう。

（あの時のこと覚えてて、それで……にしても大判振る舞いね。基本うちの家族じゃ、兄さんの言うことは絶対なのに）

夏華の家系において兄という存在は、家長にして揺るぎない存在。実際、この家族を作りだしたのは彼なのだから、そこは暗黙の了解として見なされていた。当然、他の二人にとってもそれは同じことのはずだ。

と、すればだ。兄が自分の仕事を明かすべきでないとしてるのに、

彼の仕事場に誘った義姉のやり口——騙しわざはその鉄の掟^{ルール}を破つてるようにも感じられる。

しかしながら、

「とりあえず、俺の仕事場から案内するか。すぐそこだからほら、ついてきな」

このようにズボラな兄でもあるので、こちらとしてもあまり意固地にならなくていいようだった。

「夏?」

「え、あ、はいはい」

返事がないことを怪しむ彼に、慌てて夏華は満面の笑みでもって応える。

何はともあれ肩を並べた二人は歩調を合わすと、遊園地の中心部へと進んでいったのだった。

そうして着いた先、人々が行列をなす賑わい処にて、打って変わっての悲劇に見舞われる夏華。あまりに唐突かつ理不尽な出来事に、嘆くことすら忘れる放心ぶりだった。

たまらず身震いもしてしまっている。条件反射の賜物。

そこには、不吉を匂わす黒猫と同列で評価されるのぼりが立てかけられており、印字された店名にはまことに、まことに恐るべき文字列が並んでいた。

『らーめん 夏華』。

そして夏華は、地団太を踏んだのだった。

「お前何やってるんだ? 急に足をバタつかせて」

「……………」

「夏?」

「バツカじゃないの!!!」

溜まり溜まった鬱憤が、ここにきて終に爆発する。堪忍袋の緒が切れた夏華に、怖いものなど何もなかった。

第二章 確かな代償（うた）【テーマパーク4】

「何なんですかこの徹底された嫌がらせは！ 私だってね、多少のことには目をつぶりますよええ！ うちの家族は元がまともじゃないんだから、そりゃ奇人変人どうとでもなれつてもんです。にしたってあんまりじゃないですかこの結末は！ あのおぞましい咀嚼物そしやくぶつと私の名前をコラボもとい一緒にくたにするなんて、人間のすることじゃない。というか人間じゃない。人の皮を被った悪魔よ！」

「なに訳分からんことを言っている？ そんなことよりいいか、ここが俺の職場だ。一応これでも店長やってるんだぞ。でな、実は支配人からの粹な計らいで、この店舗の名前好きにつけても構わないっていうんだ。だから俺はお前の名前を——」

「いいんですよもうそんなの飽き飽きなんです！ 大体いつからコピーライターの要らない世の中になったっていうんですかええ！ 何でもかんでも、とりあえず人名つけりゃいいやなんて安易な考え方が共通認識コモンセンスだとしても？ ちゃんちゃらおかしいわ！」

「分かった分かった。お腹すいてるってことだろ？ まあそういう時ってイライラするもんだからな……並ぼうか」

「並ぶか！！」

わざわざ遠出までして遊びにきた空想世界は、家族のがっかりする一面でいっぱいだった。「今は辛い現実なんて忘れて、夢の世界を目いっぱい楽しみましょう！」的なコンセプトであろう仮想空間は、夏華の中ですでに崩壊の一途をたどるばかり。何より問題なのは、兄という人間は話が通じなくせして、自分の扱い方を誰より熟知しているという所だ。なので放つとくといつのまにやら、彼のペース通りに事が運んでしまうなんてザラである。

（まずい。このままだと非常にまずい。四時間ぶりにまたあれラーメンと対峙しなければならいなんて、きつと私どうにかなっちゃうかもしれない。もう何でいつもこんなんばっか……というか何が悲し

くて、予防接種を受ける子と同じ心境にならなければいけないっていうの！)

望みもしないことのために待たされ、挙句の果てには負の中華スパイラルに巻き込まれようとしている夏華。知らず崖っぷちに立たされた自らを悲観しつつ、とにかく目先の難題を片付けることに終始した。

ある方向めがけ、勢いよく指を差す。そこにあるのは見ず知らずの露店。

「私はあれが食べたいんです！」

それが夏華にとり唯一残された選択肢にして、逃げ道なのであった。

とにもかくにも、露店で雑多な携帯フードを買いこんだ夏華達は、どこか落ち着ける場所を探していた。と、いつてもいつも通り兄に先導される形なので、彼としてはもう行く所は決まってるようである。

第二章 確かな代償（うた）【テーマパーク5】

（よかったあ。よかったあ）

片や夏華はというと、感無量の心持ちだった。気づけば兄に手をつながれてしまってるが、そのことに文句を言えないくらい涙ぐんでいる。さっき行った露店で売られていたのは、チュロスやポップコーンといったジャンクフードで、つまりは大好物だった。

チュロスにいたっては、かじりついては頬をホクホクさせている。幸せすぎる自分がむしろ怖いぐらいだった。

そんなちっぽけな幸せに浮かれてるうちに、どうやら兄の目指す目的地に着いたようだった。そこは、

「観覧車？」

夏華達がたどり着いたのは、あの大観覧車前だった。さすがに目の前にすると、その存在感に圧倒される。特に年季が入ってるわけでもなく新品同様の鮮やかさが、個々のゴンドラによって色とりどりに分けられていた。おそらくこのテーマパークの肝ともいえるアミューズメント施設であろうが、現段階では人もまばらだ。さっきのヒーローショーがあっただのに加え、今がお昼時ということもあるのだろう。

「行くぞ」

「え？ あ、ちょっと」

勝手に決めて、勝手に繋いだ手を引っぱっていく兄。「んもう」と口にしながらも内心、まんざらでもなかった。

とはいえその向こう見ずを許したことが、仇となって夏華に返ってくる。ムードの欠片も感じられない黒色のゴンドラに、彼はあるうことかそのまま乗ろうとしたのだ。対する夏華はこれでもかと踏んばり、その愚行を阻止する。次いで下りてくるピンクのゴンドラに乗ることでしょうやく、ロマンチックな気分を壊さずに済んだのだった。

かくいうゴンドラの中はというと、普通のそれと何ら変わりはないかった。さすがにここまで近代化するのは風情というか趣というか、観覧車に抱くイメージを損なう恐れを感じたためのだろう。二人はゴンドラの揺れに合わせて、向かい合わせで席に座った。

「この観覧車にはな、実はとっておきの言い伝えがあるんだ。頂上までいけばなんと、願えば何でも叶うっていうパワースポットが見えるのさ。もちろん、運がよければの話だけど」

「え、何ですかその興味そそられる話は？ 私好みなんて、兄さんらしくない」

「夏。たまに思うんだが、お前は俺を何だと思ってるんだ？」

「兄さんは兄さんでしょう。それ以上でも、それ以下でもないのですよ」

「わけ分からん」

自然な笑顔で、憎まれ口を叩き合う二人。そこに醸しだされる雰囲気は長年連れ添ってきた家族ならではの、おだやかな暖かみであふれていた。

第二章 確かな代償（うた）【テーマパーク6】

和気あいあいな中、食べかけのチュロスを口いっぱい頬張る夏華。ふわっと、おあつらえ向きにシナモンの香りが鼻腔をくすぐった。夏華は、ももごした顔つきで満面の笑みを浮かべる。その様子に女くさはなく、それでいて一切の飾り気もなかった。

「ほら、口についてる」

と、やおら兄が指で、妹の唇についた砂糖のざら目を拭おうとする。が、その向かってくる手の甲を、すぐさまパチンとはたく夏華。「やめてください。恥かしいにもほどがあります。何歳になったと思ってるんですか？」

「ん？ いいから」

今度は逆らう暇も許さず、夏華は唇をごしごしされる。誰も見えないのに恥かしさから、変なわめき声を上げてしまっていた。

「て何するんですか！」

「これでよしと」

「……兄さん」

完全に会話の体^{てい}をなしてない。もうこうなると暖簾^{のれん}に腕押しだった。夏華としては下手に相手するのも面倒なので、気晴らしに外の景色を眺めてみる。

「うわああ」

そして夏華は、感嘆のため声をついた。まだ上がりかけの外観ではあるが、さっきまでいたテーマパークの敷地が見下ろせるというのは、不思議と高揚感があるもの。少し遠くの方では、まだあのシヨーが繰り広げられてるようで、米粒とまではいかないまでも多くの人だかりが集まっているのが見受けられた。

「夏。反対側も見てください」

そう冬治に声をかけられの、取りも直さずふり返ってみる。

「うわああ」

同じく感動の声を上げる夏華。テーマパークを背にした光景は、まさに自然美の一言だった。

小高い山々、そのてっぺんにされた雪化粧の数々。まだ日が沈まない昼時とあってか差しこむ太陽、その光に当てられた雪の結晶が乱反射し合うことで、煌びやかな情景を映しだしている。雪の粒と粒が宝石のように眩しく輝き、キラキラと見る人を楽しませていた。

「――綺麗」

「喜んでくれて何よりだよ」

「兄さん。そこは違うでしょう。『夏の方が綺麗だよ』なんて言つて、茶化しあうのが男女の常でしょうに」

「お前なに言ってるんだ」

「はい？」

「お前の可愛さなんて、こんなんじゃ計れないだろ」

刹那、ボツという効果音が出んばかりに、顔をみるみる赤らめさせていく夏華。なにぶん、兄は真顔で本当のことしか言わない性分なので、とにかくタチが悪かった。

第二章 確かな代償（うた）『テーマパーク7』

「あのですね、兄さん。少しはオブラートに物事を包むいうことを覚えてください。何でもかんでもズバズバ思ったことを言えはいってんでもないのですよ」

「んん？ それよりいいのか？ もうすぐ頂上だぞ」

相も変わらず、かみ合わせの悪い喋りをする兄。ただ夏華も夏華でパワースポットなるものに興味津々だったため、とりあえずは彼の話に乗ることにした。「どこかなどこかなあ」なんてノリノリに声を上げると、打って変わって席を立ち窓に張りつく。ゴンドラから身を乗り出さんばかりの勢いそのままに、胸躍る気持ちで眼下を望んでいった。

「つてそういうえば、パワースポットってどんな感じのものですか？

やっぱりこの中に特別な山もあるんですかね」

「いやいや。このパークお手製のものだよ。ただよく探さないと見つけられないんだけどな。まあ、だからこそ幸福が訪れるとか噂されてる」

「へ？ それってパワースポットというより、ディズニーの隠れミツキーみたいなものなんじゃないですか。けどそうになると、このパークのマスコットキャラがモチーフになってるってことですかねえ」

そこまで喋ったところで、ふと気づかされる。この『テーマパーク S E R A』におけるマスコットの破綻し具合に。何せ自分たち家族にそっくりなキャラばかりだったので、とても可愛いとは思えない出来ばえだった。

「……まさか」

「おお、見えた見えた。夏、あそこだ。ちょっと山と山の間らへんにあるから見づらいたろうけど」

「あの兄さん、ちょっとお聞きしたいことが」

「そんなこと言ってる場合か？ またすぐ山に隠れちゃうぞ」

「えっ!？　ここまできて見られないのはさすがに勘弁です。どこらへんにあるのですか？」

正直、一抹の不安は拭えないのだが、急かされる窮状がそれに蓋をする。夏華は兄が指を差し示す方角へとやおら目を向けたのだった。

「あ」

そして見つける。ほんのひと時ではあるが、確かに大観覧車の頂上でないと視界に入ってこない所に、それを。

それは山岳の死角にあった。四体の石像。遠目ながらうつすらと輪郭が分かる程度のそれは、目を凝らさなければ気づきようのない希薄さである。なので当然、ここからでは顔つきや大きさといった細部までは検討もつかないはずだった。が、それはあくまでこの家族の一員でない場合に限ってのこと。

夏華にはそれぞれの石像が誰を示してるか、漠然とだが確信をもって感じられた。なぜなら、もし自分が義姉と同じく、この四人家族をモチーフに石像を描くとしたら、配置は自ずと決まってるようなものだから。

山々の合間に、白雪を頭にかぶった四体の石像。

そこには、石像の手を引く石像あねがいて、石像の背を押す石像おとうとがいて――

(姉さんも同じこと、思ってたのね)

その光景は『都市公園 世羅』でライブ終了後、しみじみ思い描いた家族関係とほとんど一緒だった。ただ一つを除いては。

山々の合間に、絡められる三体の石像。

そこには、石像あににぴったり寄り添うようにしている石像だれかしらの存在も認められたのだった。

「……………」

ここからでは、それが誰なのかは分からない。どう兄と絡み合っ

てるかなんて想像もつかないし、それが自分だとは断言できなかった。けれども、そうなのかなと思わずにいられない。

映る絶景の中、不自然にたたずむ人工物。それは人にとり非難の対象でもあろうが、夏華にとり胸ふるわすだけの、家族愛あふれる情景だった。

第二章 確かな代償（うた）【テーマパーク8】

「兄さん。私ね――」

夏華は非日常的な雰囲気当てられたせい、普段なら恥かしくて言えないことも、つい口を滑らしたくなっていった。ともするとこういう本音で話せるようなムードが、ひいては言い伝えにある、願い事が叶えるためのお膳立てになってるのかもしれない。要は、願いごとを叶えるも叶えないも自分次第ということなのだ。

そうして夏華は口にする。

ずっと言えなくて、けれども言いたかった、自らの心の内を。

「――兄さんのことが、大好きなのですよ」

「夏？ 急にどうした？」

「その質問は無粋ってモンです。なのでお答えしません」

「なんだそりゃ。じゃあ、俺もお返しに一つ」

そう言うのと、慣れた手つきで夏華を抱き込む兄。次いで発せられた一言は、彼ならではの使い古された常套句だった。

「夏……愛してる」

「はいはい」

兄による熱のこもった言葉を、軽く受け流す夏華。何せ物心つく前から事あるごとに言われてきたため、今ではくどいを通り越してありきたりなことになっていた。ただこのタイミングの場合、妙にうれしく感じるものだから、ムードがもたらす効果というのは計り知れない。

気づけば夏華たちのゴンドラは頂上を過ぎ、醍醐味である秘密スポットは見えなくなっていく。

そうしてまた一つ、誰か^{なつか}しらの願い事が叶い、言い伝えに信憑性が増したのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9099w/>

歌の力～混沌に咲く絆（はな）～

2011年12月1日18時50分発行